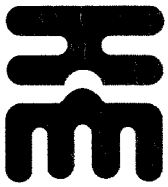

千葉工業大学

大学院学生生活アンケート
2017年
(報 告 書)

平成30年3月

学生委員会

ま　え　が　き

本年も大学院生を対象とした「学生生活アンケート」調査の集計を無事に終え冊子の発刊ができました。先ずは、ご協力いただいた教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

大学院生は研究活動が主であるため、本調査項目も勉学や研究に関するアンケートとなっております。また、継続性を持たせるためにアンケート項目は変えずに実施しました。これまで、アンケートの回収率は 50%台で、目標の数値である 80%にはほど遠い数値でありましたが、一昨年は 72%となり、昨年と今年は 76%となり、目標の 80%に近づいて参りました。学生委員会では、できるだけ多くの学生の声を聞いていこうと考えておりますまで、アンケート回収率の向上にご協力をお願いいたします。本調査結果が今後の大学院教育・研究指導に反映されますことを期待いたします。

平成 30 年 3 月

学生委員会委員長　鈴木　　進

＜ 目　次 ＞

まえがき
目　次
調査実施の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
回収状況・・ 6
調査項目の集計とその分析結果
＜Ⅰ＞プロフィールについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
居住形態／主たる学費支弁者
＜Ⅱ＞入学、授業等について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
建学の精神の認知度／大学院進学情報の内容／大学院進学情報の公開時期／修士課程進学検討時期／博士後期課程進学検討時期／入学希望動機／専攻選択の要因／大学院進学に際し、「大学院 Navi」が契機となったか？／在籍専攻の満足度／教育課程･授業時間割の満足度／教育課程・授業時間割の改善点／／授業の満足度／授業の難易度／授業への希望／特別講義開講の認知度／必要な基礎的知識等／英語によるコミュニケーション能力習得法で重要なこと／1週間の研究時間／研究室の演習・ゼミ等の満足度／研究室の演習・ゼミ等不満の理由／研究環境の満足度／研究環境不満の理由／学会発表の回数／学会誌等に掲載された論文数／国際会議での講演もしくはポスター発表の回数／大学院修了までに学会発表を行う予定の回数／ティーチング・アシスタント制度について
＜Ⅲ＞学生生活について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
学生生活の目的／クラブ、サークルの加入状況／クラブ、サークル活動を行う目的または目標／クラブ、サークルの１日の平均活動時間／ボランティア活動への参加／ボランティア活動に参加する（した）理由／海外留学／「留学したいが理由があってできない」、「留学したくない」と解答した理由／現在抱えている悩みや問題／悩みや問題の相談／ハラスメント防止のための委員会や相談員の認知／喫煙の有無／喫煙のよる健康への影響の認識／喫煙のよる受動喫煙の認識／禁煙の意志／キャンパス内全面禁煙
＜Ⅳ＞進路について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
将来の進路／民間企業への希望業種／民間企業への希望職種／職業選択の重視度／学部時代の就職活動／就職活動の有利性／職業観教育(キャリア教育)科目の取組み／職業観教育(キャリア教育)科目の必要性／自分自身によるキャリアアップの実施状況／キャリア支援(進路支援)充実の希望
＜Ⅴ＞アルバイトについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
アルバイトの有無／アルバイトをする最も大きな理由／アルバイトの１週間における日数／アルバイトを通じて得られたもの

＜Ⅵ＞図書館について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図書館の利用頻度／図書館の利用目的／充実を希望する資料／図書の貸出日数及び冊数／シラバスに掲載されている参考書の利用頻度／レファレンスサービスの利用経験／日本大学生産工学部・東邦大学及び神田外語大学の図書館利用／希望図書の購入申し込み制度／電子ジャーナルの利用経験／オンラインデータベースの利用経験／電子ブックの利用経験／1 年間に読んだ本の冊数
＜Ⅶ＞学生食堂・購買部について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
学生食堂の利用頻度／学生食堂の満足度／購買部の利用頻度／購買部の満足度
＜Ⅷ＞施設・設備について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
新習志野校舎・津田沼校舎の駐輪場／新習志野校舎・津田沼校舎の談話室／改善希望の施設・設備
＜Ⅸ＞大学への要望について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
教育関係への要望／福利厚生・施設への要望

調 査 実 施 の 概 要

この調査は、修士・博士後期課程の全学生を対象に実施した。基本的な考えは昨年度のアンケート調査と同じである。また、昨年度同様、回答率を上げるため各研究室の学位論文指導教員に調査の実施を依頼した。

調査は、学生個人を特定出来ないように配慮し、専攻、学年、男女別の識別はできるようにした。

調査項目は、次の 9 項目とし、それぞれに設問を設けた。

Ⅰ　プロフィールについて

学年、専攻、、性別、居住、学費支弁者等基礎的事項 5 小項目について質問した。

Ⅱ　入学、授業等について

建学の精神の認知度、進学検討時期、入学希望動機、専攻選択の要因等 27 小項目について質問した。

Ⅲ　学生生活について

学生生活の目的、ボランティア活動への参加、海外留学に対する考え等 16 小項目について質問した。

Ⅳ　進路について

将来の進路、民間企業への希望業種、職業選択の重視度等 10 小項目について質問した。

Ⅴ　アルバイトについて

アルバイトに関する 4 小項目について質問した。

Ⅵ　図書館について

利用頻度、利用目的等 12 小項目について質問した。

Ⅶ　学生食堂・購買部について

食堂、購買、教室内の清掃に関する 4 小項目について質問した。

Ⅷ　施設・設備について

駐輪場、談話室の 2 小項目について質問した。

Ⅸ　大学への要望について

教育関係、福利厚生・施設関係の 2 項目について質問した。

この調査を通して一人でも多くの教職員の方々が、学部学生の学生生活アンケート調査結果とこの調査結果を活かし、大学院生がより良い学生生活をおくれるための一助として活用いただければ幸いです。

最後に、今回のアンケート実施にあたり、多くの教職員のご理解とご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

回 収 状 況

今回の調査は、大学院生 540 名に対して実施し、412 名から回答があった。全体の回収率は昨年度と同率の 76%であった。昨年度と回収率を比較すると、修士課程 1 年生 83%（5%増）、修士課程 2 年生 79%（1%増）、博士後期課程 29%（25%減）であった。近年、この学生生活アンケート調査の重要性が理解され、全体で 70%後半の安定した回収率を記している。今後も指導教員のご理解とご協力が得られるような方策を検討し、全体で 80%以上の回収率を確保することを目標としたい。

		①＜修士課程1年＞			②＜修士課程2年＞			③＜修士課程1・2年＞			④＜博士後期課程＞			③＋④＜全体＞		
		回答数	配布数	回答率	回答数	配布数	回答率	回答数	配布数	回答率	回答数	配布数	回答率	回答数	配布数	回答率
工学研究科	機械サイエンス専攻	42	50	84 %	36	41	88 %	78	91	86 %	0	0	0 %	78	91	86 %
	電気電子情報工学専攻	41	45	91 %	31	41	76 %	72	86	84 %	0	0	0 %	72	86	84 %
	生命環境科学専攻	29	37	78 %	30	38	79 %	59	75	79 %	0	0	0 %	59	75	79 %
	建築都市環境学専攻	25	28	89 %	32	39	82 %	57	67	85 %	0	0	0 %	57	67	85 %
	デザイン科学専攻	16	23	70 %	11	21	52 %	27	44	61 %	0	0	0 %	27	44	61 %
	未来ロボティクス専攻	24	34	71 %	22	26	85 %	46	60	77 %	0	0	0	46	60	77 %
	工学専攻	0	0	0 %	0	0	0 %	0	0	0 %	11	37	30 %	11	37	30 %
情報科学研究科	情報科学専攻	22	23	96 %	16	20	80 %	38	43	88 %	2	3	67 %	40	46	87 %
社会システム科学研究科	マネジメント工学専攻	16	18	89 %	4	4	100 %	20	22	91 %	2	12	17 %	22	34	65 %
回答者合計		215	258	83 %	182	230	79 %	397	488	81 %	15	52	29 %	412	540	76 %

[調査項目の集計とその分析結果]

すべての設問にお答えください。
回答は添付回答用紙(マークシート)に記入し、提出してください。

＜Ⅰ＞プロフィールについて

Ⅰ-① 何年次ですか。

1. 修士課程１年次
2. 修士課程２年次
3. 博士後期課程

Ⅰ-② 専攻は、どこですか。

1. 機械サイエンス専攻
2. 電気電子情報工学専攻
3. 生命環境科学専攻
4. 建築都市環境学専攻
5. デザイン科学専攻
6. 未来ロボティクス専攻
7. 情報科学専攻
8. マネジメント工学専攻
9. 工学専攻

Ⅰ-③ 性別は、どちらですか。

1. 男性
2. 女性

Ⅰ-④ あなたは現在、どちらから通学していますか。

1. 自宅から通学
2. 自宅外(学生寮を除く)から通学
3. 学生寮(大学が管理・運営する寮)から通学
4. その他

Ⅰ-⑤ 学費はどのように払っていますか。

1. 全額親から
2. 親からが主で、不足分を奨学金やアルバイトから
3. 奨学金やアルバイトからが主で、不足分を親から
4. 全額奨学金やアルバイトでまかなう
5. その他(わからないを含む)

Ⅰ-④　居住形態

居住形態は、全体で約 77%の学生が「自宅から通学」と回答しており、千葉県ならびに近県の自宅から通学している学生が多いことを示している。なお「自宅から通学」率全体で 2 ポイントの減少となっており、前年の 4 ポイントの増加と比較すると増加傾向がひと段落した感がある。博士後期課程回答者は自宅通学が実人数で半減しており、結果として自宅外の比率が高くなっている。

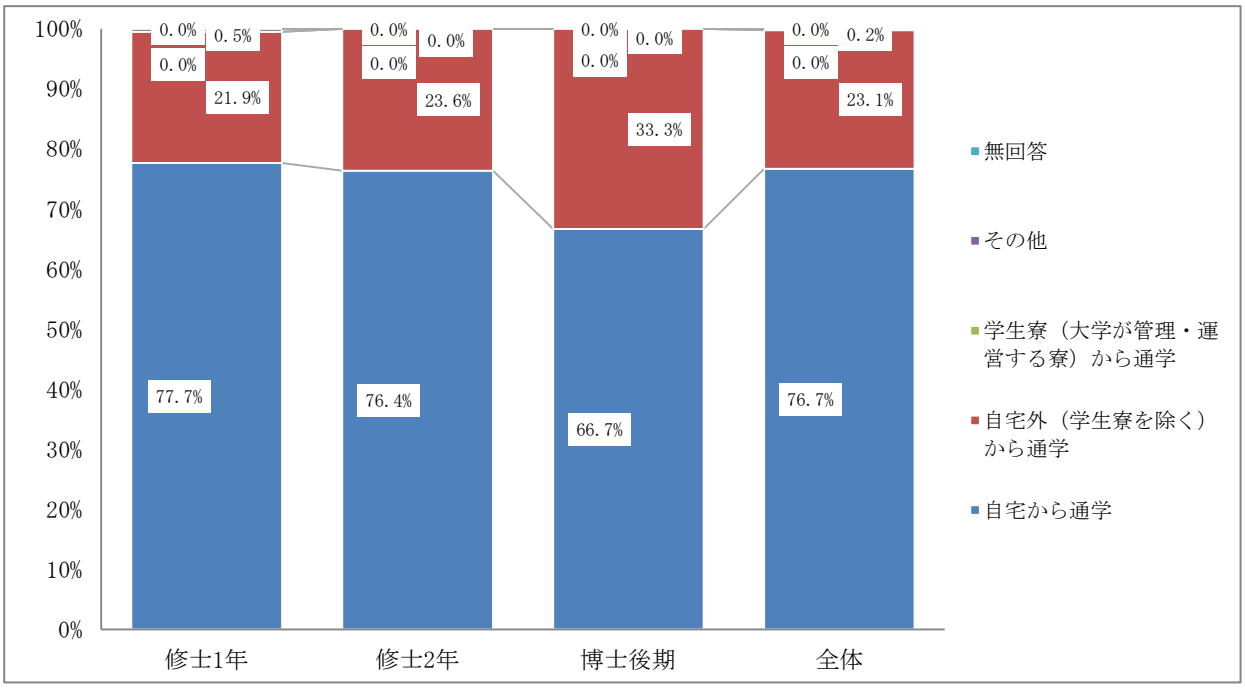

図 1.4　居住形態

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 自宅から通学	167	139	10	316
2. 自宅外（学生寮を除く）から通学	47	43	5	95
3. 学生寮（大学が管理・運営する寮）から通学	0	0	0	0
4. その他	1	0	0	1
無回答	0	0	0	0

Ⅰ-⑤　主たる学費支弁者

修士課程では、主たる学費の支弁者を「親」と回答した 1 年次、2 年次はどちらも約 59%となり、昨年と比較すると 1 年次は全額親の比率が 3 ポイント減少している。また、「親からが主で、不足分を奨学金やアルバイト」を加えると 1 年次は 71%、2 年次は 72%となり、「奨学金やアルバイトからが主で、不足分を親から」あるいは「全額奨学金やアルバイトでまかなう」と回答した割合を大幅に上回った。これらの数字は前年度と比較してほぼ横這いである。博士後期課程では、「全額親から」は 26.7%となり修士課程とは大きく異なる傾向が見られた。なお大学院全体を前年と比較すると「全額親から」が横這いとなった。2 年前は 8 ポイントの上昇であったため、「親」への依存度上昇がここ 2 年ほど止まった形である。

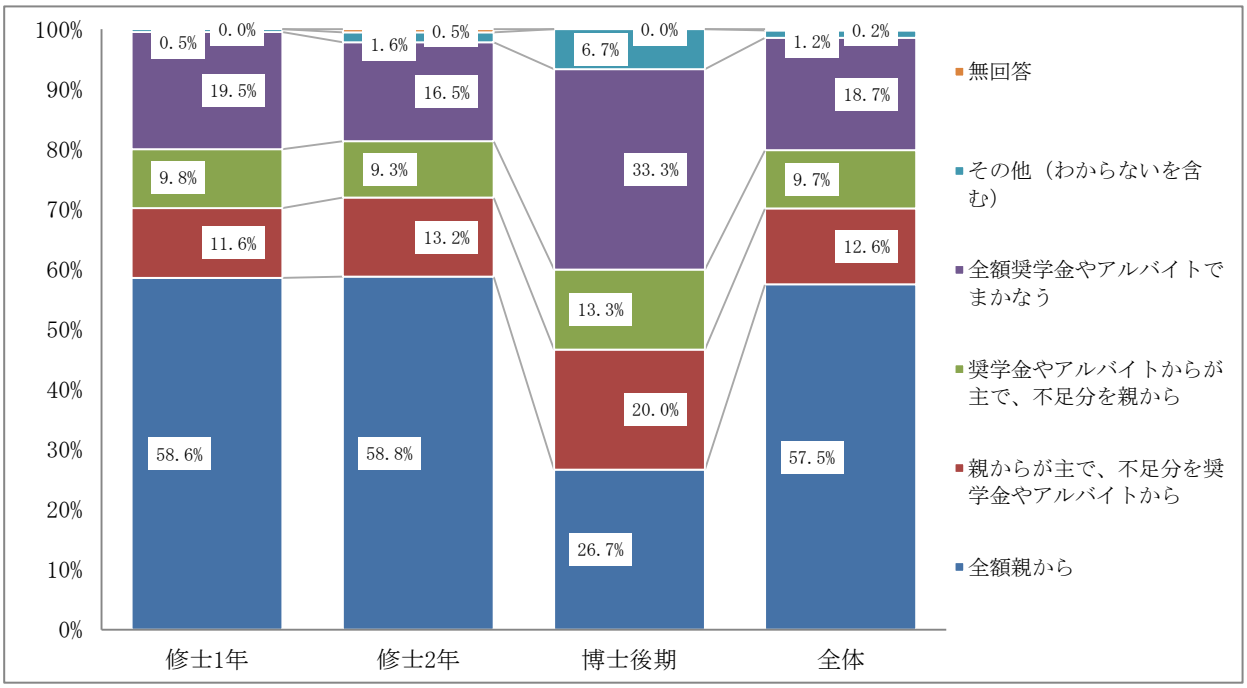

図 1.5　主たる学費支弁者

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 全額親から	126	107	4	237
2. 親からが主で、不足分を奨学金やアルバイトから	25	24	3	52
3. 奨学金やアルバイトからが主で、不足分を親から	21	17	2	40
4. 全額奨学金やアルバイトでまかなう	42	30	5	77
5. その他（わからないを含む）	1	3	1	5
無回答	0	1	0	1

＜Ⅱ＞入学、授業等について

Ⅱ-① 本学の建学の精神「世界文化に技術で貢献する」を知っていますか。

1. 言葉と意味を知っている
2. 言葉は知っているが意味は知らない
3. 言葉も意味も知らない

Ⅱ-②-(1) 本学大学院を受験するに際して、本学からの大学院進学についての情報内容は適切でしたか。

1. 内容は適切だった
2. 内容は多かった
3. 内容は不足していた
4. どちらとも言えない

Ⅱ-②-(2) 本学大学院を受験するに際して、本学からの大学院進学についての情報公開時期は適切でしたか。

1. 公開時期は適切だった
2. 公開時期は遅かった
3. 公開時期は早かった
4. どちらとも言えない

Ⅱ-②-(3)本学大学院修士課程に進学することを希望したのはいつですか（修士課程の学生のみ回答してください）。

1. 大学に入学する前から
2. 学部の 3 年次までの間
3. 学部の 4 年次になってから
4. 卒業後

Ⅱ-②-(4)本学大学院博士後期課程に進学することを希望したのはいつですか（博士後期課程の学生のみ回答してください）。

1. 学部の 3 年次までの間
2. 学部の 4 年次になってから
3. 修士課程に進学後
4. 修士課程の 2 年次になってから
5. 修士課程修了後

Ⅱ-③ 本学大学院に入学した動機は、どれにあたりますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 高度な専門的知識・技術の修得
2. 大学の先生や友人などの勧め
3. 親、兄弟、親戚の勧め
4. 社会的評価が高い
5. 教員と教育研究設備が優れている
6. 将来の就職を考えて
7. 本学の伝統や雰囲気が気に入って
8. 先輩が大学院で活躍している様子を見て
9. 大学院を修了した先輩が社会で活躍している様子を見て
10. 卒業研究をさらに継続させたかった
11. 工学系は、大学院に進学するのが当然だと考えて
12. 就職が決まらなかった
13. その他

Ⅱ-④ 専攻の選択に際し、どのような点を重視しましたか（複数回答可）。

複数回答可

1. 最先端の学問が学べる
2. 自分が惹きつけられた学問分野である
3. その専攻の教員に魅力があった
4. 社会のために役立つ分野である
5. 就職の際に有利である
6. 将来なりたい職業に就くのに必要である
7. 選択に際し特に考えなかった
8. 学部時の専門と直結している
9. その他

Ⅱ-⑤ 大学院の進学を決定する際に、「大学院Navi」はそのきっかけになりましたか（修士課程の学生のみ回答してください）。

1. きっかけになった
2. どちらとも言えない
3. きっかけにならなかった
4. 「大学院Navi」を見たことがない

Ⅱ-⑥ 当初の期待していた専攻像に対して、現在在籍している専攻には満足していますか。

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満である
5. 不満である

Ⅱ-⑦ 現在の教育課程や授業時間割に満足していますか。

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満である
5. 不満である

Ⅱ-⑧ 現在の教育課程や授業時間割にどのような改善すべき問題点があると思いますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 授業時間割の組み方に問題がある
2. 全体的に授業科目の開講数が少ない
3. 所属研究分野に関する授業科目の開講数が少ない
4. 教養系の授業科目の開講数が少ない
5. 授業科目の内容や成績評価方法が明確でない
6. 全体的に授業科目の開講数が多い
7. 受けたい授業は TA 業務の時間帯と重複
8. その他

Ⅱ-⑨ 全般的に授業の満足度についてどう思いますか（修士課程の学生のみ回答してください）。

1. 全科目満足している
2. 大部分の科目は満足している
3. 半分くらいの科目は不満である
4. ほとんど全科目不満である

Ⅱ-⑩ 全般的に授業の難易度についてどう思いますか（修士課程の学生のみ回答してください）。

1. 内容が難しい授業が多い
2. 内容が難しい授業がやや多い
3. 適当である
4. 内容がやさしい授業がやや多い
5. 内容がやさしい授業が多い

Ⅱ-⑪ 授業について希望があるとしたら、どれに該当しますか【修士課程の学生のみ回答してください（複数回答可）】。

複数回答可

1. 授業に工夫をこらし理解しやすくする
2. 授業がやさしすぎるのでもっと高度なものにする
3. 授業に熱意をこめる
4. 教科書、プリントなどもっと活用する
5. 教科書は読むだけとかノートをとらせるだけの授業はやめる
6. 学生との討論などもっと学生の興味を引き出す
7. 話し方を明確にして良く聞き取れるようにする
8. ノートがとれるように板書をきちんとする
9. 視聴覚機器をもっと活用する
10. 特に希望はない
11. その他

Ⅱ-⑫-(1)大学院において身に付けておくべき基礎的な知識及び技術について、全専攻共通に学習できる「特別講義」が後期から開講されることを知っていますか。

1. 知っている
2. 知らない
3. 知らなかったがこれを機会に履修を希望したい

Ⅱ-⑫-(2)大学院において身に付けておくべき基礎的な知識及び技術についてどのようなものが必要だと思いますか。

1. 特許や知的財産権に関する法律
2. プレゼンテーション能力
3. 研究論文等の書き方
4. 英文による研究論文等の書き方
5. 英語コミュニケーション能力
6. 科学技術者としての倫理観
7. 研究・発明とビジネスの関係
8. その他

Ⅱ-⑬ 大学院学生の英語におけるコミュニケーション能力習得法について、どのようなことが重要であると思いますか。

1. ネイティブスピーカーによるライティング技能の指導を希望する
2. ネイティブスピーカーによるプレゼンテーション技能の指導を希望する
3. 大学院在学中に外国留学できる制度を充実する
4. 英語による授業科目を増やし，専門科目の修得と同時に英語能力の向上を図れるような授業形態を希望する
5. 大学院在学中に授業等で英語によるコミュニケーション能力を飛躍的に向上させることは困難なので現状のままで良い
6. その他

Ⅱ-⑭ 1週間当たり行う研究時間の平均は、どれくらいですか。

1. 10時間未満
2. 10時間～19時間
3. 20時間～29時間
4. 30時間～39時間
5. 40時間以上

Ⅱ-⑮ 研究室の演習・ゼミに満足していますか。

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満である
5. 不満である

設問Ⅱ-⑮で『4.やや不満である』、「5.不満である』と回答した方は、次の設問にも回答してください。
その不満の主な理由は、何ですか（複数回答可）。

複数回答可

1. 研究指導方法が良くない
2. 研究指導時間が少ない
3. 研究室が狭い
4. その他

Ⅱ-⑯ 現在の研究環境に満足していますか。

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満である
5. 不満である

設問Ⅱ-⑯で『4.やや不満である』、「5.不満である』と回答した方は、次の設問にも回答してください。
その不満の主な理由は、何ですか（複数回答可）。

複数回答可

1. 研究設備が不足している
2. 研究設備が古い
3. 実験室・研究室が狭い
4. その他

Ⅱ-⑰-(1)これまでに学会発表（国際会議を含む）を通算で何回行ないましたか（既に発表することが決定しているものも含みます）。

1. 0回
2. 1回
3. 2回
4. 3回
5. 4回
6. 5回以上

Ⅱ-⑰-(2)これまでに学会誌等に掲載された論文（国際会議プロシーディングスも含む）は何編ありますか（既に掲載されることが決定しているものも含みます）。

1. 0編
2. 1編
3. 2編
4. 3編
5. 4編
6. 5編以上

Ⅱ-⑰-(3) これまでに国際会議での講演もしくはポスター発表をしたことがありますか。（既に講演もしくはポスター発表が決定しているものも含みます。）

1. 0回
2. 1回
3. 2回
4. 3回
5. 4回
6. 5回以上

Ⅱ-⑰-(4)今現在、大学院修了までに学会発表（国際会議を含む）を何回行なうことを予定していますか。

1. 0回
2. 1回
3. 2回
4. 3回
5. 4回
6. 5回以上

Ⅱ-⑱ TA（ティーチング・アシスタント）制度についてどう思いますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 経済支援としてよい制度である
2. TAをすることは自分の勉強にもなる
3. 勉強・研究に支障がある
4. 同じ時間なら通常のアルバイトをする方がよい
5. 何ともいえない
6. その他¥

Ⅱ-①　建学の精神の認知度

全体で約 7 割弱の大学院生が、建学の精神の「言葉と意味を知っている」と回答しており、平成 25 年より制定した建学の精神「世界文化に技術で貢献する」が大学院生に浸透していることがわかる。しかし、「言葉は知っているが意味は知らない」と回答した大学院生は全体で約 2 割強であり、今後も、引き続き学生全員に対して本学の建学の精神を心に刻んでもらう取り組みを充実させる必要がある。

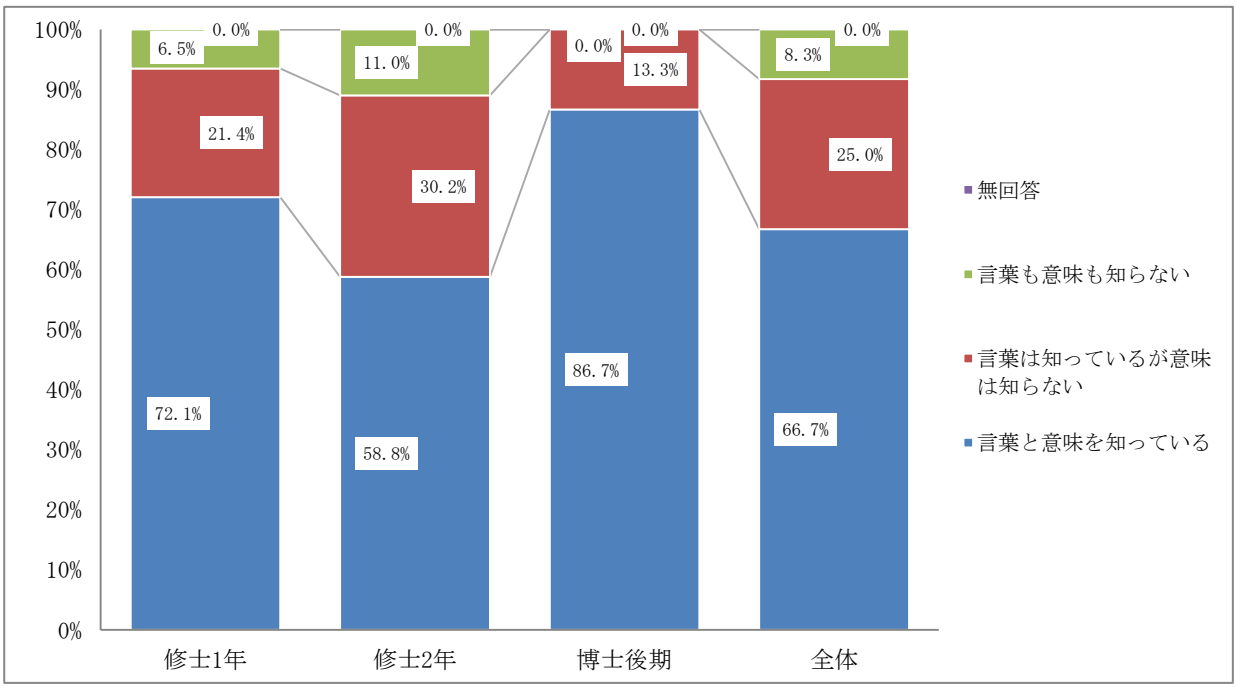

図 2.1　建学の精神の認知度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 言葉と意味を知っている	155	107	13	275
2. 言葉は知っているが意味は知らない	46	55	2	103
3. 言葉も意味も知らない	14	20	0	34
無回答	0	0	0	0

Ⅱ-②-(1)　大学院進学情報の内容

大学院進学に関する情報について、全体では「内容は適切だった」と答えた学生が７割弱であったが、博士後期課程の学生に限っていえば６割程度であり、今後の改善が望まれる。

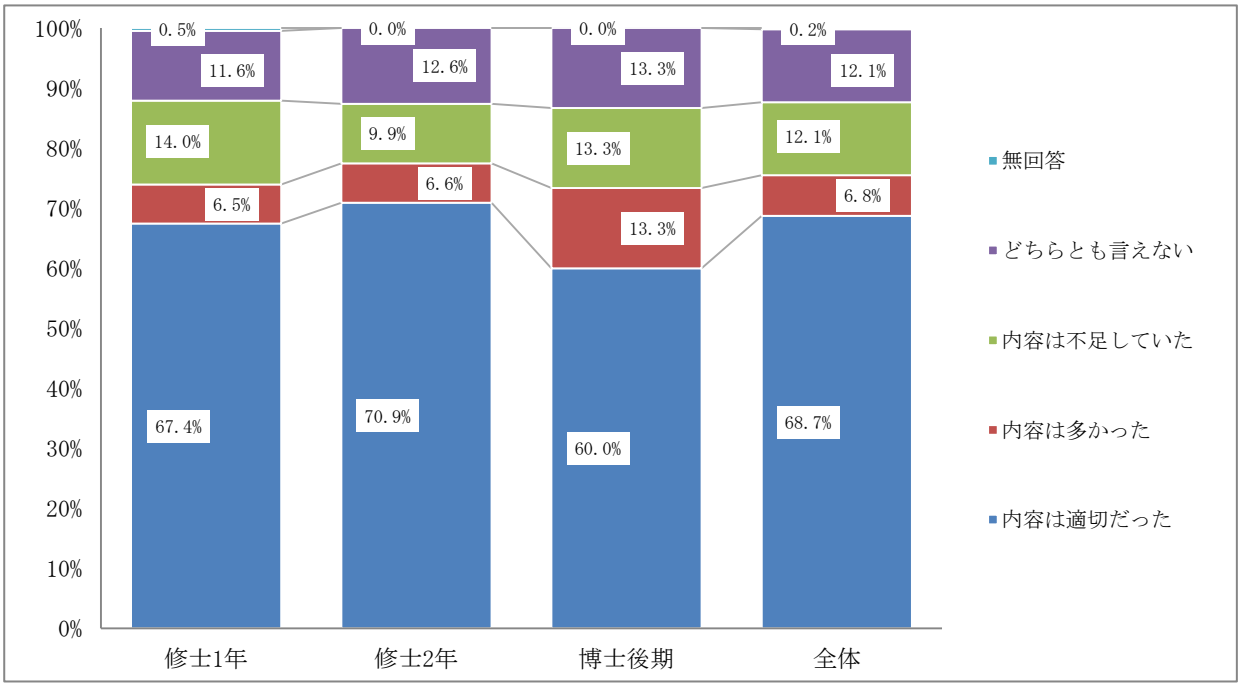

図 2.2.1　大学院進学情報の内容

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 内容は適切だった	145	129	9	283
2. 内容は多かった	14	12	2	28
3. 内容は不足していた	30	18	2	50
4. どちらとも言えない	25	23	2	50
無回答	1	0	0	1

Ⅱ-②-(2)　大学院進学情報の公開時期

学部生に大学院進学に関する情報を伝える機会として、入学時のガイダンス時、3 年次・4 年次の進路ガイダンス時などが挙げられるが、7 割程度の大学院生が「公開時期は適切だっと」と回答しており、「早すぎた」「遅い」との回答はごく少数であった。しかし、「遅い」とする学生が「早い」と回答した学生より多いので、学部学生に対して、大学院の進学情報は早めに公開した方が良いと思われる。また、博士後期課程の学生では、「遅かった」と回答した学生が 2 割程度おり、早い段階から、博士後期課程の情報を公開する必要があると考える。

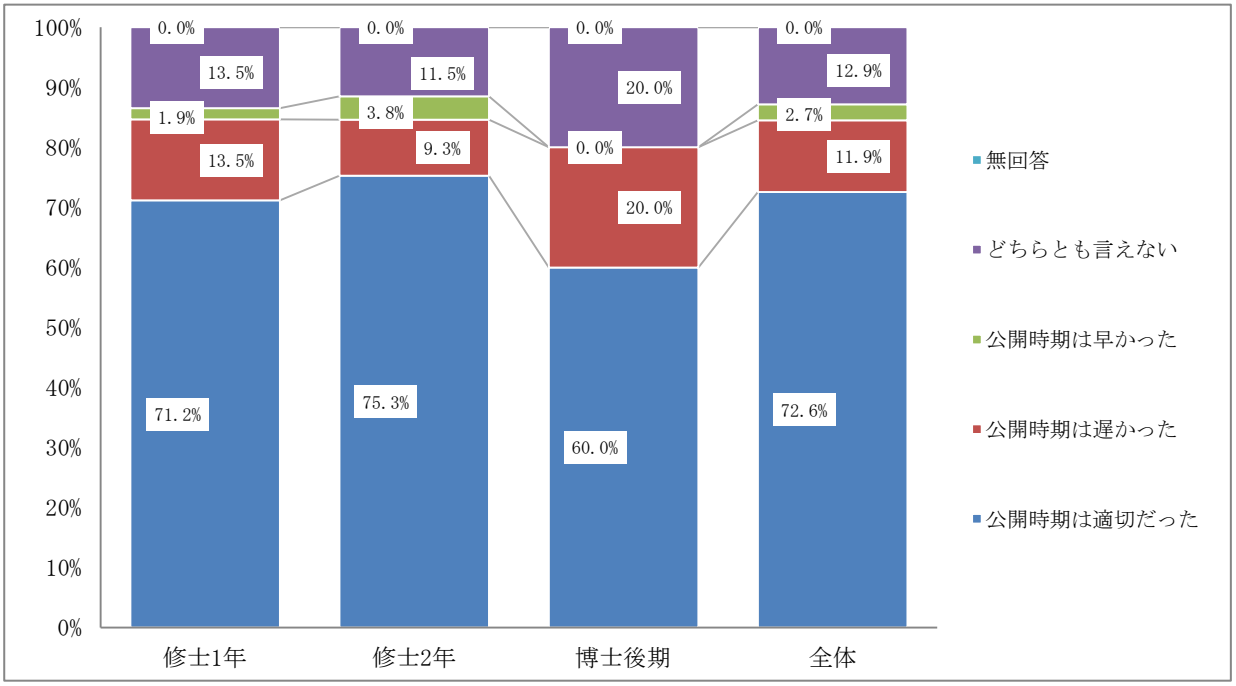

図 2.2.2　大学院進学情報の公開時期

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 公開時期は適切だった	153	137	9	299
2. 公開時期は遅かった	29	17	3	49
3. 公開時期は早かった	4	7	0	11
4. どちらとも言えない	29	21	3	53
無回答	0	0	0	0

Ⅱ-②-(3)　修士課程進学検討時期（修士課程の学生のみ回答）

学部入学前から大学院への進学を考えていた学生は 3 割程度となっており進学意欲の高い学生が学部に入学してきている傾向がうかがえる。今後、学部学生だけでなく、高校生にも積極的に大学院の情報公開を行うべきであろう。

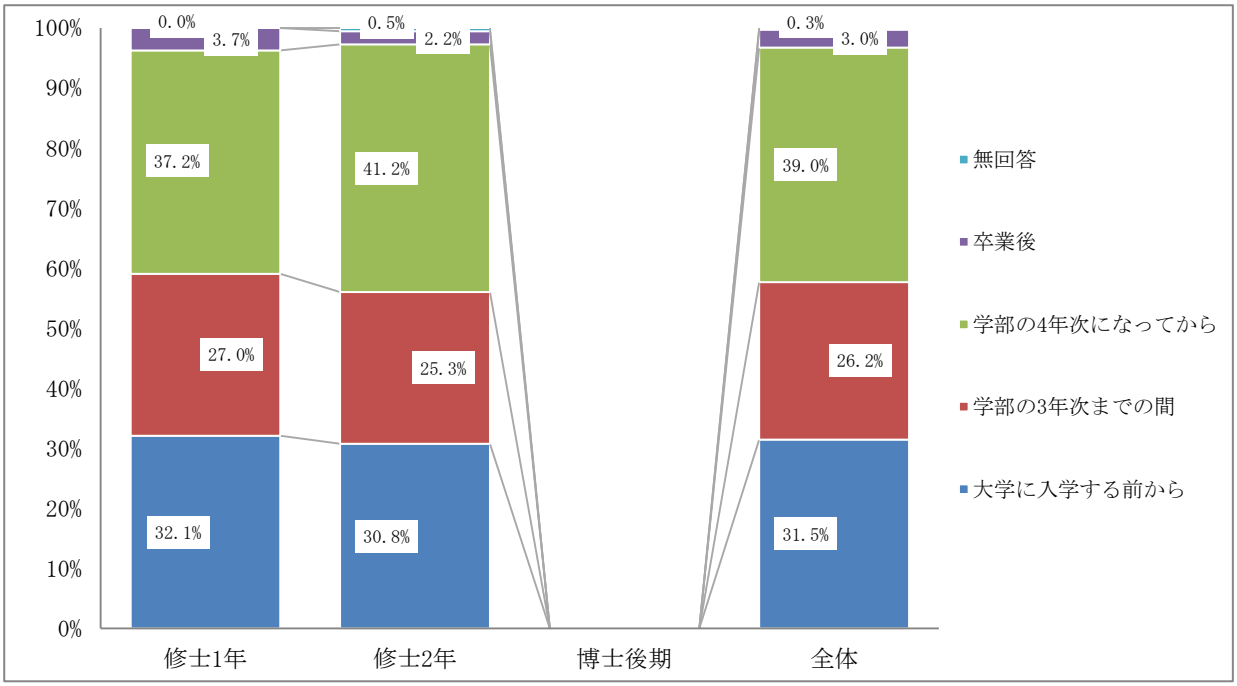

図 2.2.3　修士課程進学検討時期

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 大学に入学する前から	69	56	－	125
2. 学部の 3 年次までの間	58	46	－	104
3. 学部の 4 年次になってから	80	75	－	155
4. 卒業後	8	4	－	12
無回答	0	1	－	1

Ⅱ-②-(4)　博士後期課程進学検討時期（博士後期課程の学生のみ回答）

最も多い回答は、「修士課程修了後」で 40.0%であった。次に回答数が多いのが 26.7%で「修士課程の２年次になってから」である。本学の研究レベルを高める貴重な人材である博士後期課程進学者をさらに増加させるためには、早めに博士後期課程への進学を検討できるように、学部学生へ常日頃から博士後期課程の情報を伝えていくべきであろう。

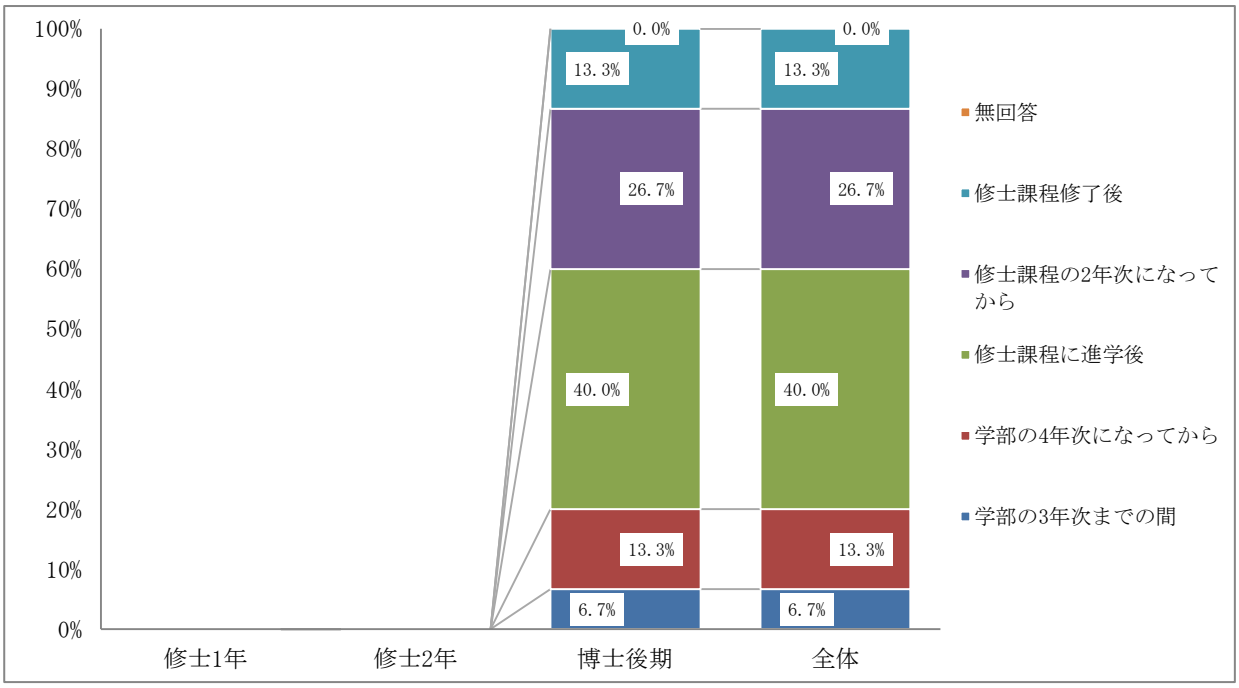

図 2.2.4　博士課程進学検討時期

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 学部の３年次までの間	－	－	1	1
2. 学部の４年次になってから	－	－	2	2
3. 修士課程に進学後	－	－	6	6
4. 修士課程の２年次になってから	－	－	4	4
5. 修士課程修了後	－	－	2	2
無回答	－	－	0	0

Ⅱ-③　入学希望動機　（複数回答可）

「高度な専門的知識・技術の修得」が最頻回答であり、続いて「将来の就職を考えて」の回答数が多く、昨年とほぼ同様の傾向であった。純粋な知識欲・研究欲を進学の動機としている学生が多い一方で、現実的な就職活動時の優位性も重要視されていることがうかがえる。一方で、「教員と教育研究設備が優れている」を回答した学生が少数である点は、注意すべきである。

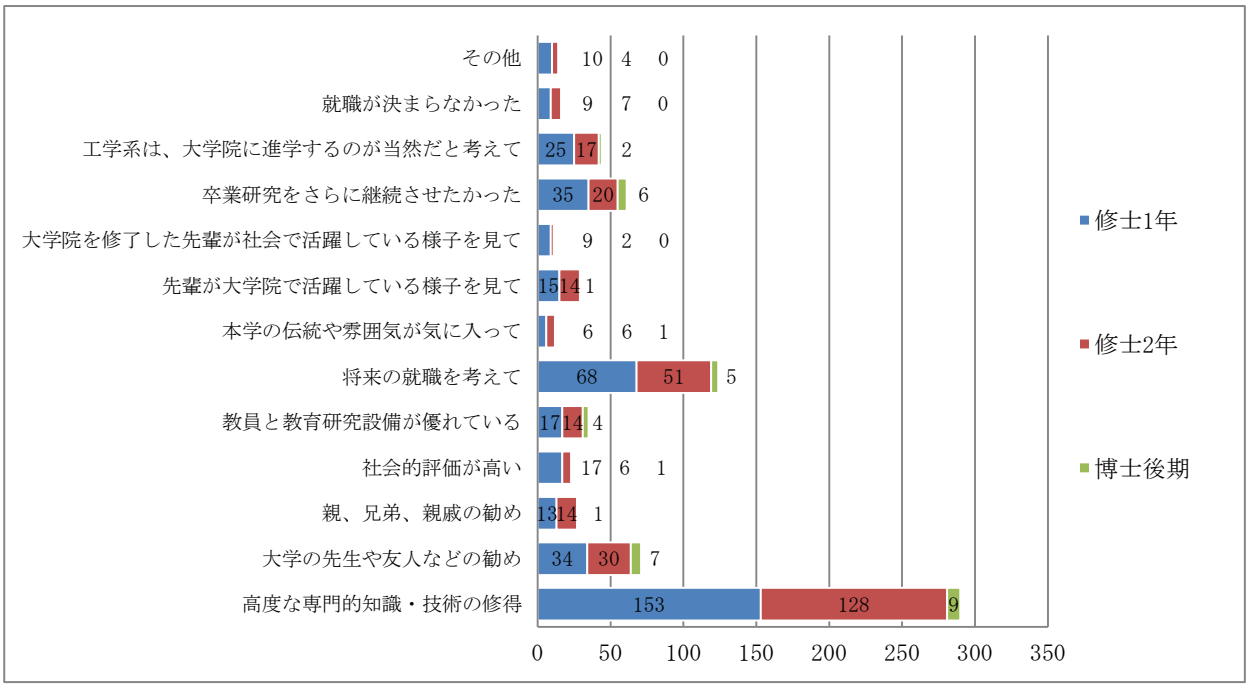

図 2.3　入学希望動機

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 高度な専門的知識・技術の修得	153	128	9	290
2. 大学の先生や友人などの勧め	34	30	7	71
3. 親、兄弟、親戚の勧め	13	14	1	28
4. 社会的評価が高い	17	6	1	24
5. 教員と教育研究設備が優れている	17	14	4	35
6. 将来の就職を考えて	68	51	5	124
7. 本学の伝統や雰囲気が気に入って	6	6	1	13
8. 先輩が大学院で活躍している様子を見て	15	14	1	30
9. 大学院を修了した先輩が社会で活躍している様子を見て	9	2	0	11
10. 卒業研究をさらに継続させたかった	35	20	6	61
11. 工学系は、大学院に進学するのが当然だと考えて	25	17	2	44
12. 就職が決まらなかった	9	7	0	16
13. その他	10	4	0	14

Ⅱ-④　専攻選択の要因　（複数回答可）

回答数が多いものは、「最先端の学問が学べる」、「自分が惹きつけられた学問分野」、「学部時の専門と直結」が挙げられている。一方で、「就職の際に有利」の回答数は比較的少なく、学生は、現実的な就職のためというより、自分が追求したい学問分野優先で専攻を選択していることがうかがえる。

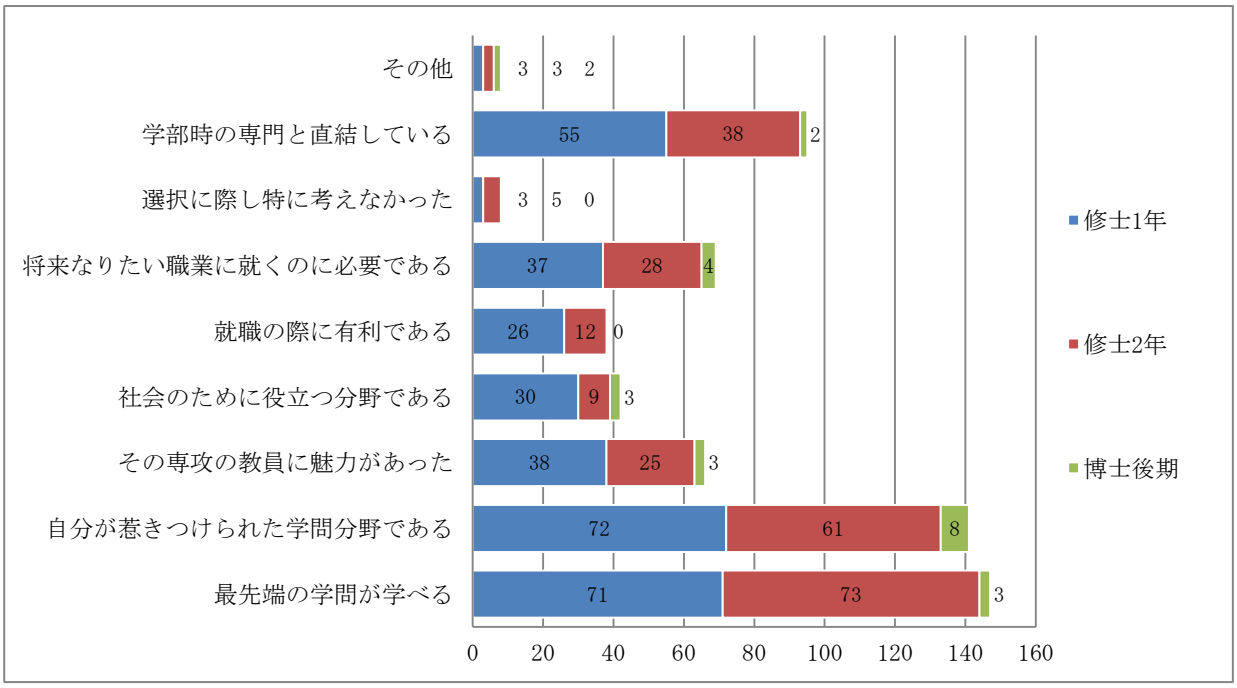

図 2.4　専攻選択の要因

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 最先端の学問が学べる	71	73	3	147
2. 自分が惹きつけられた学問分野である	72	61	8	141
3. その専攻の教員に魅力があった	38	25	3	66
4. 社会のために役立つ分野である	30	9	3	42
5. 就職の際に有利である	26	12	0	38
6. 将来なりたい職業に就くのに必要である	37	28	4	69
7. 選択に際し特に考えなかった	3	5	0	8
8. 学部時の専門と直結している	55	38	2	95
9. その他	3	3	2	8

Ⅱ-⑤　大学院進学に際し、「大学院 Navi」が契機となったか？

（修士課程の学生のみ回答）

「きっかけになった」は、3 割程度であり、大学院進学に際してさほど参考になったとは、言いがたい。また、「きっかけにならなかった」が 2 割程度。更に、『「大学院 Navi」を見たことがない』が全体で 2 割強もあった。しかし、学部のガイダンス等で配布しているので、見たことがないというより、見たことはあるが「大学院 Navi」という名称が浸透していないのではないかと推察される。

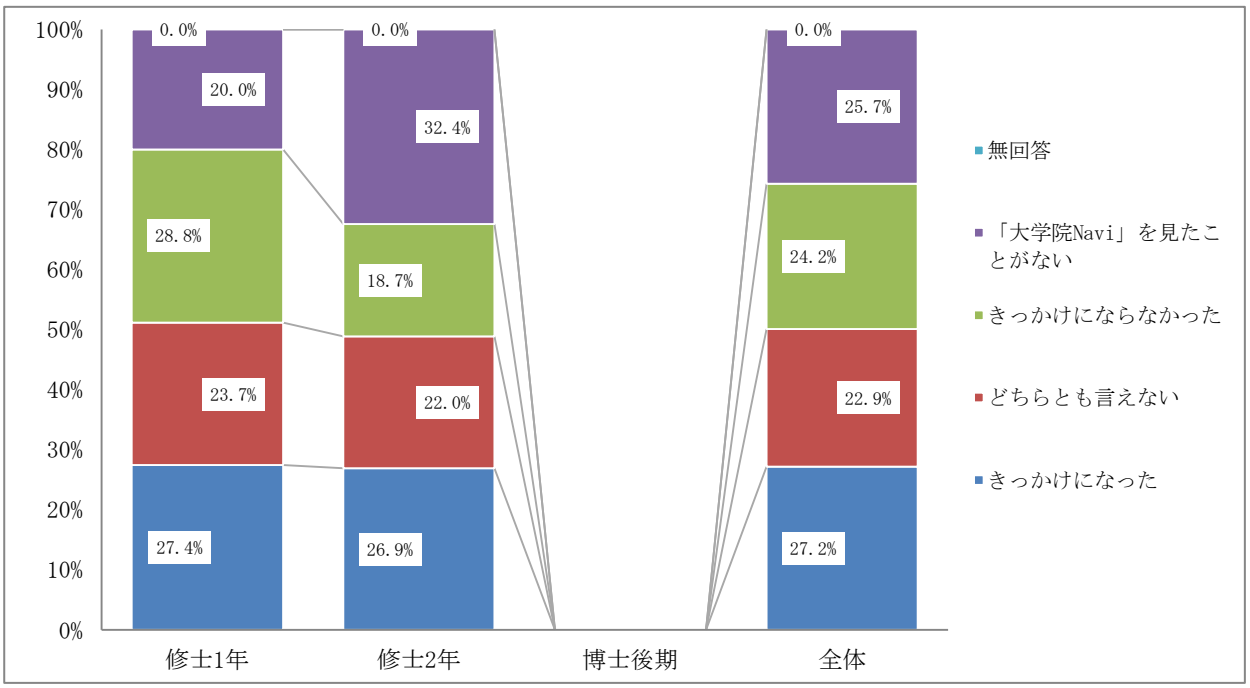

図 2.5　大学院進学に際し、「大学院 Navi」が契機となったか？

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. きっかけになった	59	49	－	108
2. どちらとも言えない	51	40	－	91
3. きっかけにならなかった	62	34	－	96
4. 「大学院 Navi」を見たことがない	43	59	－	102
無回答	0	0	－	0

Ⅱ-⑥　在籍専攻の満足度

全体の約８割弱の学生が、在籍専攻に「ある程度」以上満足していると回答しており、昨年度とほぼ同じ傾向である。学年別に見ると、博士後期課程の学生において、「ある程度」以上の満足度は修士課程の学生より若干低い。これには、博士後期課程の学生としての責任の度合いや、より高度な研究レベルに必要な研究環境への満足度の低さが関係していると推察される。博士後期課程の学生について、「不満である」を減少させる取り組みが必要であると思われる。

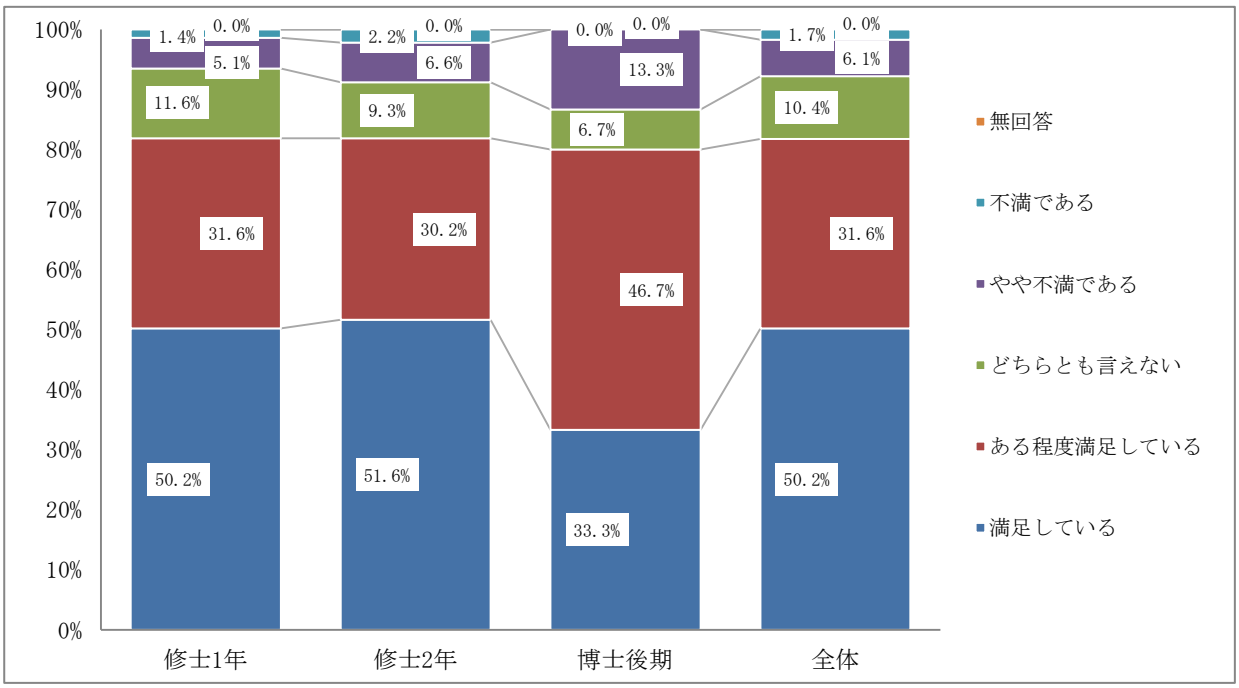

図 2.6　在籍専攻の満足度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 満足している	108	94	5	207
2. ある程度満足している	68	55	7	130
3. どちらとも言えない	25	17	1	43
4. やや不満である	11	12	2	25
5. 不満である	3	4	0	7
無回答	0	0	0	0

Ⅱ-⑦　教育課程・授業時間割の満足度

全体の約７割程度の学生が、教育課程・授業時間割に対して「ある程度」以上満足しているという結果となった。なお、教育課程・授業時間割に対する不満の内容については、次項Ⅱ-⑧の「教育課程・授業時間割の改善点」において見ることができる。

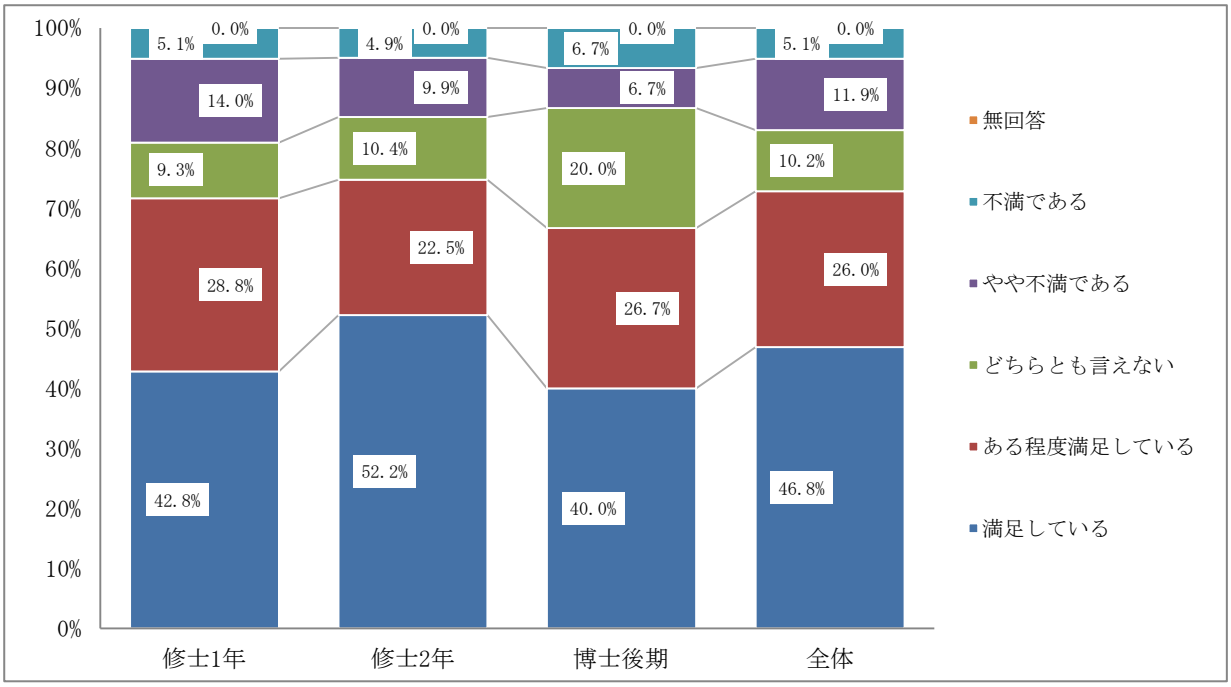

図 2.7　教育課程・授業時間割の満足度

(回答者数)

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 満足している	92	95	6	193
2. ある程度満足している	62	41	4	107
3. どちらとも言えない	20	19	3	42
4. やや不満である	30	18	1	49
5. 不満である	11	9	1	21
無回答	0	0	0	0

Ⅱ-⑧　教育課程・授業時間割の改善点　（複数回答可）

学生の立場から見た、教育課程・授業時間割の改善点として、最も多く回答されたのが、「授業時間割の組み方に問題がある」であった。次に、「受けたい授業は TA 業務の時間帯と重複」、「所属研究分野に関する授業科目の開講数が少ない」が、ほぼ同数であった。時間割の編成についてはどのような問題が多いかをリサーチした上で、研究分野間で相談するなど、対処の余地もあると考えられる。

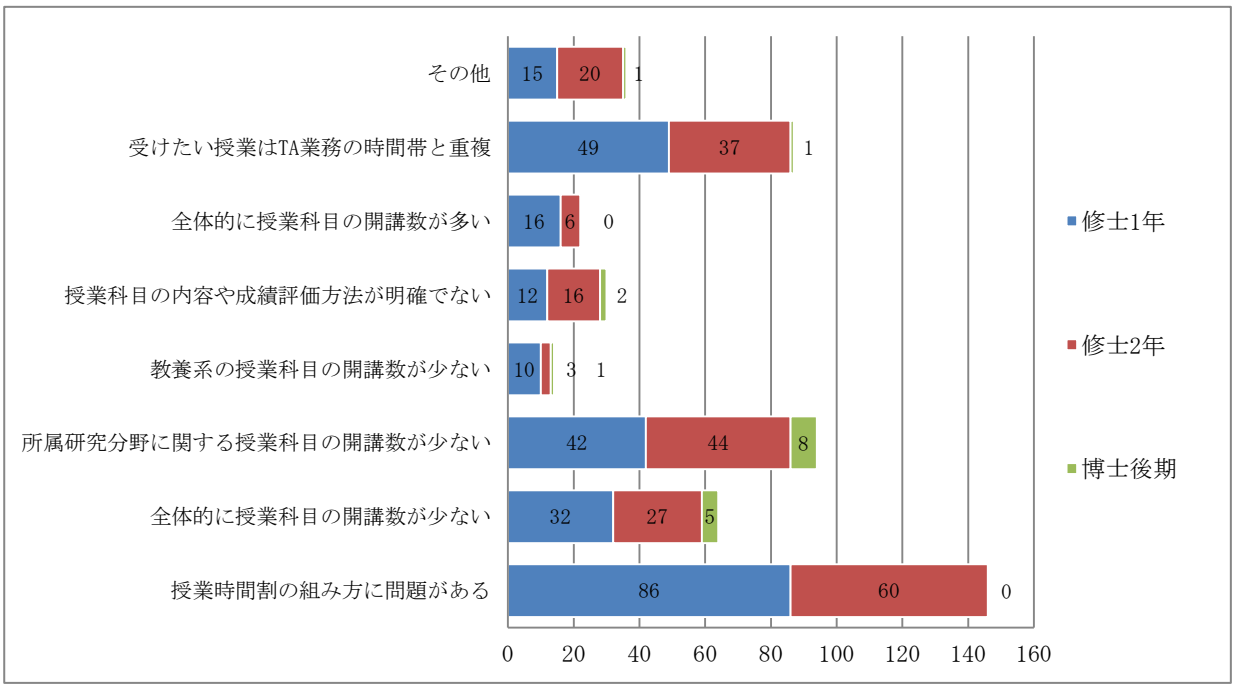

図 2.8　教育課程・授業時間割の改善点

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 授業時間割の組み方に問題がある	86	60	0	146
2. 全体的に授業科目の開講数が少ない	32	27	5	64
3. 所属研究分野に関する授業科目の開講数が少ない	42	44	8	94
4. 教養系の授業科目の開講数が少ない	10	3	1	14
5. 授業科目の内容や成績評価方法が明確でない	12	16	2	30
6. 全体的に授業科目の開講数が多い	16	6	0	22
7. 受けたい授業は TA 業務の時間帯と重複	49	37	1	87
8. その他	15	20	1	36

Ⅱ-⑨　授業の満足度（修士課程の学生のみ回答）

「全科目」および「大部分の科目」を合わせ、修士課程の学生全体の約 9 割が現行の授業に満足していると回答している。しかし、まだ 1 割以上の学生が「半分くらいの科目」または「ほとんど全科目」で不満を表明している。その要因には、Ⅱ-⑧項「教育課程・授業時間割の改善点」において回答の多かった、「受けたい授業は TA 業務の時間帯と重複」や「授業時間割の組み方に問題がある」、「所属研究分野に関する授業科目の開講数が少ない」と関連すると考えられる。

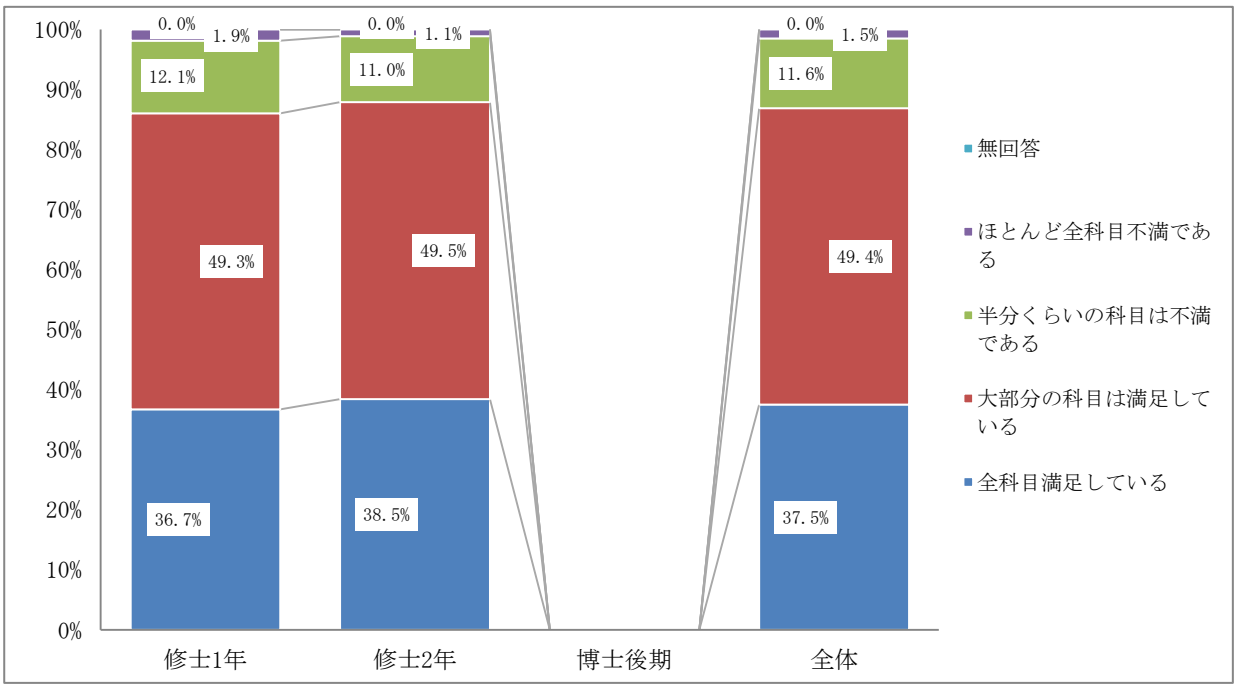

図 2.9　授業の満足度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 全科目満足している	79	70	－	149
2. 大部分の科目は満足している	106	90	－	196
3. 半分くらいの科目は不満である	26	20	－	46
4. ほとんど全科目不満である	4	2	－	6
無回答	0	0	－	0

Ⅱ-⑩　授業の難易度（修士課程の学生のみ回答）

現行の授業に対して、難易度が「適当である」と回答した学生は約 7 割であり、適切なレベルの授業が概ね実施されていることが推察される。今後もこの傾向が続くように日々の努力が望まれる。

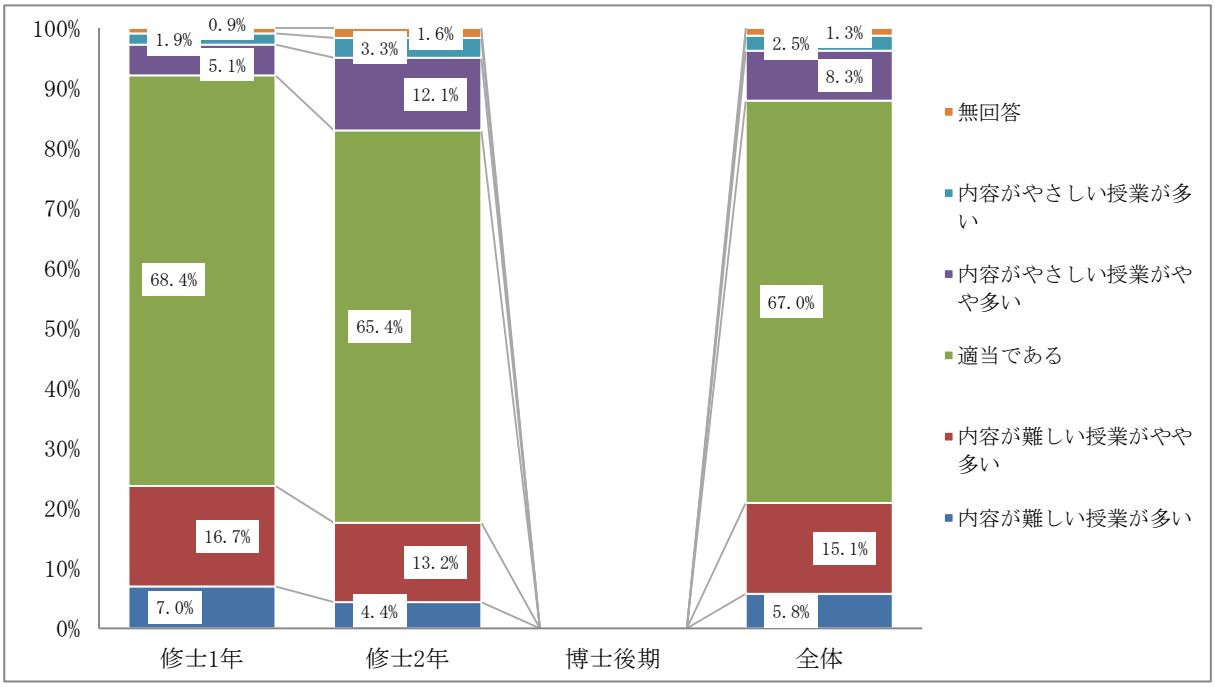

図 2.10　授業の難易度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 内容が難しい授業が多い	15	8	－	23
2. 内容が難しい授業がやや多い	36	24	－	60
3. 適当である	147	119	－	266
4. 内容がやさしい授業がやや多い	11	22	－	33
5. 内容がやさしい授業が多い	4	6	－	10
無回答	2	3	－	5

Ⅱ-⑪　授業への希望（修士課程の学生のみ回答、複数回答可）

修士課程の学生の授業への希望として、最多回答は「授業に工夫をこらし理解しやすくする」であった。次の項目が、「特に希望はない」であり、これら以外の項目は、ほとんどが低かった。今後は、「授業に工夫をこらし理解しやすくする」の中身を吟味し、さらに授業改善して、より一層、理解しやすい授業を実施していくことが挙げられる。

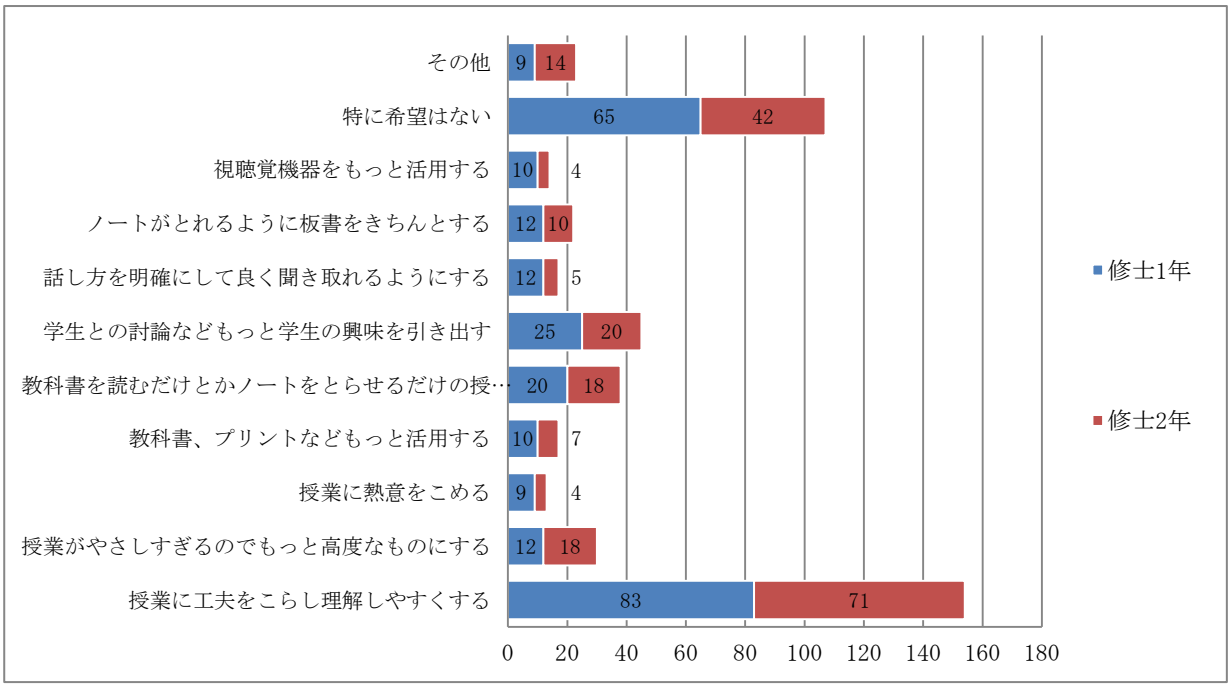

図 2.11　授業への希望

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 授業に工夫をこらし理解しやすくする	83	71	-	154
2. 授業がやさしすぎるのでもっと高度なものにする	12	18	-	30
3. 授業に熱意をこめる	9	4	-	13
4. 教科書、プリントなどもっと活用する	10	7	-	17
5. 教科書を読むだけとかノートをとらせるだけの授業はやめる	20	18	-	38
6. 学生との討論などもっと学生の興味を引き出す	25	20	-	45
7. 話し方を明確にして良く聞き取れるようにする	12	5	-	17
8. ノートがとれるように板書をきちんとする	12	10	-	22
9. 視聴覚機器をもっと活用する	10	4	-	14
10. 特に希望はない	65	42	-	107
11. その他	9	14	-	23

Ⅱ-⑫-(1)　特別講義開講の認知度

特別講義の認知度は、全体で「知っている」との回答が 5 割程度に対して、「知らない」と「知らなったがこれを機会に履修を希望したい」との回答が 4 割強であった。特別講義については、大学院の新入生ガイダンスでもアナウンスしているが、大学院生への周知が徹底されていないようである。修士課程 2 年次では既に履修すべき単位数を充足している学生も多いため、修士課程 1 年次により積極的に周知する仕組みの構築が望まれる。

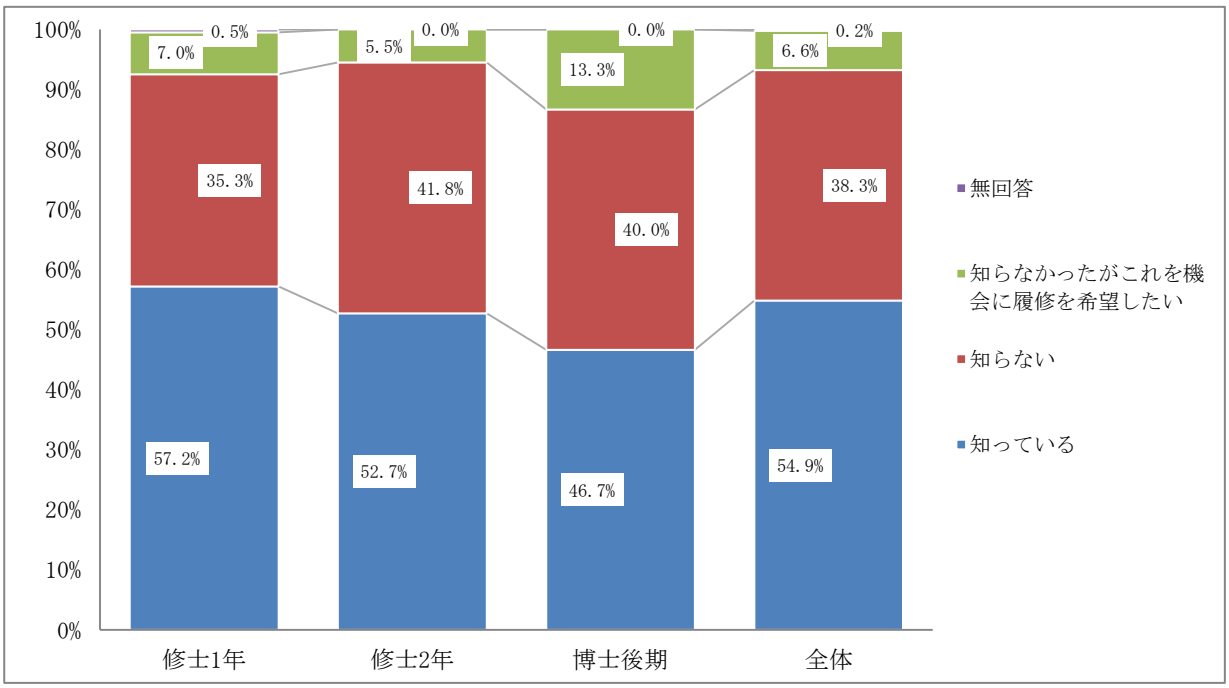

図 2.12.1　特別講義開講の認知度

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 知っている	123	96	7	226
2. 知らない	76	76	6	158
3. 知らなかったがこれを機会に履修を希望したい	15	10	2	27
無回答	1	0	0	1

Ⅱ-⑫-(2)　必要な基礎的知識等

「必要な基礎知識」と考える内容は、「プレゼンテーション能力」が最も回答数が多く、大学院生になれば学会でのプレゼンテーションの機会が増えるので、このような結果になっているのではないかと推察される。なお「特許や知的財産権に関する法律」についても全体で 2 割強の学生が必要な基礎知識としてしており、共通科目として開講を検討する必要があるものと考えられる。

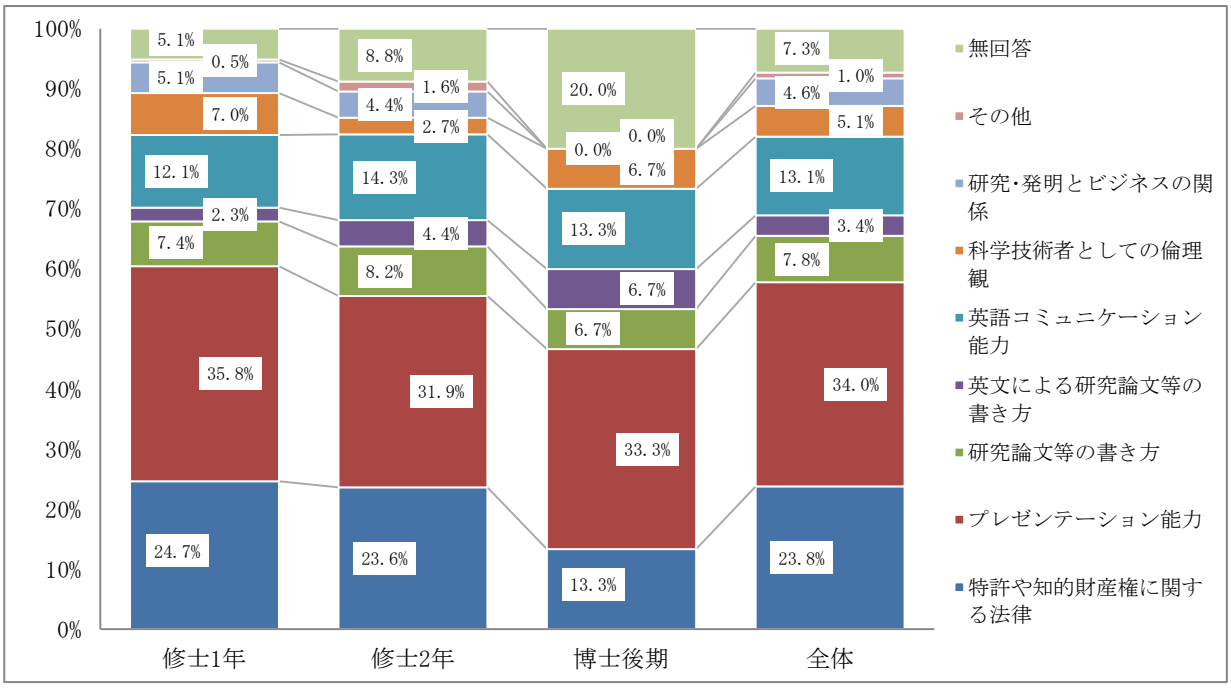

図 2.12.2　必要な基礎的知識等

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 特許や知的財産権に関する法律	53	43	2	98
2. プレゼンテーション能力	77	58	5	140
3. 研究論文等の書き方	16	15	1	32
4. 英文による研究論文等の書き方	5	8	1	14
5. 英語コミュニケーション能力	26	26	2	54
6. 科学技術者としての倫理観	15	5	1	21
7. 研究･発明とビジネスの関係	11	8	0	19
8. その他	1	3	0	4
無回答	11	16	3	30

Ⅱ-⑬　英語におけるコミュニケーション能力習得法で重要なこと

大学院生の半数以上、特に博士後期課程の学生では 5 割以上が、ネイティブスピーカーによる「ライティング技能」や「プレゼンテーション技能」の指導を希望しており、現行の大学院特別講義において、神田外語大学から特別講師を招聘し、ライティングやプレゼンテーションの演習を実施することは、学生の希望にマッチしていると考える。

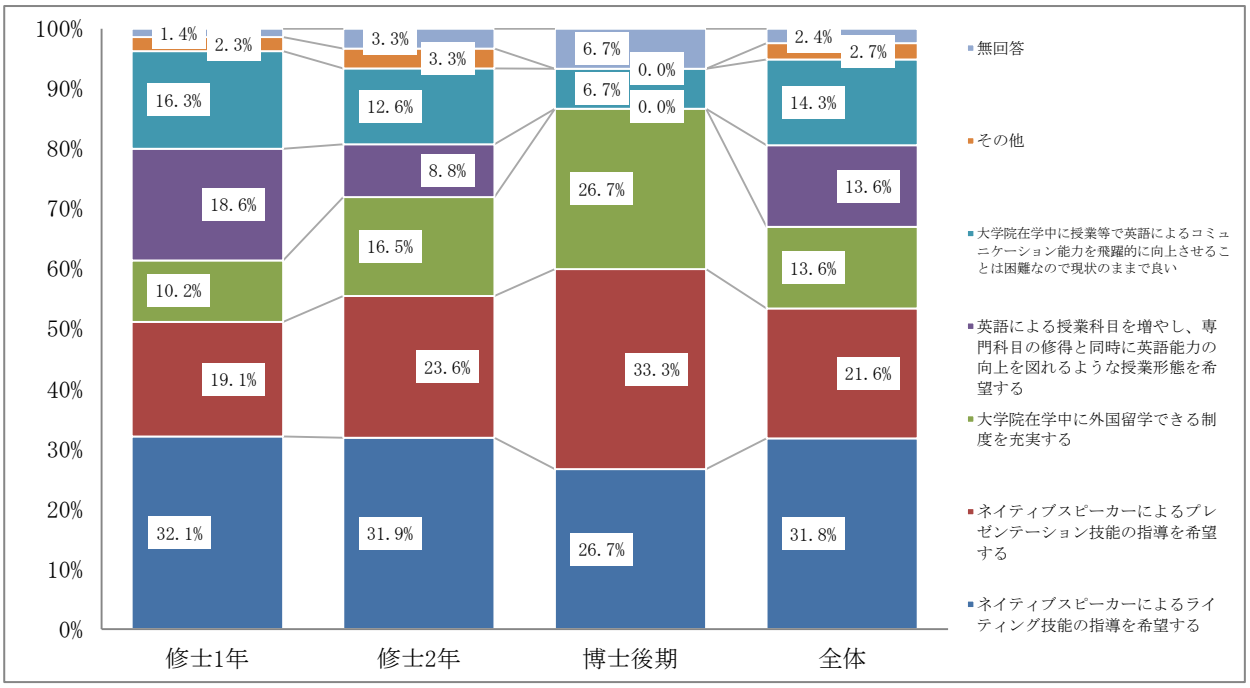

図 2.13　英語におけるコミュニケーション能力習得法で重要なこと

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. ネイティブスピーカーによるライティング技能の指導を希望する	69	58	4	131
2. ネイティブスピーカーによるプレゼンテーション技能の指導を希望する	41	43	5	89
3. 大学院在学中に外国留学できる制度を充実する	22	30	4	56
4. 英語による授業科目を増やし、専門科目の修得と同時に英語能力の向上を図れるような授業形態を希望する	40	16	0	56
5. 大学院在学中に授業等で英語によるコミュニケーション能力を飛躍的に向上させることは困難なので現状のままで良い	35	23	1	59
6. その他	5	6	0	11
無回答	3	6	1	10

Ⅱ-⑭　１週間の研究時間

大学院生全体の平均では、「20 時間～29 時間」が最も多い割合となっている。一方で、「10 時間未満」が全体で１割程度存在している。大学院修了時の人材としての質的向上を図るためにも、「10 時間未満」を減少させ、研究従事時間を増加させるよう適切な指導が求められる。

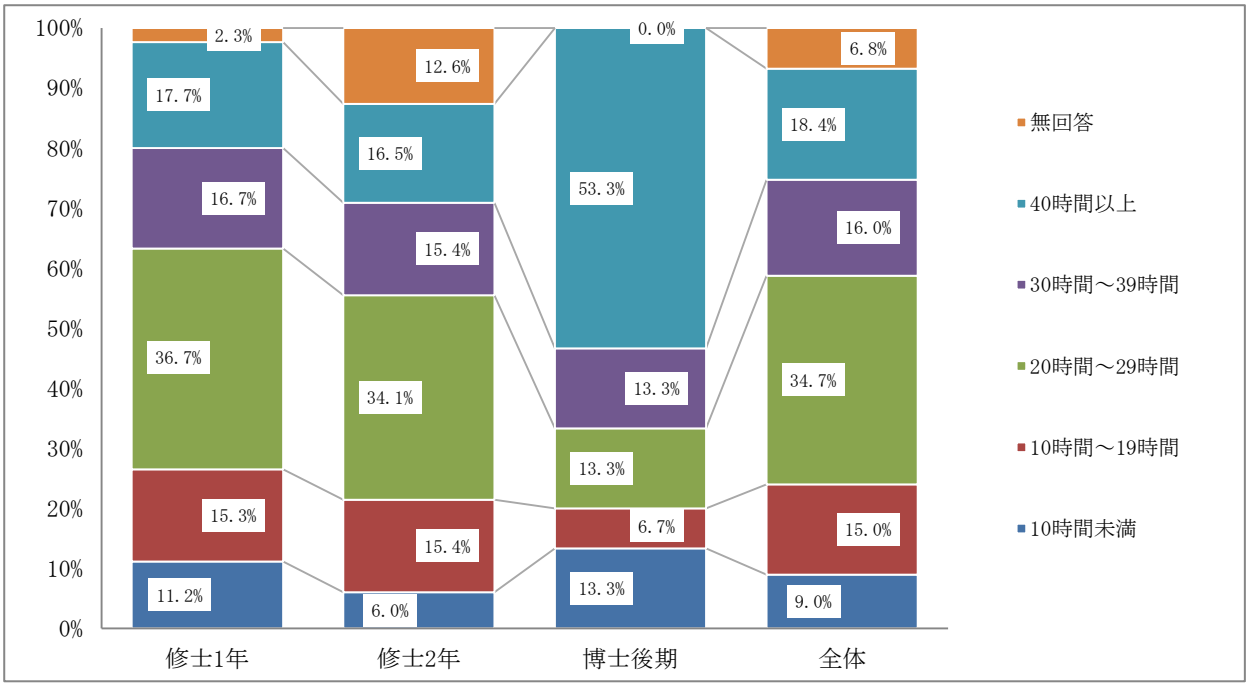

図 2.14　１週間の研究時間

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 10 時間未満	24	11	2	37
2. 10 時間～19 時間	33	28	1	62
3. 20 時間～29 時間	79	62	2	143
4. 30 時間～39 時間	36	28	2	66
5. 40 時間以上	38	30	8	76
無回答	5	23	0	28

Ⅱ-⑮　研究室の演習・ゼミ等の満足度

研究室の演習・ゼミ等の満足度は、全体で８割を超える学生が「満足している」または「ある程度満足している」と回答した。具体的な不満の内容については、次項Ⅱ-⑮Sub「研究室の演習・ゼミ等不満の理由」に挙げられており、「研究室が狭い」という回答が多かった。

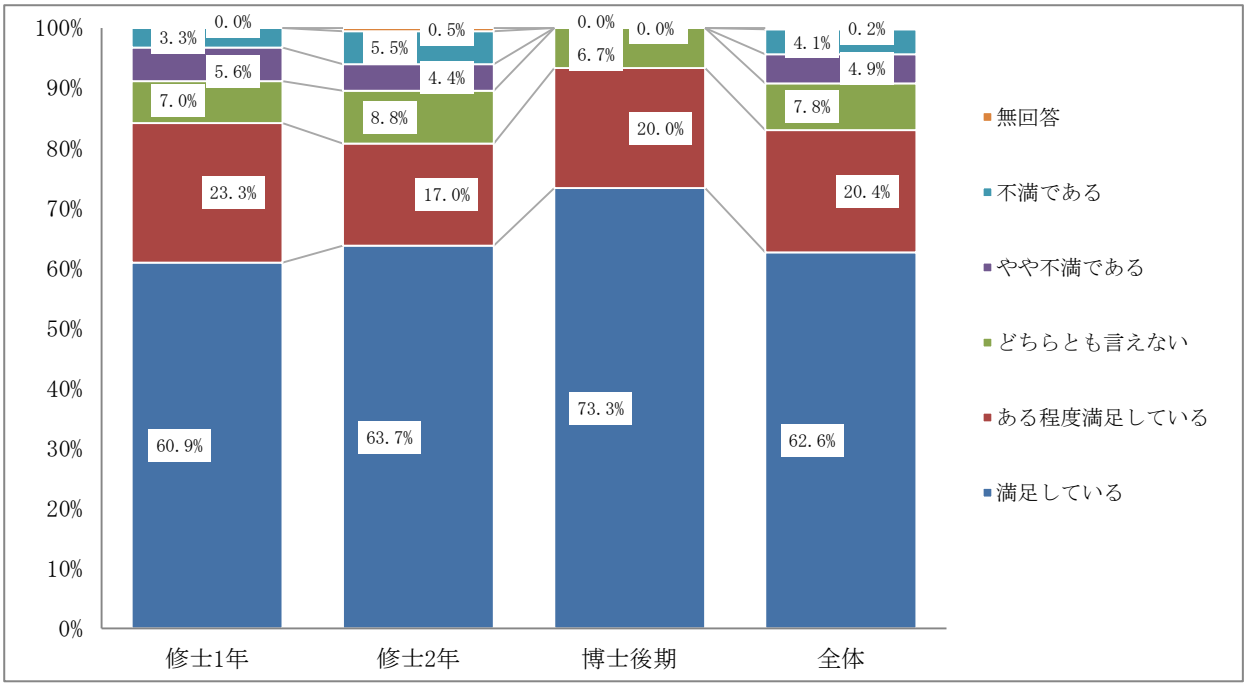

図 2.15　研究室の演習・ゼミ等の満足度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 満足している	131	116	11	258
2. ある程度満足している	50	31	3	84
3. どちらとも言えない	15	16	1	32
4. やや不満である	12	8	0	20
5. 不満である	7	10	0	17
無回答	0	1	0	1

Ⅱ-⑮Sub　研究室の演習・ゼミ等不満の理由

（Ⅱ-⑮で「やや不満である」、「不満である」と回答した方のみ・複数回答可）

研究室の演習・ゼミ等不満の理由として、「研究室が狭い」、「研究指導方法が良くない」が続いて、次に、「研究指導時間が少ない」が挙がっている。「研究指導方法が良くない」については、指導教員と学生間のコミュニケーション不足も考えられるので、教員個々の改善が望まれる。また、「研究室が狭い」については、毎回、多数の回答数があり、今後も根気強く改善方法を模索し、学生の不満を解消する努力が必要である。

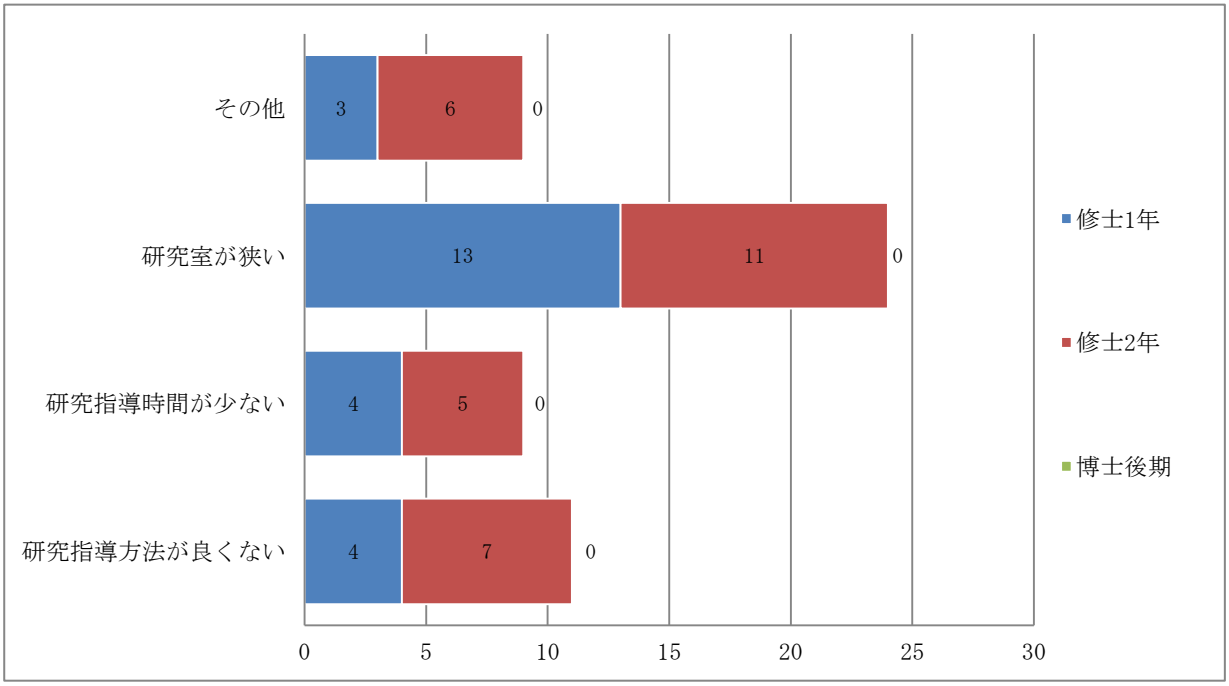

図 2.15.1 研究室の演習・ゼミ等不満の理由

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 研究指導方法が良くない	4	7	0	11
2. 研究指導時間が少ない	4	5	0	9
3. 研究室が狭い	13	11	0	24
4. その他	3	6	0	9

Ⅱ-⑯　研究環境の満足度

学年全体の平均で、7 割強の学生が研究環境に「満足している」または「ある程度満足している」と回答した。しかし、2 割弱の学生が「不満である」または「やや不満である」としており、今後も研究環境の充実が望まれる。

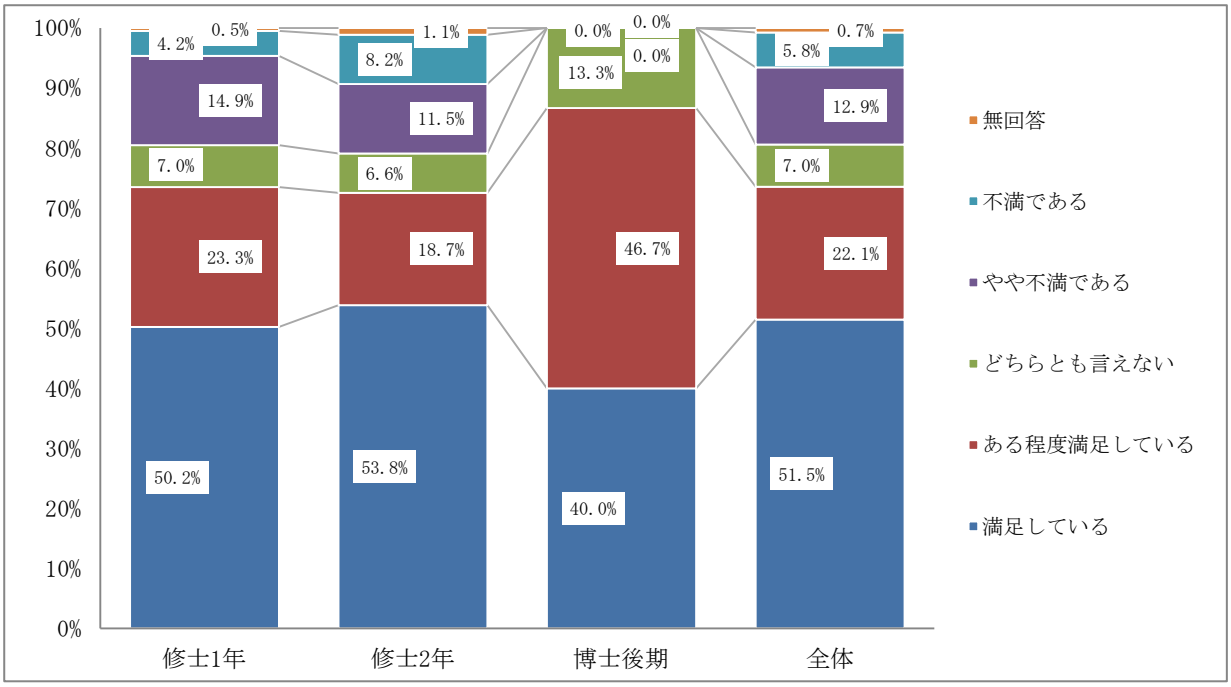

図 2.16　研究環境の満足度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 満足している	108	98	6	212
2. ある程度満足している	50	34	7	91
3. どちらとも言えない	15	12	2	29
4. やや不満である	32	21	0	53
5. 不満である	9	15	0	24
無回答	1	2	0	3

Ⅱ-⑯Sub　研究環境不満の理由

（Ⅱ-⑯で「やや不満である」、「不満である」と回答した方のみ・複数回答可）

研究環境への不満の理由としては、「実験室・研究室が狭い」が最も多く、次に「研究設備が不足している」、「研究設備が古い」と続いた。満足度は主観的な部分もあり、全てを同時に改善することは難しい面もあり、まずは効率的かつ有効な研究室や設備の活用・利用に努めることが必要であるものと考えられる。

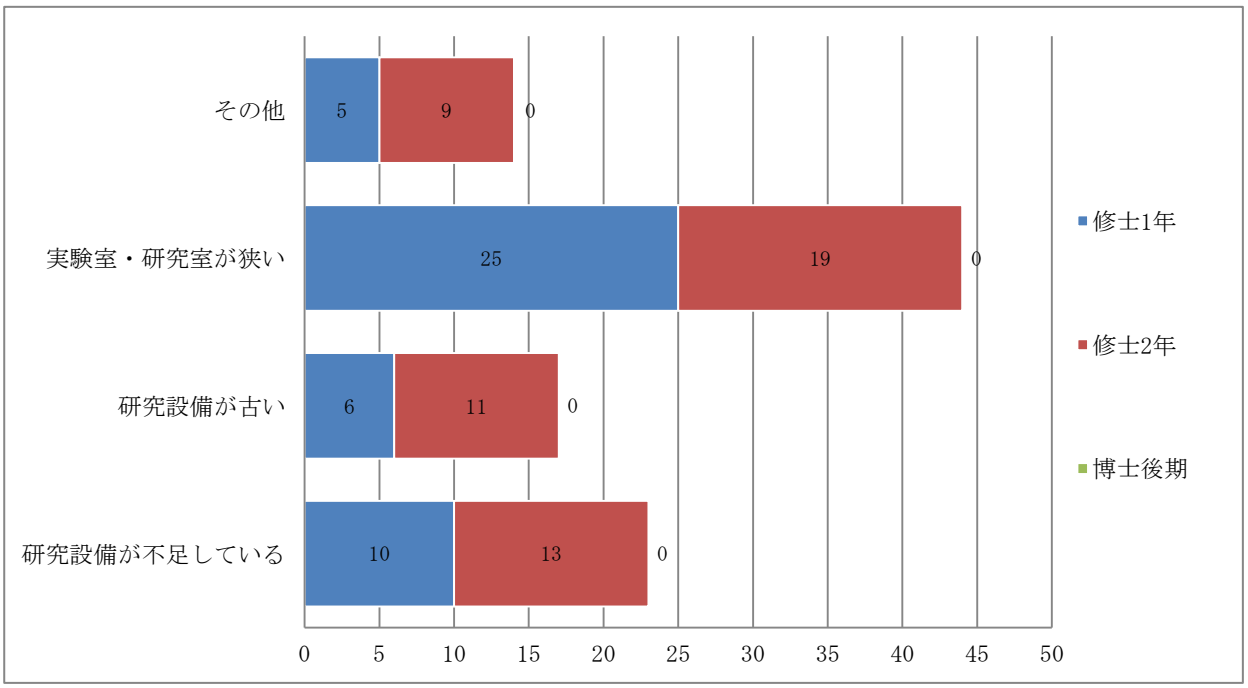

図 2.16.1　研究環境不満の理由

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 研究設備が不足している	10	13	0	23
2. 研究設備が古い	6	11	0	17
3. 実験室・研究室が狭い	25	19	0	44
4. その他	5	9	0	14

Ⅱ-⑰-(1)　学会発表の回数

学会発表の回数は、当然のことながら、大学院在籍期間によって大きく異なっている。修士課程1年次では、「0回」が35.8%、「1回」が40.5%、「2回」が16.3%となっており。修士課程2年次では、「0回」が12.6%、「1回」が43.4%、「2回」が23.1%となった。なお、博士後期課程の学生においては66.7%が5回以上の学会発表を経験している。

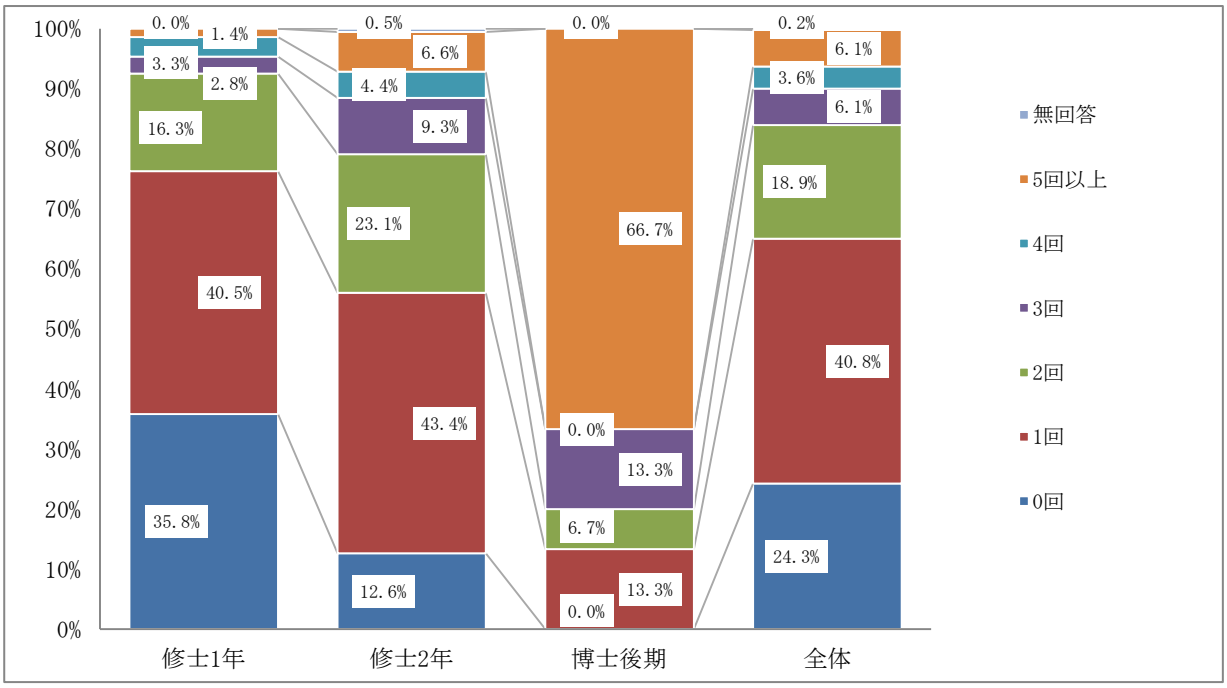

図 2.17.1　学会発表の回数

(回答者数)

	修士1年	修士2年	博士後期	全体
1. 0回	77	23	0	100
2. 1回	87	79	2	168
3. 2回	35	42	1	78
4. 3回	6	17	2	25
5. 4回	7	8	0	15
6. 5回以上	3	12	10	25
無回答	0	1	0	1

Ⅱ-⑰-(2)　学会誌等に掲載された論文数

前項Ⅱ-⑰-(1)「学会発表の回数」と同様、論文数も学年によって大きく違いがある。修士課程１年次では 90.7%が「０編」、5.1%が「１編」であり、修士課程２年次では 75.8%が「０編」、13.7%が「１編」であった。博士後期課程では、33.3%が「０編」、20.0%が「１編」となっており、修士課程の学生と比較して増加している。

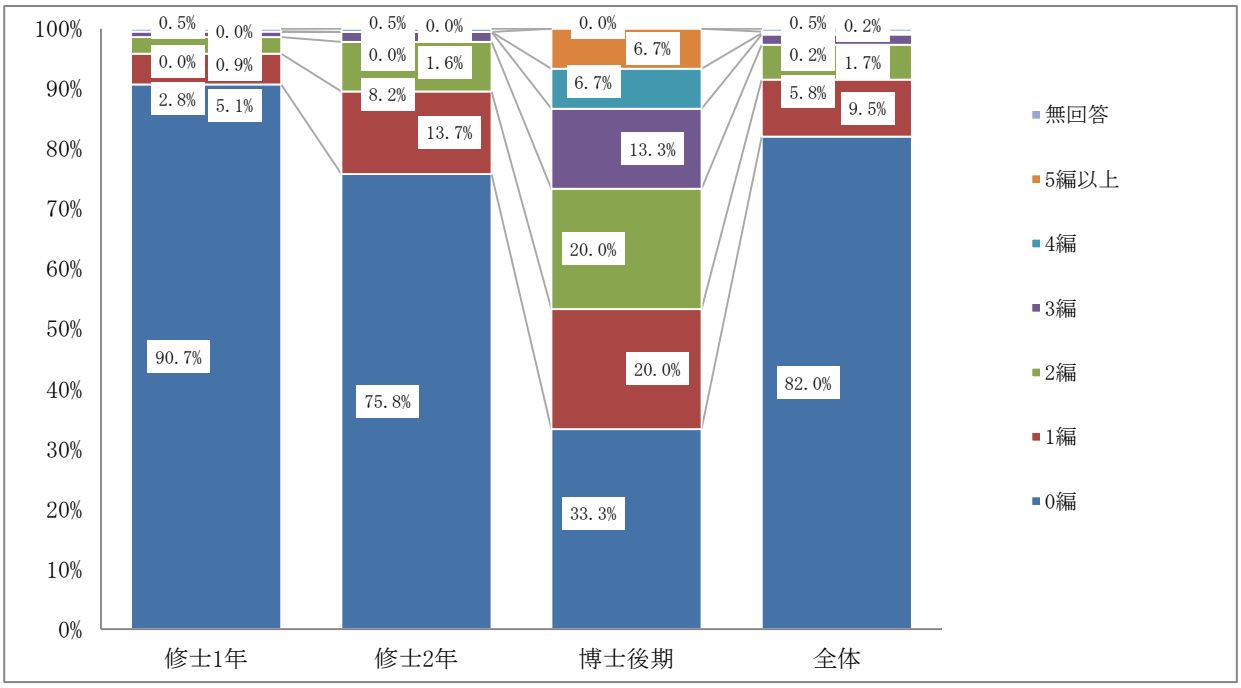

図 2.17.2　学会誌等に掲載された論文数

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. ０編	195	138	5	338
2. １編	11	25	3	39
3. ２編	6	15	3	24
4. ３編	2	3	2	7
5. ４編	0	0	1	1
6. ５編以上	0	0	1	1
無回答	1	1	0	2

Ⅱ-⑰-(3)　国際会議での講演もしくはポスター発表の回数

国際会議での講演もしくはポスター発表の回数は、Ⅱ-⑰-(1)「学会発表の回数」と比較して少ない。国際会議で発表する機会を与えられていない場合もあると考えられるが、一般的な傾向として英語を苦手とする学生が多く、国際会議での発表を敬遠する学生がいることが考えられる。このことは、Ⅱ-⑬「英語におけるコミュニケーション能力習得法で重要なこと」の項目において、ネイティブスピーカーによる指導が強く希望されていることと相関していると考えられる。

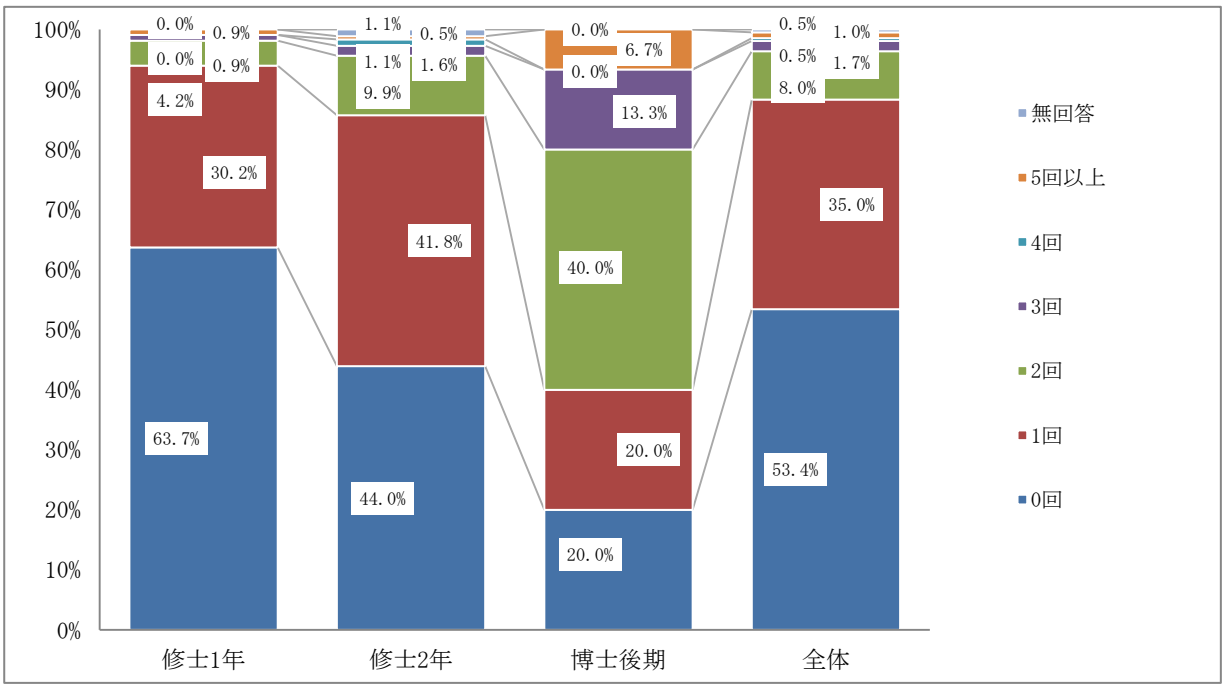

図 2.17.3　国際会議での講演もしくはポスター発表の回数

(回答者数)

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 0回	137	80	3	220
2. 1回	65	76	3	144
3. 2回	9	18	6	33
4. 3回	2	3	2	7
5. 4回	0	2	0	2
6. 5回以上	2	1	1	4
無回答	0	2	0	2

Ⅱ-⑰-(4)　大学院修了までに学会発表を行う予定の回数

今後大学院修了までに、「１回」以上の学会発表を予定している割合は、修士課程では概ね 7 割であり、多くの学生が修士課程の間に少なくとも１回は発表しようと計画していることがうかがえる。博士後期課程では「１回」から「５回以上」まで広く分布しており、研究分野や研究内容により発表回数に個人差があることがうかがえる。

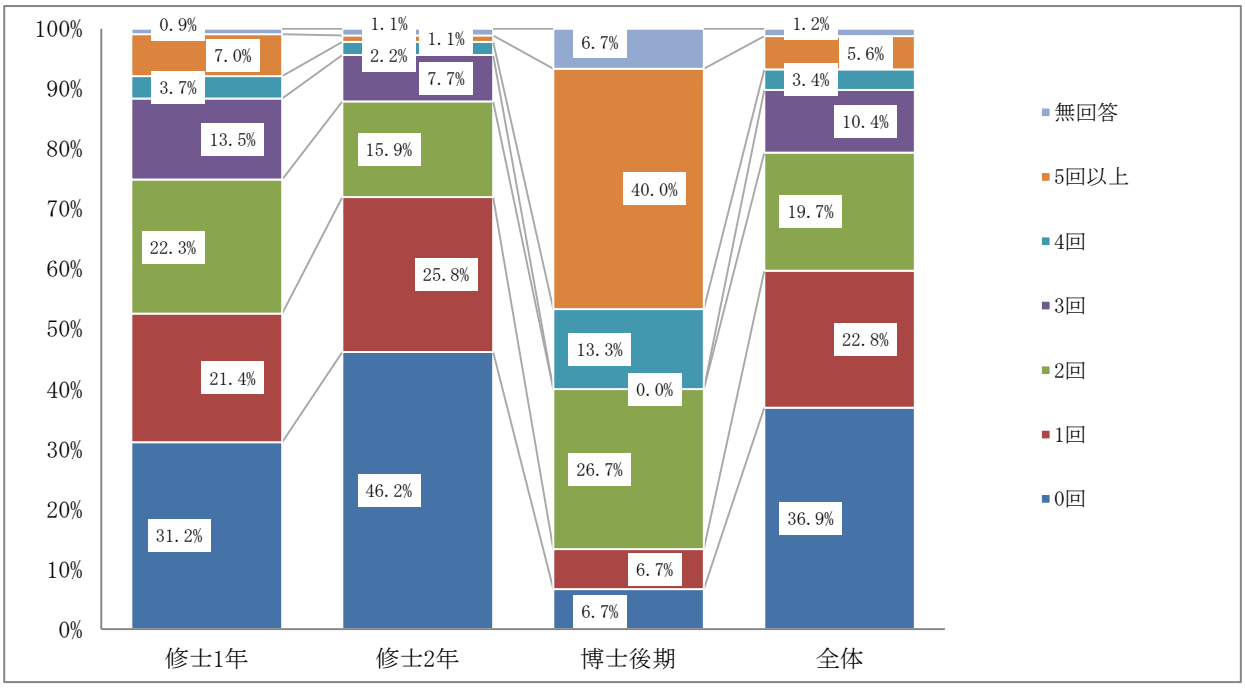

図 2.17.4　大学院修了までに学会発表を行う予定の回数

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. ０回	67	84	1	152
2. １回	46	47	1	94
3. ２回	48	29	4	81
4. ３回	29	14	0	43
5. ４回	8	4	2	14
6. ５回以上	15	2	6	23
無回答	2	2	1	5

Ⅱ-⑱　ティーチング・アシスタント制度について　（複数回答可）

TA 制度については、「経済支援としてよい制度である」が最多回答で、次に「TA をすることは自分の勉強にもなる」が続いた。このことから、TA 制度を自分のスキルアップと金銭面との両面から捉えていることがうかがえる。一方で、「勉強・研究に支障がある」とする回答も、少数ではあるが軽視すべきではない。授業や研究活動に支障がないように運用されることが望まれる。また、「同じ時間なら通常のアルバイトをする方がよい」と回答した学生も少数いる。

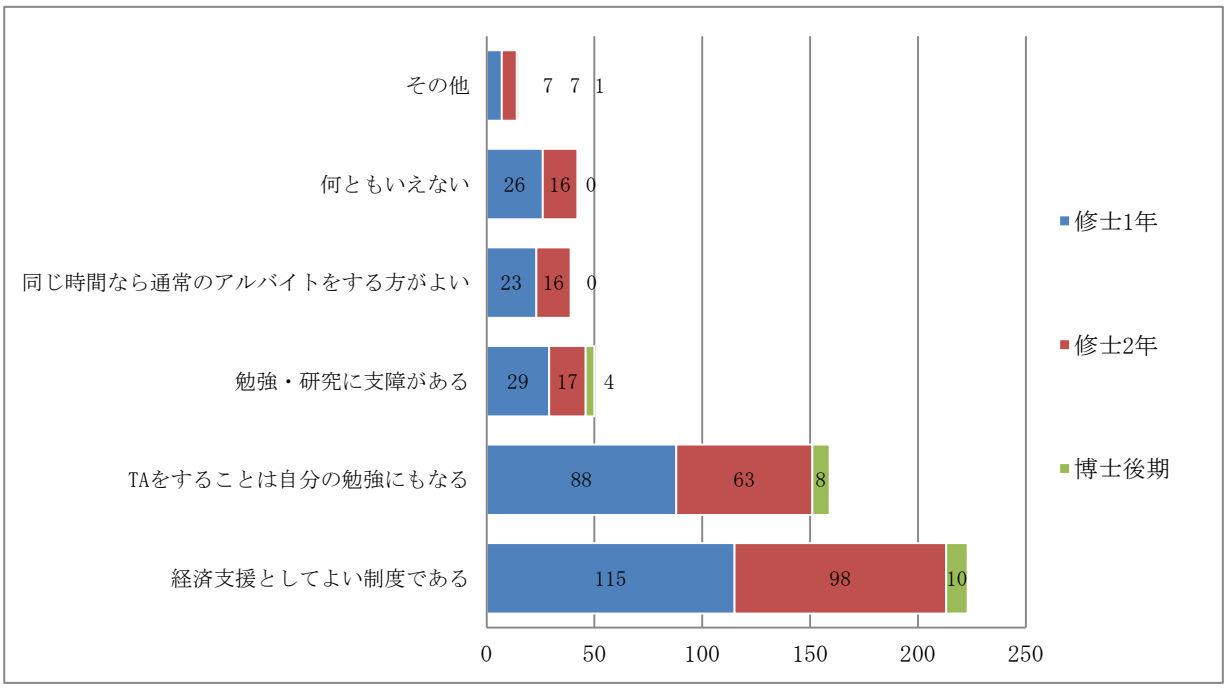

図 2.18　ティーチング・アシスタント制度について

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 経済支援としてよい制度である	115	98	10	223
2. TA をすることは自分の勉強にもなる	88	63	8	159
3. 勉強・研究に支障がある	29	17	4	50
4. 同じ時間なら通常のアルバイトをする方がよい	23	16	0	39
5. 何ともいえない	26	16	0	42
6. その他	7	7	1	15

＜Ⅲ＞学生生活について

Ⅲ-① あなたにとって大学生活の目的は何ですか（3 つまで回答可）。

3つまで回答可

1. 豊かな教養を身につけ人格を高めるため
2. 資格取得や、将来の有利な就職・職業に就くため
3. 専門的な知識や技術を習得するため
4. 学生生活を楽しむため
5. 大学卒の学歴が必要だと思ったから
6. 友人をつくったり人脈を広げたりしたいから
7. 特に目的を意識していない（なんとなく）
8. その他

Ⅲ-② 現在クラブ・サークルに加入していますか。

1. 学内のクラブ、サークルに加入している
2. 学外のクラブ、サークルに加入している
3. 学内外いずれのクラブ、サークルにも加入していない

設問Ⅲ-②で『1.学内のクラブ、サークルに加入している』、『2.学外のクラブ、サークルに加入している』と回答した方は、次のイ～ロの設問にも回答してください。

イ. クラブ・サークル活動を行う目的または目標は何ですか（複数回答可）。

複数回答可

1. 大きな大会に出場するため
2. 強くなる、上手になるため
3. 上下関係や礼節を身につけるため
4. 交友関係を築くため
5. 就職に役立てるため
6. 健康の維持・増進をはかるため
7. 目的や目標は特にないが、以前から行っているので継続している
8. その他

ロ. クラブ・サークル活動は平均して一日のうち何時間していますか。

1. 1時間程度
2. 2 時間程度
3. 3 時間程度
4. 4 時間以上

Ⅲ-③ 大学入学後にボランティア活動に参加したことがありますか。

1. 現在、参加している
2. 過去に参加したことがある
3. ない

Ⅲ-④ ボランティア活動に参加する（した）理由は何ですか（複数回答可）

複数回答可

1. 誰かの役に立ちたいから
2. 自分の見聞を広めたいから
3. 新しい出会いや経験をしたいから
4. 得意なことを生かしたいから
5. 大学生活を充実させたいから
6. 就職に役立つと思ったから
7. 正課の授業に組み込まれていたから（単位が認定されるから）
8. 社会勉強だと思ったから
9. 教職員や友人に誘われたから
10. その他

Ⅲ-⑤ 海外留学したいと思いますか

1. 留学したい
2. 留学したいが理由があってできない
3. 留学したくない

設問Ⅲ-⑤で『2.留学したいが理由があってできない』、『3.留学したくない』と回答した方は、次の設問にも回答してください。（複数回答可）

その理由はどれにあたりますか。

複数回答可

1. 経済的に余裕がないから
2. 時間的に余裕がないから
3. 語学力が不安だから
4. 海外での生活（コミュニケーション等）が不安だから
5. 卒業（進級）が遅れるから
6. 就職（活動）が不安だから
7. 住居の確保が不安だから
8. 留学に関する手続きが不安だから
9. 海外留学に関する情報が不足しているから
10. 社会情勢や治安が不安だから
11. 特に理由はない
12. その他

Ⅲ-⑥ 現在抱えている悩みや問題は何ですか(3 つまで回答可)。

3つまで回答可

1. 勉学上の問題
2. 金銭問題
3. クラブ・サークル関係
4. 身体的健康上の問題
5. 精神・心理的問題
6. 自分の性格や能力について
7. 就職・将来の進路
8. 友人関係
9. 恋愛・異性問題
10. 家庭の問題
11. ストーカーやセクハラの問題
12. 携帯電話やインターネットでのトラブル
13. その他
14. 特に悩んでいない

Ⅲ-⑦ 学生生活上の悩みや問題は、誰に相談していますか(3 つまで回答可)。

3つまで回答可

1. 家族に相談する
2. 友人・先輩に相談する
3. 教員に相談する
4. 職員に相談する
5. 学生相談室で相談する
6. 保健室で相談する
7. アルバイト先で相談する
8. インターネットを利用して相談する
9. 誰にも相談しない
10. その他

Ⅲ-⑧ 学内のハラスメント防止のための委員会や相談員のことを知っていますか。

1. 知っている
2. 知らない

Ⅲ-⑨ あなたは、喫煙しますか。

1. はい
2. いいえ

設問Ⅲ-⑨で『1. はい』と回答した方は、次のイ～ハの設問にも回答してください。

イ. 健康への影響を考えたことはありますか。

1. はい
2. いいえ

ロ. 他人への影響(受動喫煙)を考えたことはありますか。

1. ある
2. ない

ハ. 喫煙をやめようと思いますか。

1. はい
2. いいえ

Ⅲ-⑩ 平成 27 年 4 月よりキャンパス内が全面禁煙になったことをどう思いますか。

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. やや不満がある
4. 不満がある

Ⅲ-①　学生生活の目的　（３つまで回答可）

昨年度と同様、大学院における学生生活の目的は、修士課程、博士後期課程ともに、「豊かな教養を身につけ人格を高めるため」と「専門的な知識や技術を習得するため」が上位二つを占めている。多くの学生が学生生活に目的を持っていることがわかる。

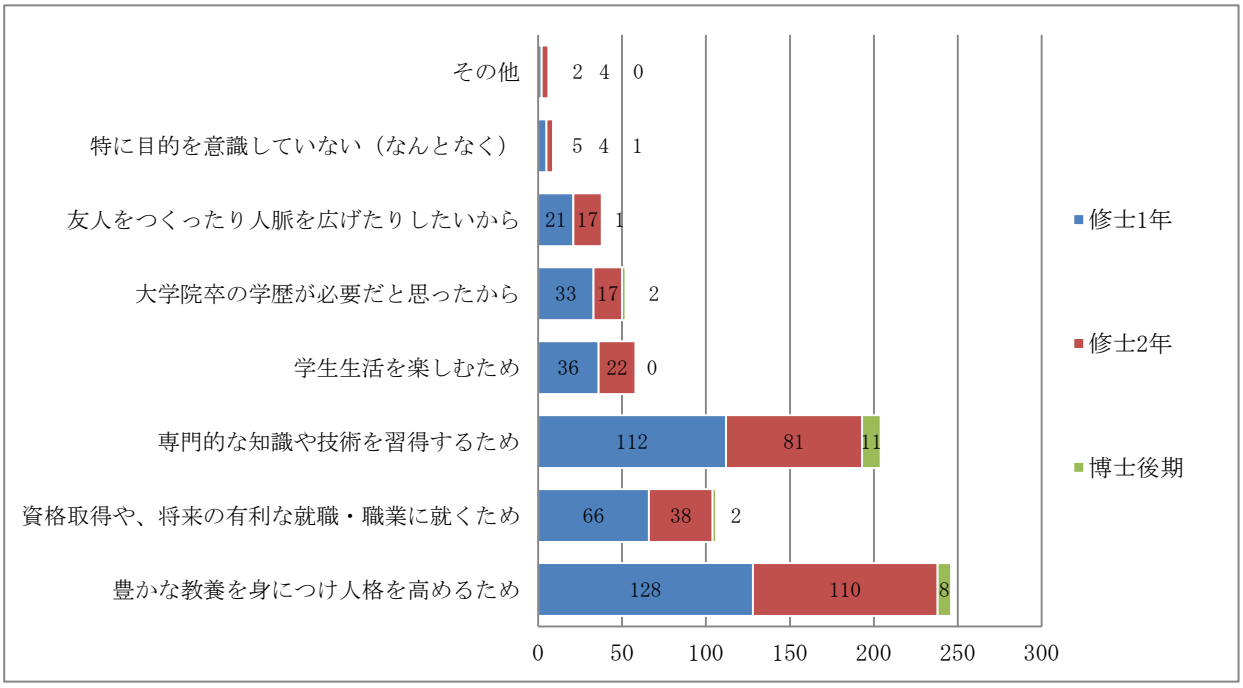

図 3.1　学生生活の目的

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 豊かな教養を身につけ人格を高めるため	128	110	8	246
2. 資格取得や、将来の有利な就職・職業に就くため	66	38	2	106
3. 専門的な知識や技術を習得するため	112	81	11	204
4. 学生生活を楽しむため	36	22	0	58
5. 大学院卒の学歴が必要だと思ったから	33	17	2	52
6. 友人をつくったり人脈を広げたりしたいから	21	17	1	39
7. 特に目的を意識していない（なんとなく）	5	4	1	10
8. その他	2	4	0	6

Ⅲ-②　クラブ、サークルの加入状況

クラブやサークルに加入している学生の割合は、昨年度とほぼ同様であり，2 割以下となっている。大学院生は、研究室での研究活動を生活の中心とするのが自然であり、クラブやサークルに加入する学生が少数派となっているのは、健全な状況であるといえる。

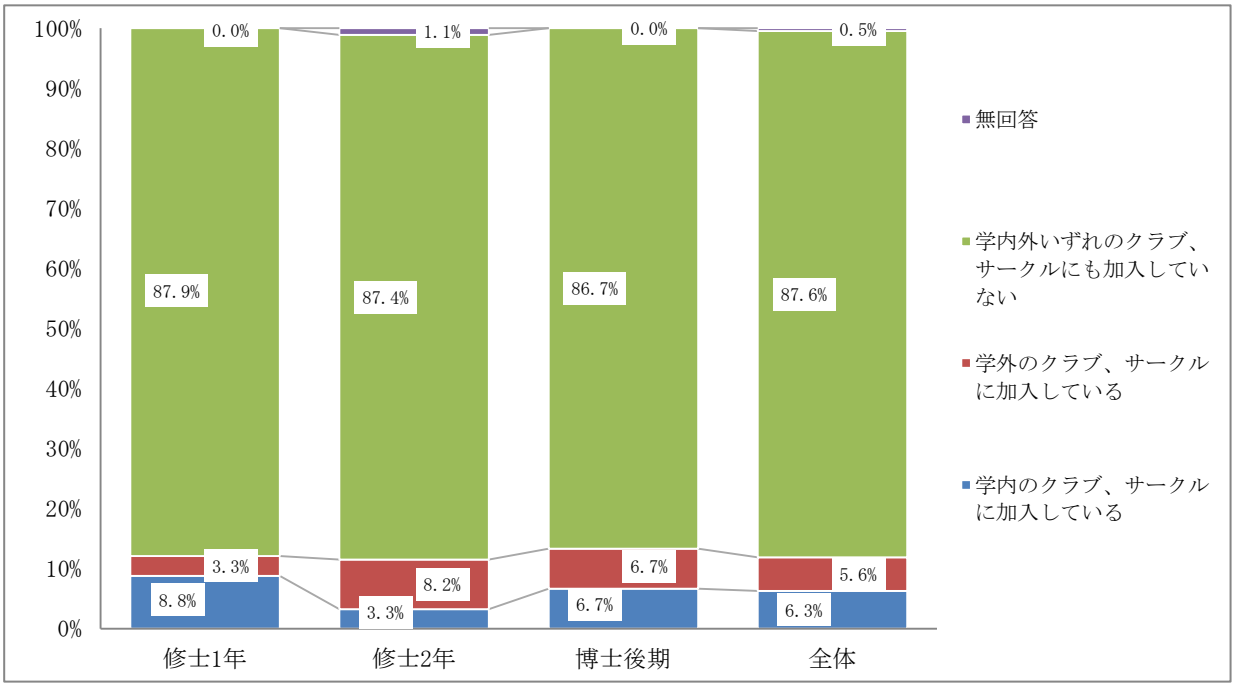

図 3.2　クラブ、サークルの加入状況

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 学内のクラブ、サークルに加入している	19	6	1	26
2. 学外のクラブ、サークルに加入している	7	15	1	23
3. 学内外いずれのクラブ、サークルにも加入していない	189	159	13	361
無回答	0	2	0	2

Ⅲ-②-イ　クラブ、サークル活動を行う目的または目標

（Ⅲ - ②で「学内のクラブ、サークルに加入している」、「学外のクラブ、サークルに加入している」と回答した方のみ・複数回答可）

多くの大学院生がクラブ、サークルに加入していないので、少数の加入者を対象とした調査結果となっている。昨年度とほぼ同様の傾向で、クラブ、サークル活動を行う目的として、「交友関係を築くため」、「強くなるため、上手になるため」、と回答した学生が多い。

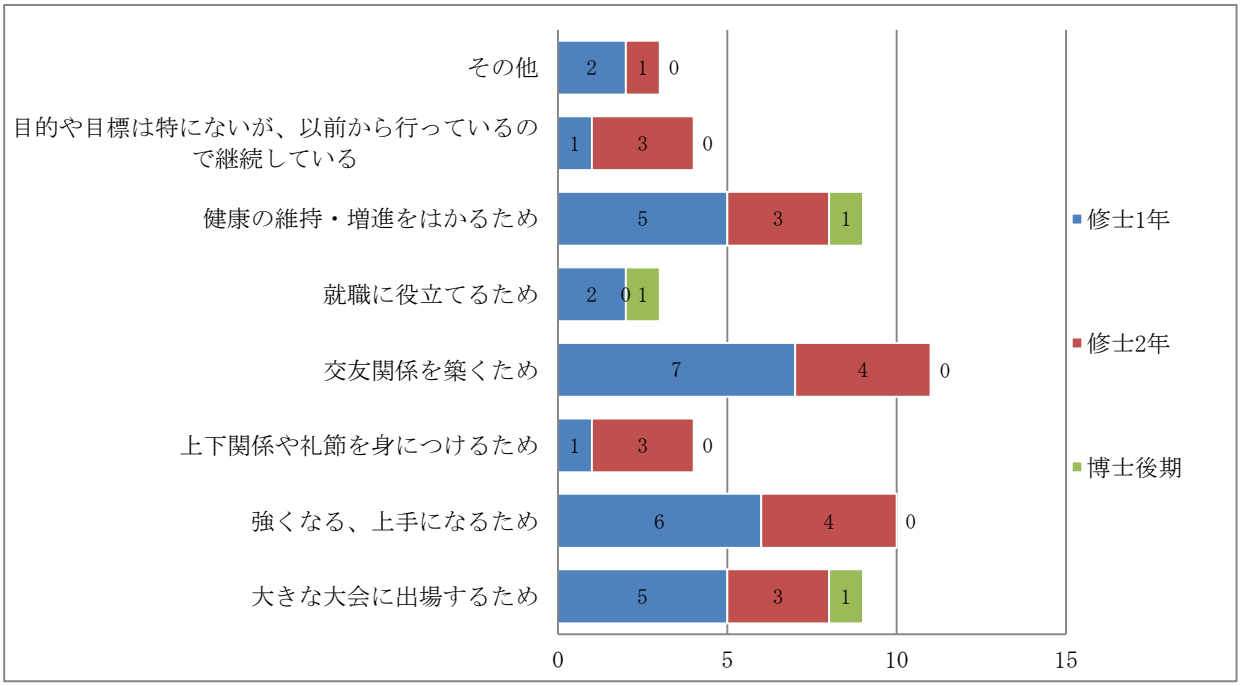

図 3.2.1　クラブ、サークル活動を行う目的または目標

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 大きな大会に出場するため	5	3	1	9
2. 強くなる、上手になるため	6	4	0	10
3. 上下関係や礼節を身につけるため	1	3	0	4
4. 交友関係を築くため	7	4	0	11
5. 就職に役立てるため	2	0	1	3
6. 健康の維持・増進をはかるため	5	3	1	9
7. 目的や目標は特にないが、以前から行っているので継続している	1	3	0	4
8. その他	2	1	0	3

Ⅲ-②-ロ　クラブ、サークルの一日の平均活動時間

（Ⅲ - ②で「学内のクラブ、サークルに加入している」、「学外のクラブ、サークルに加入している」と回答した方のみ）

多くの大学院生がクラブ、サークルに加入していないので、少数の加入者を対象とした調査結果となっている。院生全体の一日の活動時間として、2 時間以上の割合が昨年度の約 60%から今年度の約 40%に大幅に減少しているが、サンプル数が少なく個別の学生の傾向を反映している結果となっていると考えられる。

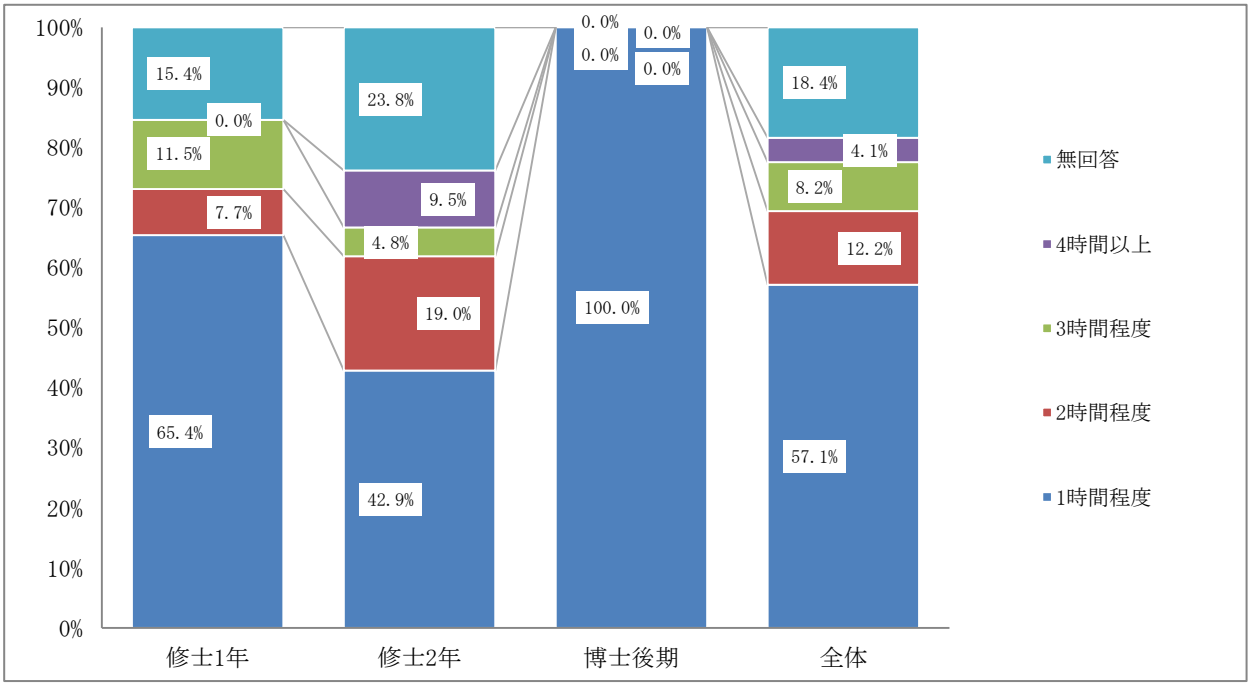

図 3.2.2　クラブ、サークルの一日の平均活動時間

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. １時間程度	17	9	2	28
2. ２時間程度	2	4	0	6
3. ３時間程度	3	1	0	4
4. ４時間以上	0	2	0	2
無回答	4	5	0	9

Ⅲ-③　ボランティア活動への参加

全体の 2 割程度がボランティア活動の経験ありとなっているが、昨年度は 4 割程度がボランティア活動の経験ありとなっており、今年度で経験者が大幅に減少している。

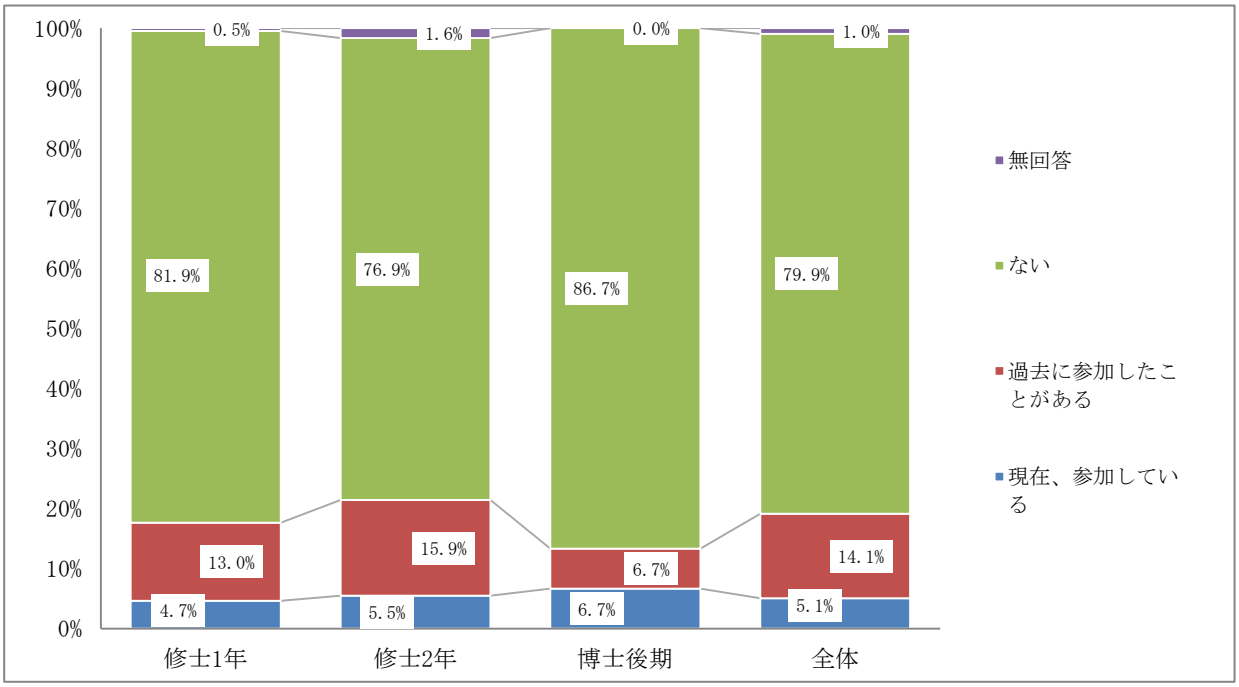

図 3.3　ボランティア活動への参加

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 現在、参加している	10	10	1	21
2. 過去に参加したことがある	28	29	1	58
3. ない	176	140	13	329
無回答	1	3	0	4

Ⅲ-④　ボランティア活動に参加する（した）理由（複数回答可）

昨年度と同様、誰かの役に立ちたいという最も常識的な項目に回答した学生が大多数であった。一方で、昨年度よりも「新しい出会いや経験をしたいから」、「自分の見聞を広めたいから」といった能動的な理由が増加しており、ボランティア活動経験者は減少している中で、経験者の積極性は増加している。

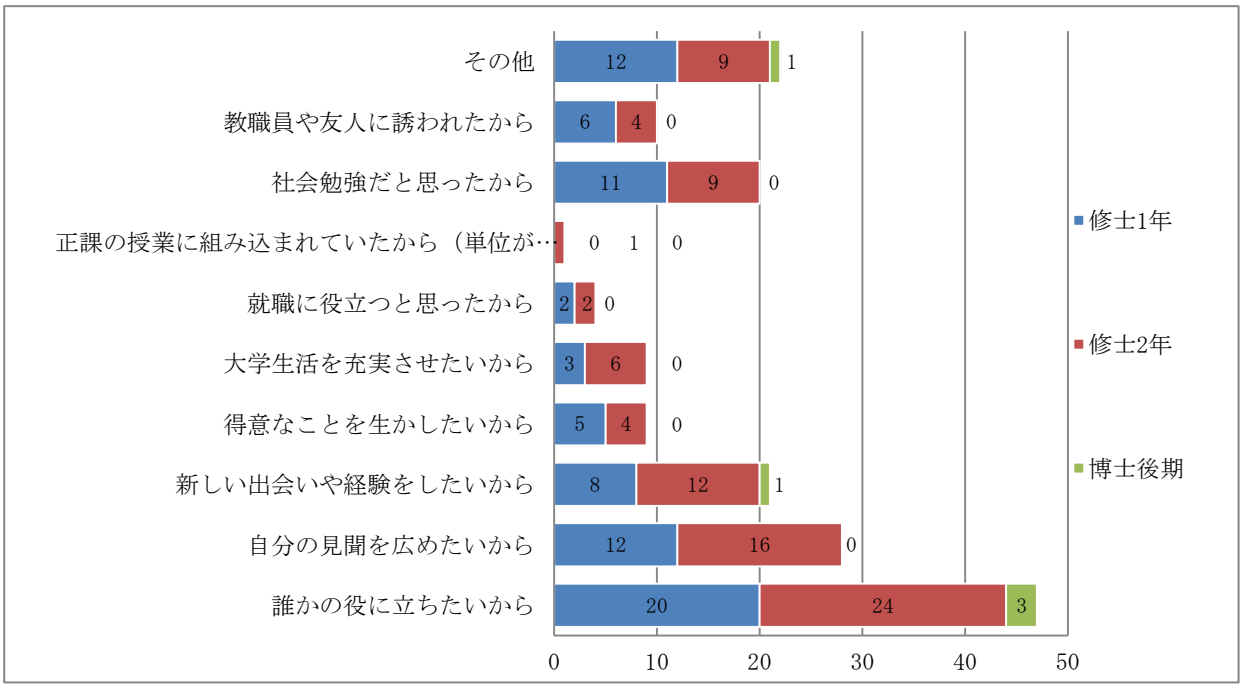

図 3.4　ボランティア活動に参加する（した）理由

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 誰かの役に立ちたいから	20	24	3	47
2. 自分の見聞を広めたいから	12	16	0	28
3. 新しい出会いや経験をしたいから	8	12	1	21
4. 得意なことを生かしたいから	5	4	0	9
5. 大学生活を充実させたいから	3	6	0	9
6. 就職に役立つと思ったから	2	2	0	4
7. 正課の授業に組み込まれていたから（単位が認定されるから）	0	1	0	1
8. 社会勉強だと思ったから	11	9	0	20
9. 教職員や友人に誘われたから	6	4	0	10
10. その他	12	9	1	22

Ⅲ-⑤　海外留学

昨年度と同様の傾向で、全体で 7 割近くの学生が留学を肯定的にとらえている。

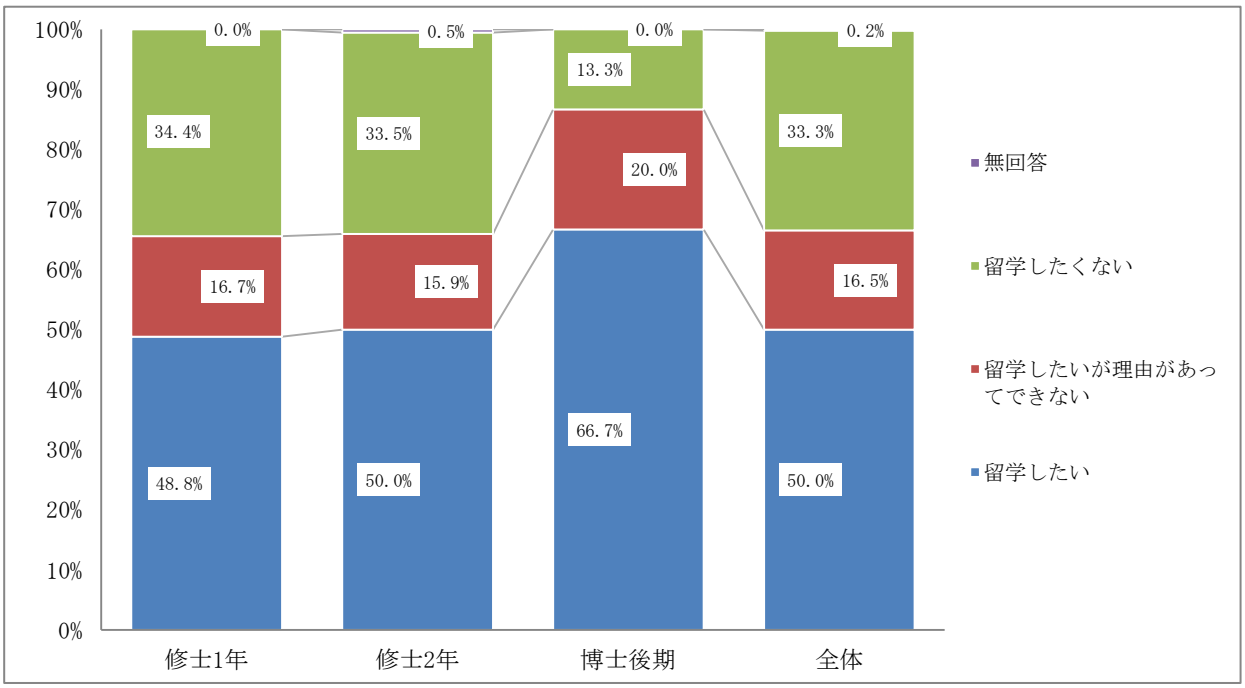

図 3.5　海外留学

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 留学したい	105	91	10	206
2. 留学したいが理由があってできない	36	29	3	68
3. 留学したくない	74	61	2	137
無回答	0	1	0	1

Ⅲ−⑤Sub　「留学したいが理由があってできない」、「留学したくない」と解答した理由（複数回答可）

全体的な傾向は昨年度と同様である。経済的な理由や時間、語学力の問題がほとんどである。海外留学向けの奨学金や、留学のための語学講座の充実が望まれる。

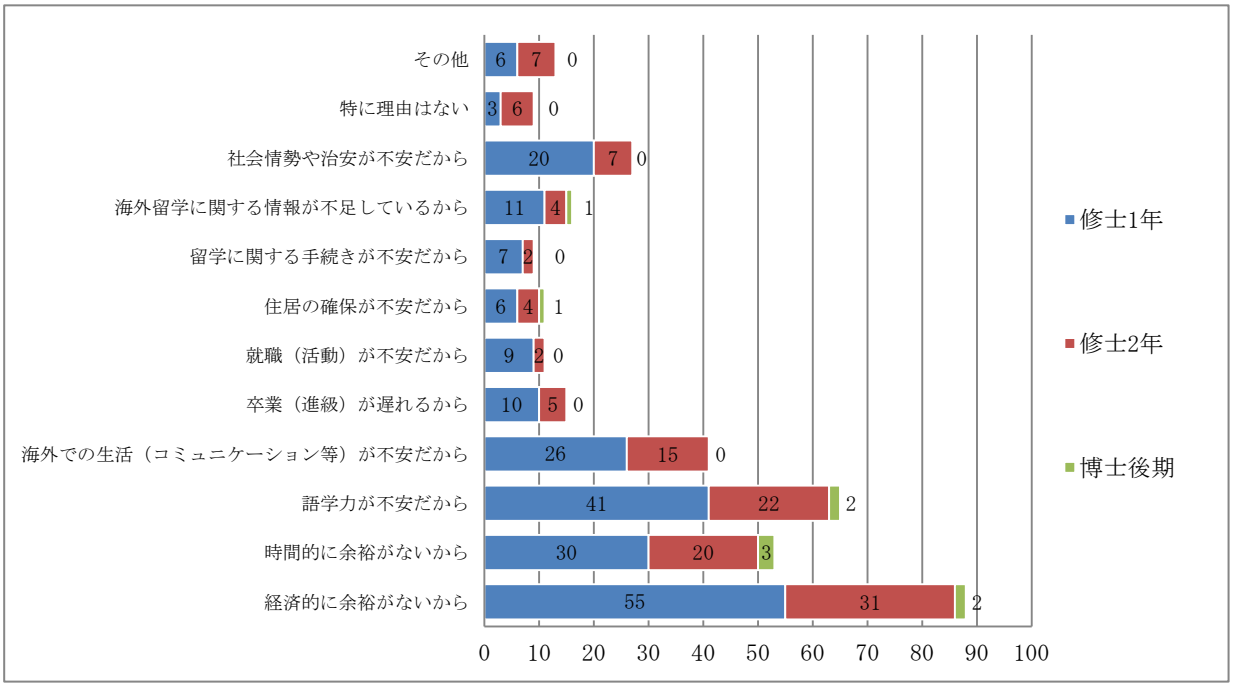

図 3.5.1　「留学したいが理由があってできない」、「留学したくない」と解答した理由

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 経済的に余裕がないから	55	31	2	88
2. 時間的に余裕がないから	30	20	3	53
3. 語学力が不安だから	41	22	2	65
4. 海外での生活（コミュニケーション等）が不安だから	26	15	0	41
5. 卒業（進級）が遅れるから	10	5	0	15
6. 就職（活動）が不安だから	9	2	0	11
7. 住居の確保が不安だから	6	4	1	11
8. 留学に関する手続きが不安だから	7	2	0	9
9. 海外留学に関する情報が不足しているから	11	4	1	16
10. 社会情勢や治安が不安だから	20	7	0	27
11. 特に理由はない	3	6	0	9
12. その他	6	7	0	13

Ⅲ-⑥　現在、抱えている悩みや問題（３つまで回答可）

全体的な傾向は昨年度と同様であり、勉学、就職、金銭問題、性格や能力に関する悩みが多い。勉学上の問題や就職・将来の進路に関する悩みが突出している。

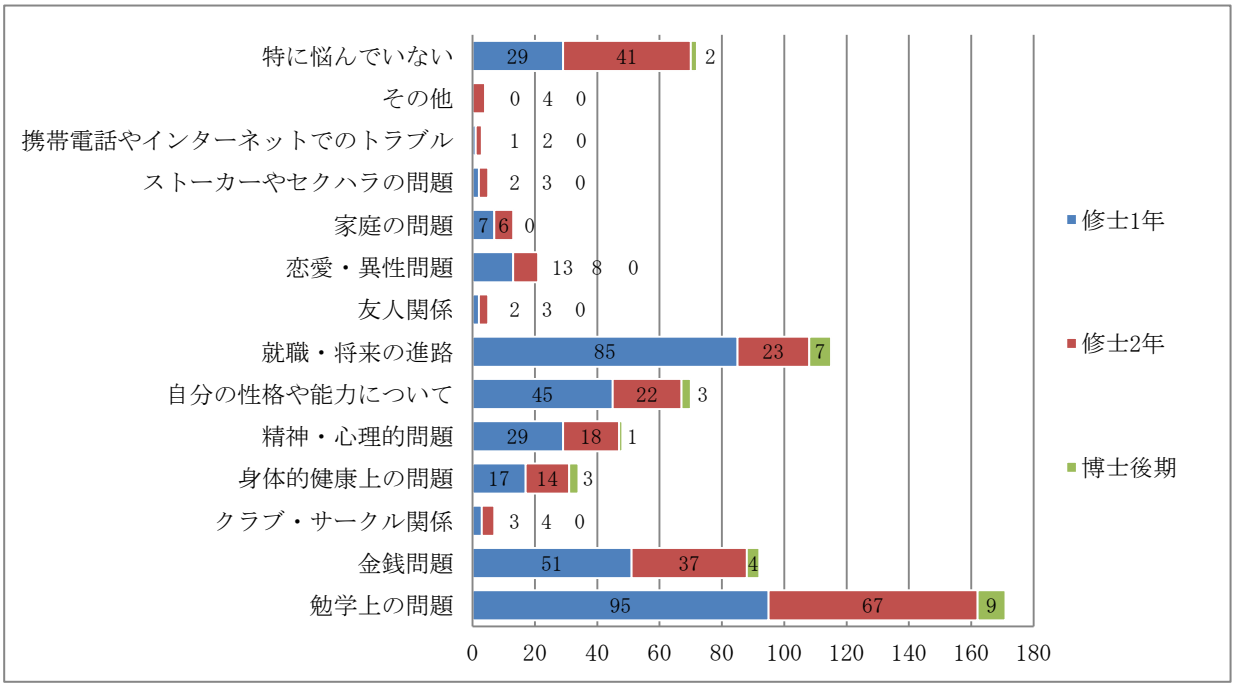

図 3.6　現在、抱えている悩みや問題

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 勉学上の問題	95	67	9	171
2. 金銭問題	51	37	4	92
3. クラブ・サークル関係	3	4	0	7
4. 身体的健康上の問題	17	14	3	34
5. 精神・心理的問題	29	18	1	48
6. 自分の性格や能力について	45	22	3	70
7. 就職・将来の進路	85	23	7	115
8. 友人関係	2	3	0	5
9. 恋愛・異性問題	13	8	0	21
10. 家庭の問題	7	6	0	13
11. ストーカーやセクハラの問題	2	3	0	5
12. 携帯電話やインターネットでのトラブル	1	2	0	3
13. その他	0	4	0	4
14. 特に悩んでいない	29	41	2	72

Ⅲ-⑦　悩みや問題の相談（３つまで回答可）

昨年度と同様、「家族に相談する」、「友人・先輩に相談する」と回答した学生が多数であった。「教員に相談する」と回答した学生は多くなく、「勉学上の問題」でさえも教員に相談せずに、友人・先輩に相談している可能性がある。

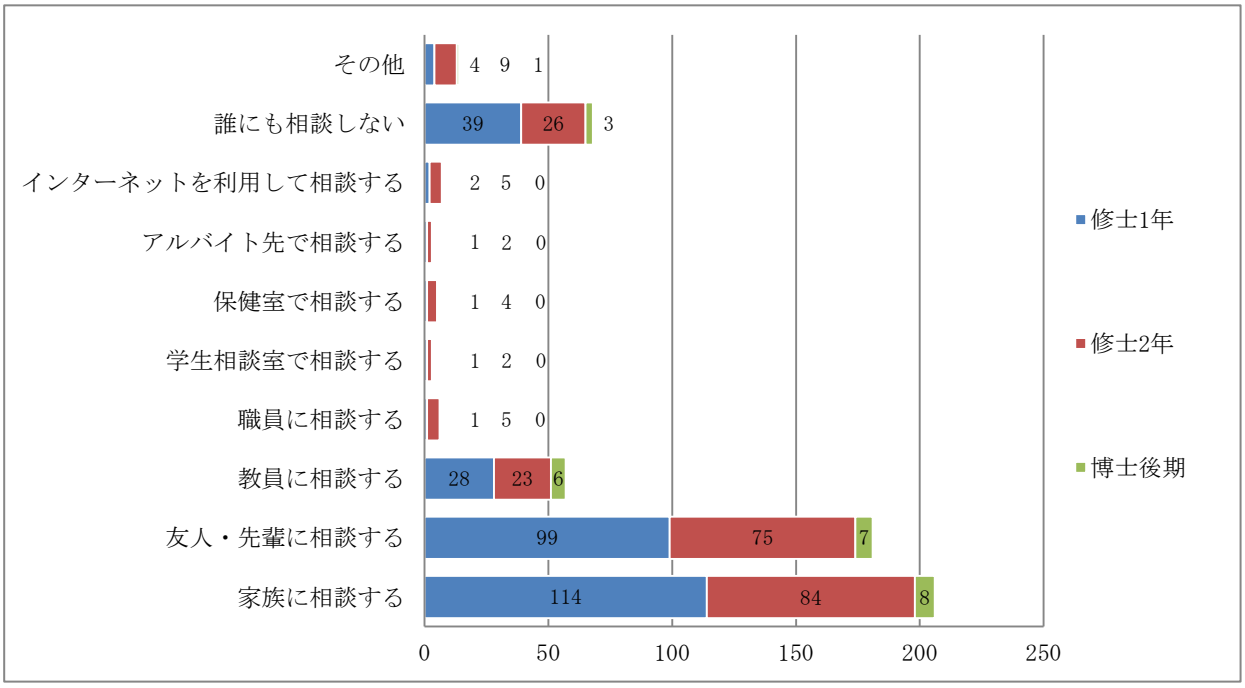

図 3.7　悩みや問題の相談

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 家族に相談する	114	84	8	206
2. 友人・先輩に相談する	99	75	7	181
3. 教員に相談する	28	23	6	57
4. 職員に相談する	1	5	0	6
5. 学生相談室で相談する	1	2	0	3
6. 保健室で相談する	1	4	0	5
7. アルバイト先で相談する	1	2	0	3
8. インターネットを利用して相談する	2	5	0	7
9. 誰にも相談しない	39	26	3	68
10. その他	4	9	1	14

Ⅲ-⑧　ハラスメント防止のための委員会や相談員の認知

これらの存在を知っている学生の割合は、今年度も昨年度とほぼ同様である。今後も委員会や相談員の存在を周知し続けることが重要である。

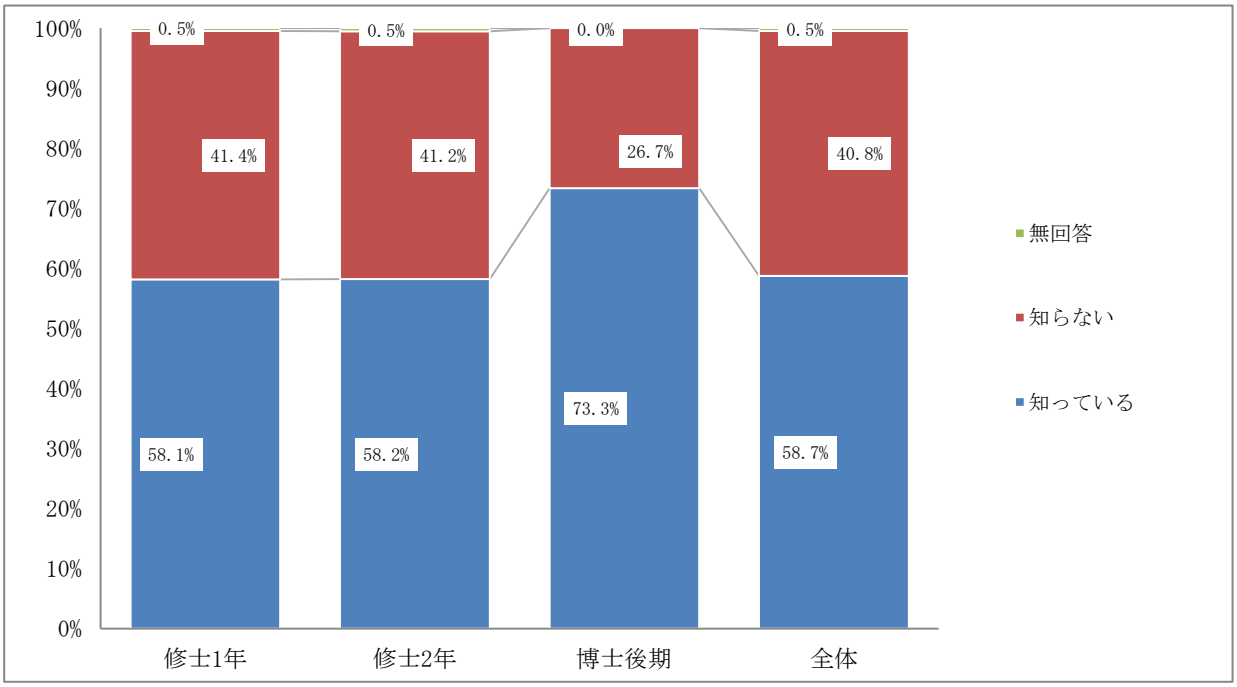

図 3.8　ハラスメント防止のための委員会や相談員の認知

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 知っている	125	106	11	242
2. 知らない	89	75	4	168
無回答	1	1	0	2

Ⅲ - ⑨　喫煙の有無

喫煙者の割合は、今年度も昨年度とほぼ同様である。学内全面禁煙の効果が継続して、喫煙率が低く抑えられている可能性が高い。

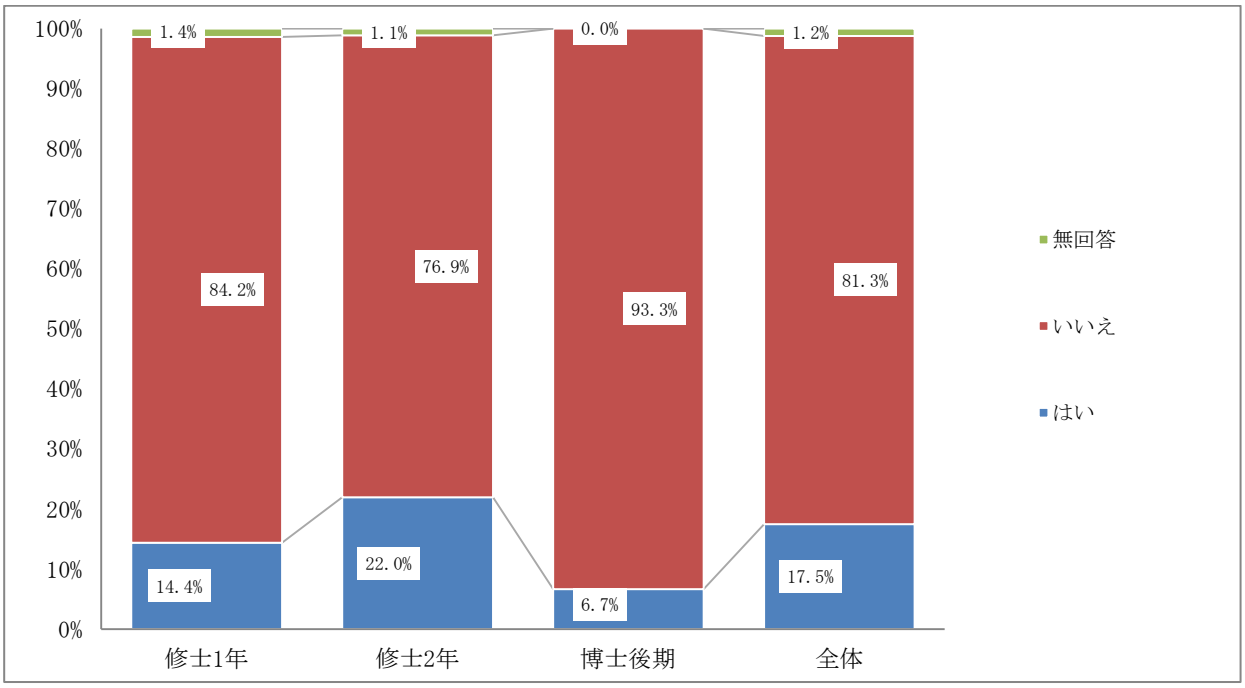

図 3.9　喫煙の有無

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. はい	31	40	1	72
2. いいえ	181	140	14	335
無回答	3	2	0	5

Ⅲ-⑨-イ　喫煙による健康への影響の認識

（Ⅲ - ⑨で「1. はい」と回答した方のみ）

今年度も昨年度とほぼ同様の結果である。喫煙による健康への影響は、社会的にも常に周知されているので、「いいえ」と回答している者は、一般とは異なる健康の判断基準を持っている可能性が高い。

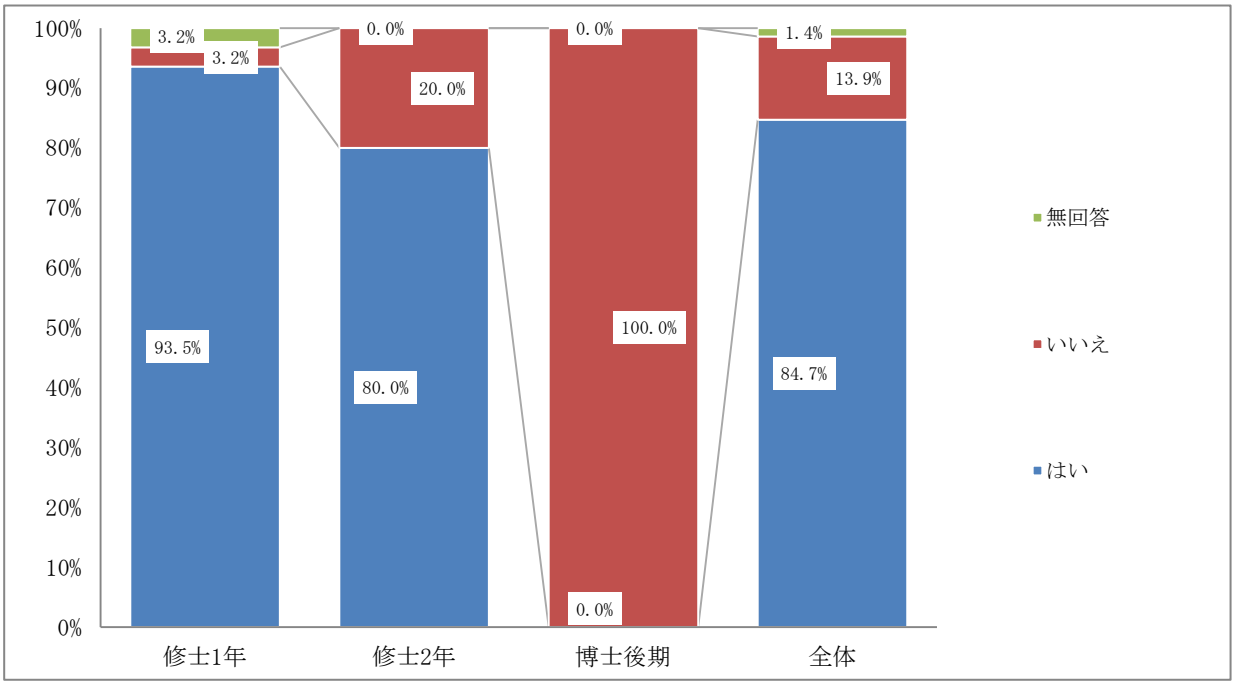

図 3.9.1　喫煙による健康への影響の認識

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. はい	29	32	0	61
2. いいえ	1	8	1	10
無回答	1	0	0	1

Ⅲ−⑨−ロ　喫煙による受動喫煙の認識

（Ⅲ - ⑨で「1. はい」と回答した方のみ）

喫煙者は少数であるが、その多くが受動喫煙を認識しており、禁煙スペースが増加することに対しても納得していることを期待する。

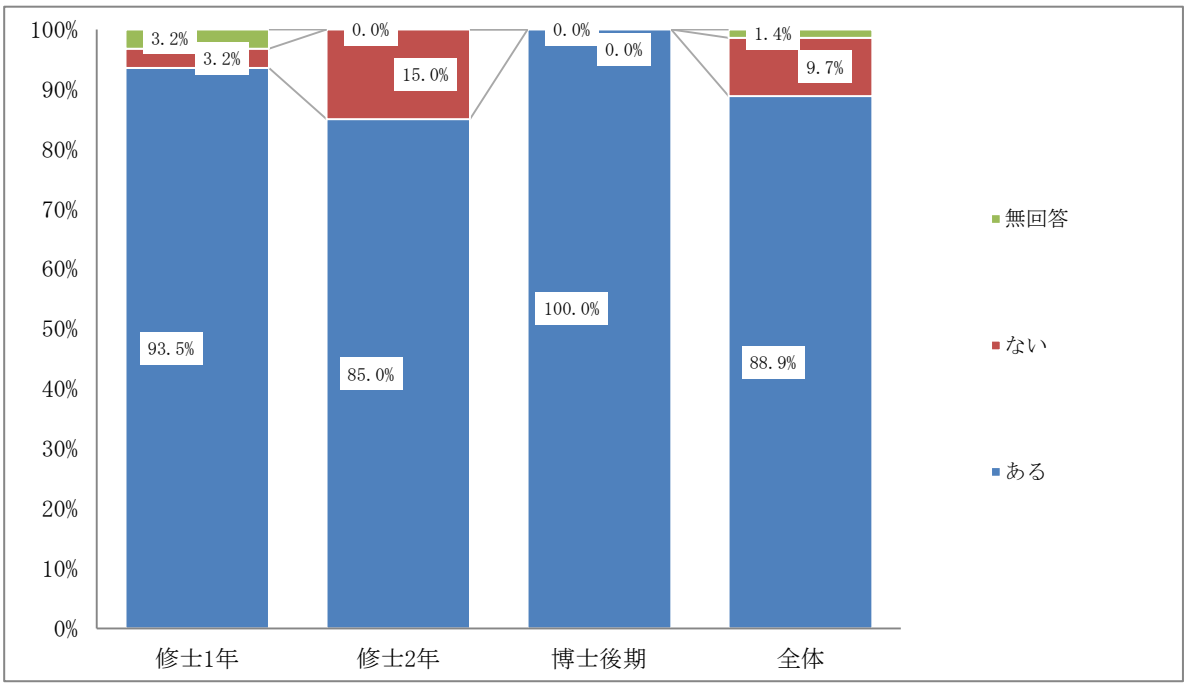

図 3.9.2　喫煙による受動喫煙の認識

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. ある	29	34	1	64
2. ない	1	6	0	7
無回答	1	0	0	1

Ⅲ−⑨−ハ　禁煙の意志

（Ⅲ - ⑨で「1. はい」と回答した方のみ）

昨年度より禁煙希望者が現象している。喫煙者を対象に、禁煙のメリットを周知する仕組みがあると良い。

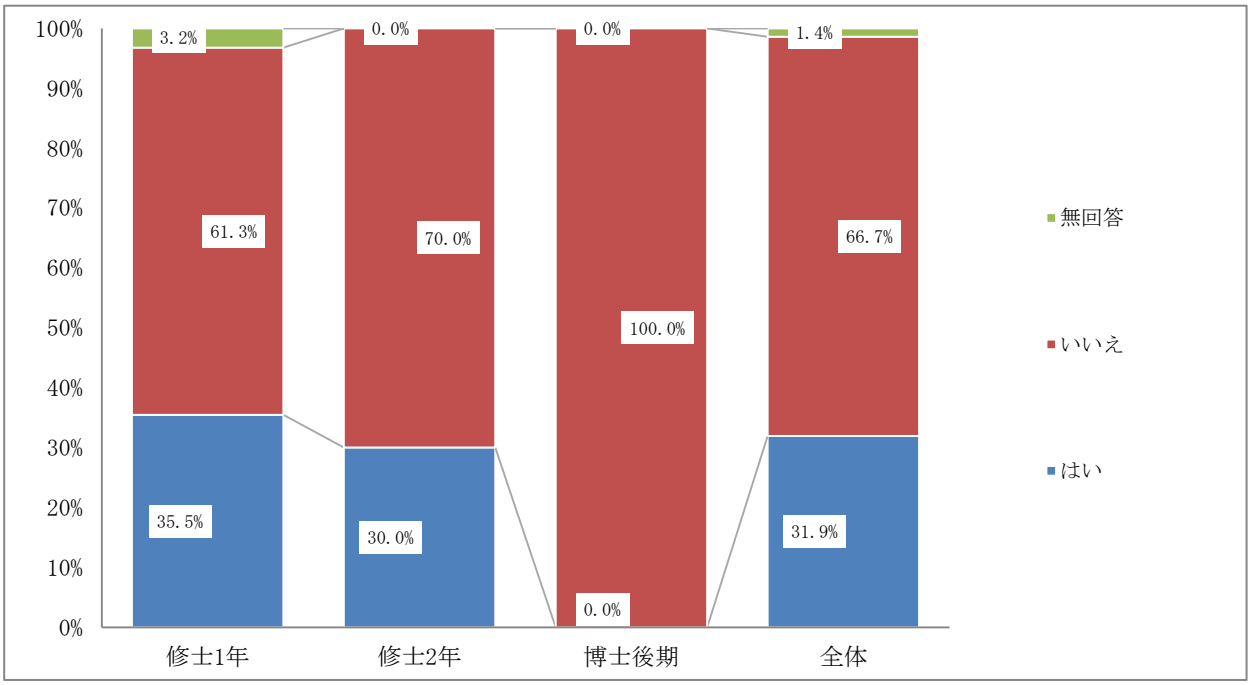

図 3.9.3　禁煙の意志

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. はい	11	12	0	23
2. いいえ	19	28	1	48
無回答	1	0	0	1

Ⅲ - ⑩　キャンパス内全面禁煙

全体で全面禁煙になんらかの不満をもつ学生の割合は昨年度とほぼ同様である。全面禁煙を多くの学生が満足しているので、有効な施策であったといえるが、喫煙場所を失った喫煙者の教育や対策が今後も継続的に必要である。

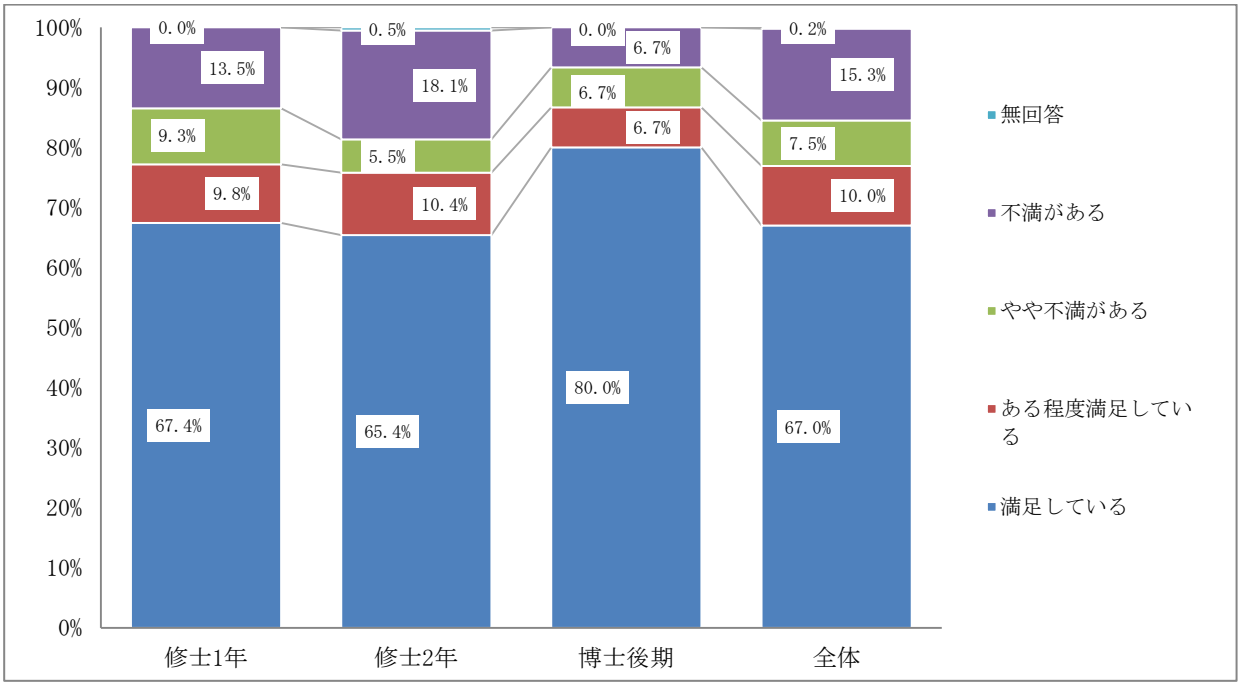

図 3.10　キャンパス内全面禁煙

(回答者数)

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 満足している	145	119	12	276
2. ある程度満足している	21	19	1	41
3. やや不満がある	20	10	1	31
4. 不満がある	29	33	1	63
無回答	0	1	0	1

＜Ⅳ＞進路について

Ⅳ-① 将来の進路をどのように考えていますか。

1. 民間企業を希望している
2. 公務員を希望している
3. 起業する
4. 家業を継ぐ
5. 博士後期課程進学を希望している（修士課程対象）
6. その他

設問Ⅳ-①で『1.民間企業を希望している』と回答した方は、次のイ～ロの設問にも回答してください。

イ. どの業種（業界）を希望しますか。

1. 機械器具製造業
2. 輸送用機器製造業
3. 電気機器製造業
4. 化学・鉄鋼等製造業（素材）
5. 食品・薬品等製造業
6. 建築・設備業（電気工事を含む）
7. 電気・ガス・水道業
8. マスコミ・広告業（放送を含む）
9. 情報・通信業
10. 卸・小売業（デパート・スーパーなど）
11. 金融・保険業
12. 医療・福祉サービス業
13. 教育
14. その他

ロ. どの職種（仕事内容）を希望していますか。

1. 研究・開発職
2. 機械・電気設計職
3. 建築・土木設計職
4. 製造（生産）技術職
5. 施工管理職
6. 情報システム職
7. 企画職（デザイン含む）
8. 営業・販売職
9. 財務・経理・事務職
10. その他

Ⅳ-② 職業を選ぶ際にどのようなことを重視（優先）しますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 自分が学ぶ（学んだ）専門知識が生かせること
2. 技術や知識が身につけられること
3. いろいろな仕事にチャレンジできること
4. 自分の独創性や創造性を発揮できること
5. 自分の成長の機会が与えられること
6. 将来独立して、起業できること
7. 社会に貢献できること
8. 将来性があること
9. 安定性を期待できること
10. 実力主義であること
11. 福利厚生が充実していること
12. 休みが多いこと
13. 海外勤務の機会が多いこと
14. 転勤がないこと
15. 自宅から通勤できること
16. その他 （具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅳ-③ 学部時代に就職活動をしましたか。

1. 就職活動をした
2. 就職活動をしていない

Ⅳ-④ 学部の時に比べ、大学院生の方が、就職は有利になると考えますか。

1. 当然、有利になることを期待して大学院に進学した
2. 企業側の要求がレベルアップしているはずなので、学部の時よりも厳しいと思う
3. 自分の希望する会社のレベルも上がっているので、学部の時と変わらないと思う
4. 学部の時と何ひとつ変わらないと思う
5. 結局は自分次第だと思う

Ⅳ-⑤ 千葉工業大学の学部を卒業した方にお聞きします。

学部生には、将来の進路を考えるきっかけとして『自己表現法・進路を考える』といった職業観教育（キャリア教育）を科目として開講していましたが、この職業観教育（キャリア教育）科目について、どのように取り組み、また、考えましたか。

1. 学部生の時に受講した。自己の進路を考える上で役に立った
2. 学部生の時に受講した。受講したが、自分にとっては意味がなかった
3. 受講したかったが、都合（他授業との兼ね合いなど）により受講できなかった
4. 興味が無いので受講しなかった
5. 授業として科目があることを知らなかった

Ⅳ-⑥ 現在、大学院生には、学部生のように、進路を考えるきかっけとしての職業観教育（キャリア教育）科目は実施していません。現在の状況について、どのように考えていますか。

1. 重要なことなので、科目として開講するなど、積極的に行ってほしい
2. 必要なことなので、進路支援行事の中で、時間を割いてほしい
3. 将来の進路を考えて、大学院に進学したのだから、必要ない

Ⅳ-⑦ 先の質問のように、大学では、学部生を対象としたキャリア教育を実施していますが、自分自身で、キャリアアップのために実施していることはありますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 自分が目指す業界で必要となる資格の取得
2. 英会話等の語学力向上
3. 研究成果を挙げ、教員と相談の上、学会発表・論文投稿等を自発的に行なうこと
4. 必要な分野であれば、専門分野以外のことにも、積極的に取り組むこと
5. その他
6. 特になし

Ⅳ-⑧ 大学でのキャリア支援（進路支援）の内容で、充実してほしいことはどれですか（複数回答可）。

複数回答可

1. 進路ガイダンス
2. 就職に関する資料（情報誌・企業ファイルなど）
3. 進学に関する資料
4. 業界・職種説明会
5. OB・OG による企業説明会（公務員を含む）
6. 企業人事担当による説明会（公務員を含む）
7. 教職員による就職相談（助言・指導など）
8. 就職システム（Web）を活用した就職情報
9. インターンシップ制度
10. 資格取得（TOEIC・基本情報処理技術者など）を目的とした講座
11. 先輩達の活躍状況
12. その他 （具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅳ-①　将来の進路

将来の進路については、全体で 65.0%の学生が「民間企業を希望している」と回答し、最も多かった。昨年度と比較すると民間企業への就職希望者は 1.2 ポイント増加、公務員の希望者は 0.8 ポイント増加し、昨年度の減少傾向から増加傾向に転じた。

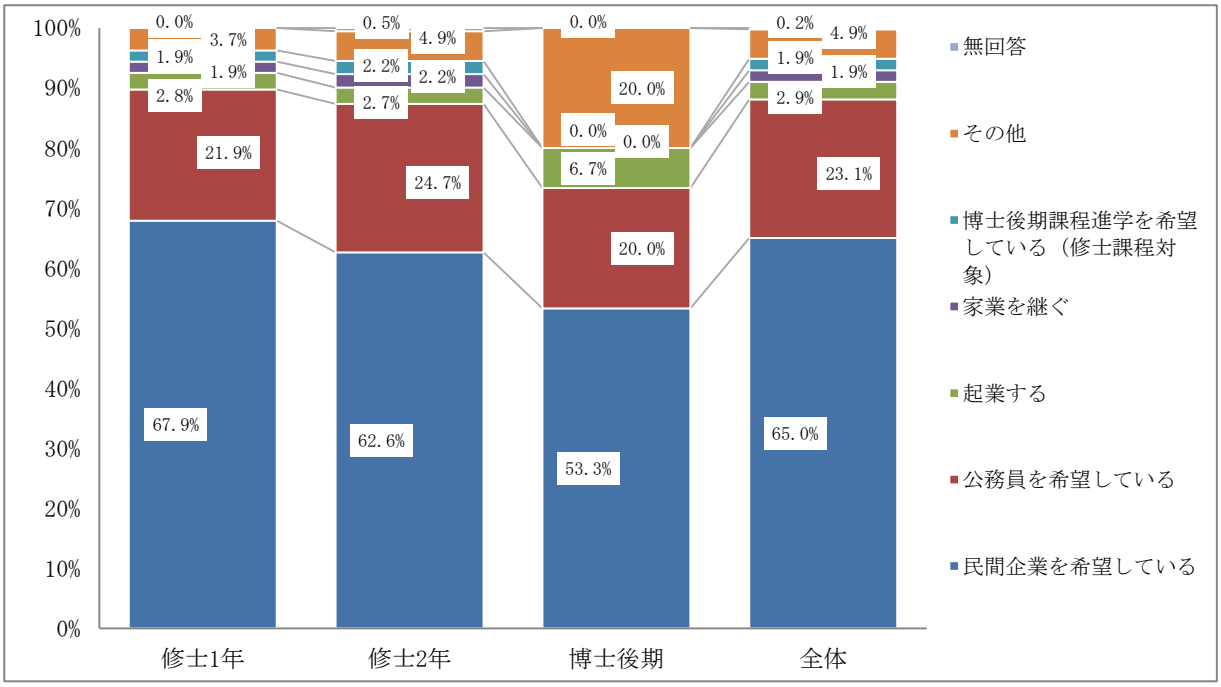

図 4.1　将来の進路

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 民間企業を希望している	146	114	8	268
2. 公務員を希望している	47	45	3	95
3. 起業する	6	5	1	12
4. 家業を継ぐ	4	4	0	8
5. 博士後期課程進学を希望している（修士課程対象）	4	4	0	8
6. その他	8	9	3	20
無回答	0	1	0	1

Ⅳ-①-イ　民間企業への希望業種

（Ⅳ-①で「民間企業への就職を希望している」と回答した方のみ）

希望業種は、工科系の業種に万遍なく分布していると言える。比較的希望が多い業種は、「情報・通信業」19.4%、「機械器具製造業」19.0%、「電気機器製造業」13.8%である。昨年度と比較して、「情報・通信業」は 0.7 ポイント増加し、1.2 ポイント減少した「機械器具製造業」と順位が入れ替わった。また、昨年度 3 位だった「化学･鉄鋼等製造業（素材）」は 4.5 ポイント減少し、3.5 ポイント増加した「電気機器製造業」と順位が入れ替わった。

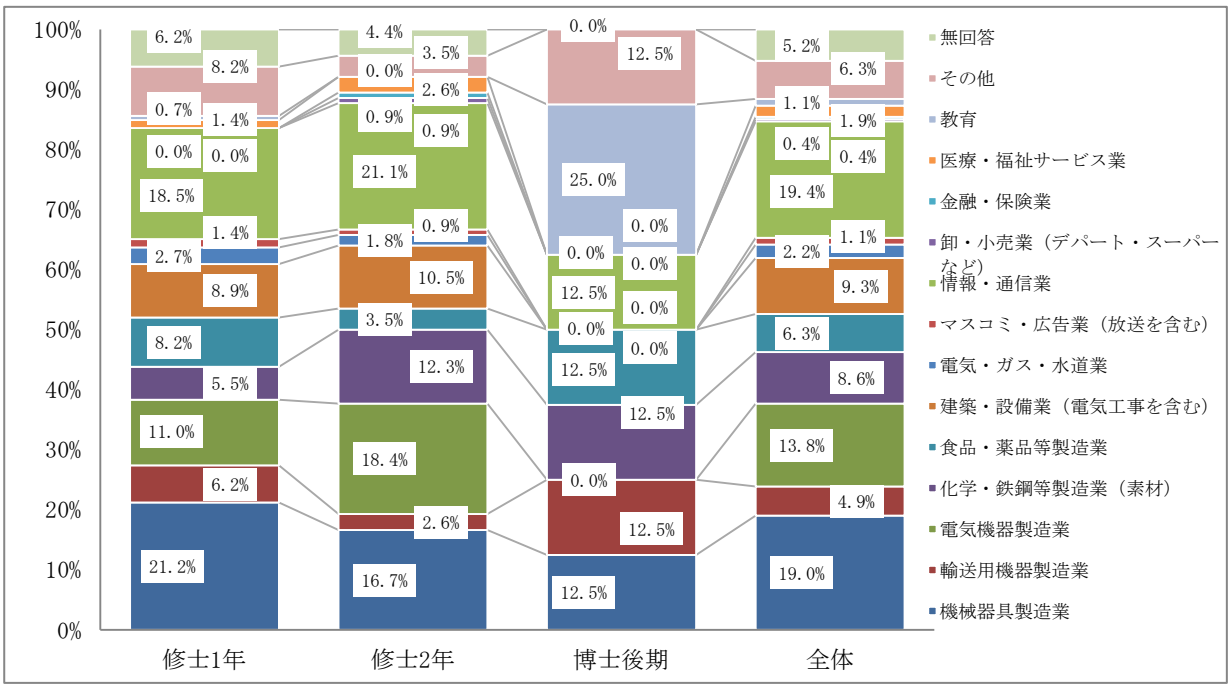

図 4.1.1　民間企業への希望業種

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 機械器具製造業	31	19	1	51
2. 輸送用機器製造業	9	3	1	13
3. 電気機器製造業	16	21	0	37
4. 化学・鉄鋼等製造業（素材）	8	14	1	23
5. 食品・薬品等製造業	12	4	1	17
6. 建築・設備業（電気工事を含む）	13	12	0	25
7. 電気・ガス・水道業	4	2	0	6
8. マスコミ・広告業（放送を含む）	2	1	0	3
9. 情報・通信業	27	24	1	52
10. 卸・小売業（デパート・スーパーなど）	0	1	0	1
11. 金融・保険業	0	1	0	1
12. 医療・福祉サービス業	2	3	0	5
13. 教育	1	0	2	3
14. その他	12	4	1	17
無回答	9	5	0	14

Ⅳ-①-ロ　民間企業への希望職種

（Ⅳ-①で「民間企業への就職を希望している」と回答した方のみ）

希望職種は「研究・開発職」が修士課程 1 年次で 45.2%、修士課程 2 年次で 42.1%、博士後期課程で 100%と突出している。全体では順位の変化はあるものの、昨年度と同等の比率である。全体では昨年度と比較し、「施工管理職」が減少、「企画職（デザイン含む）」は増加した。

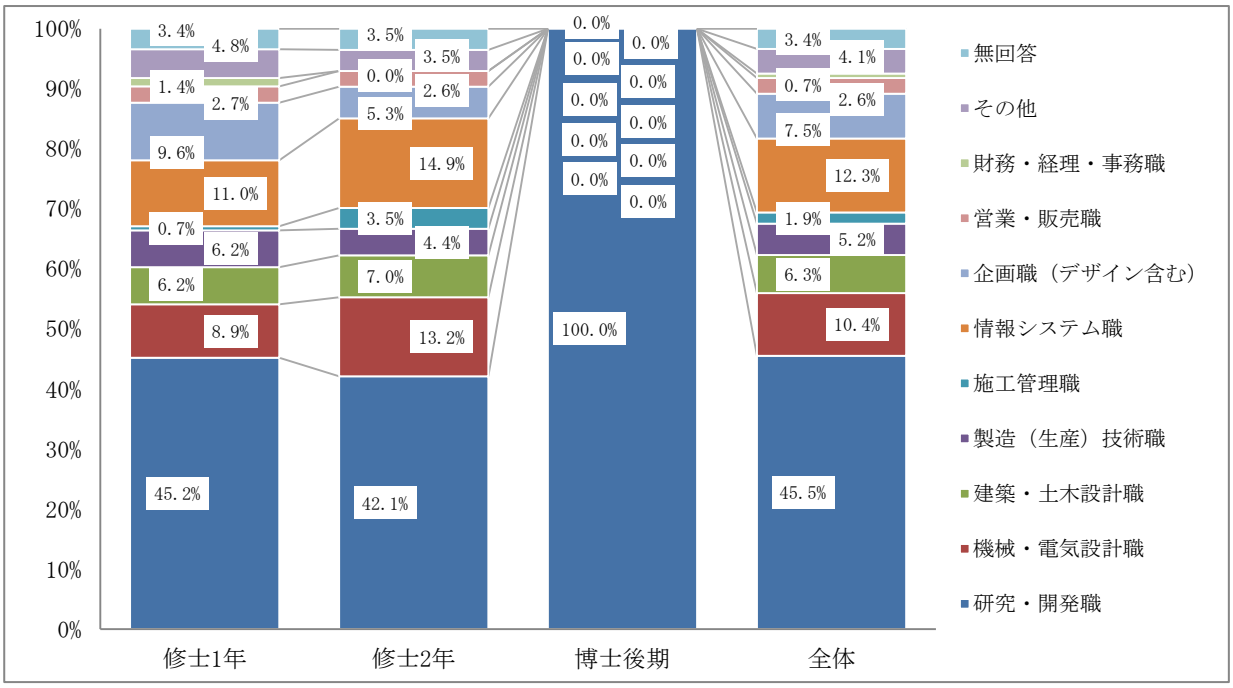

図 4.1.2　民間企業への希望職種

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 研究・開発職	66	48	8	122
2. 機械・電気設計職	13	15	0	28
3. 建築・土木設計職	9	8	0	17
4. 製造（生産）技術職	9	5	0	14
5. 施工管理職	1	4	0	5
6. 情報システム職	16	17	0	33
7. 企画職（デザイン含む）	14	6	0	20
8. 営業・販売職	4	3	0	7
9. 財務・経理・事務職	2	0	0	2
10. その他	7	4	0	11
無回答	5	4	0	9

Ⅳ-②　職業選択の重視度(複数回答可)

職業を選ぶ際に重視することとして、全体で最も多かった回答は「自分が学ぶ（学んだ）専門知識が生かせること」であった。「技術や知識が身につけられる」「安定性を期待できる」が続き、昨年度と同じ順番であった。

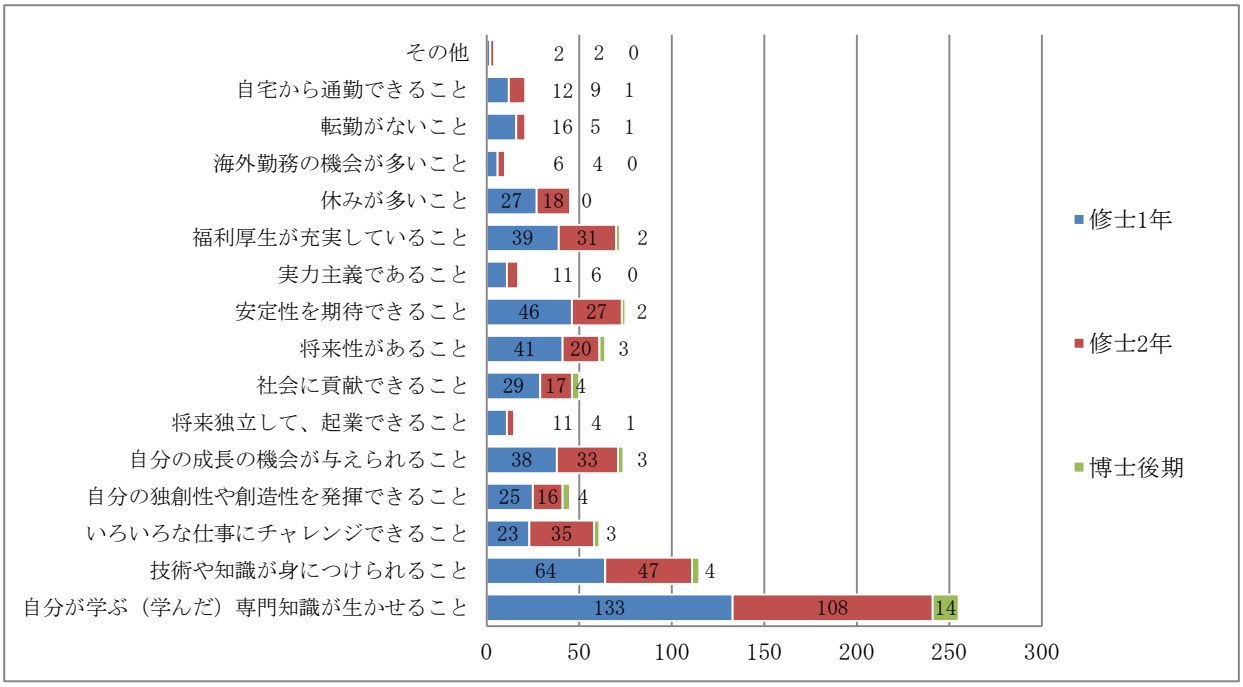

図 4.2　職業選択の重視度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 自分が学ぶ（学んだ）専門知識が生かせること	133	108	14	255
2. 技術や知識が身につけられること	64	47	4	115
3. いろいろな仕事にチャレンジできること	23	35	3	61
4. 自分の独創性や創造性を発揮できること	25	16	4	45
5. 自分の成長の機会が与えられること	38	33	3	74
6. 将来独立して、起業できること	11	4	1	16
7. 社会に貢献できること	29	17	4	50
8. 将来性があること	41	20	3	64
9. 安定性を期待できること	46	27	2	75
10. 実力主義であること	11	6	0	17
11. 福利厚生が充実していること	39	31	2	72
12. 休みが多いこと	27	18	0	45
13. 海外勤務の機会が多いこと	6	4	0	10
14. 転勤がないこと	16	5	1	22
15. 自宅から通勤できること	12	9	1	22
16. その他	2	2	0	4

Ⅳ-③　学部時代の就職活動

学部時代の就職活動は、「就職活動をした」と回答した学生は全体の 55.1%であり、昨年度より 17.4 ポイント上昇した。「就職活動をしていない」と答えた学生は 16.3 ポイント減少しており、学部時代に就職活動を経験した学生が増加した。

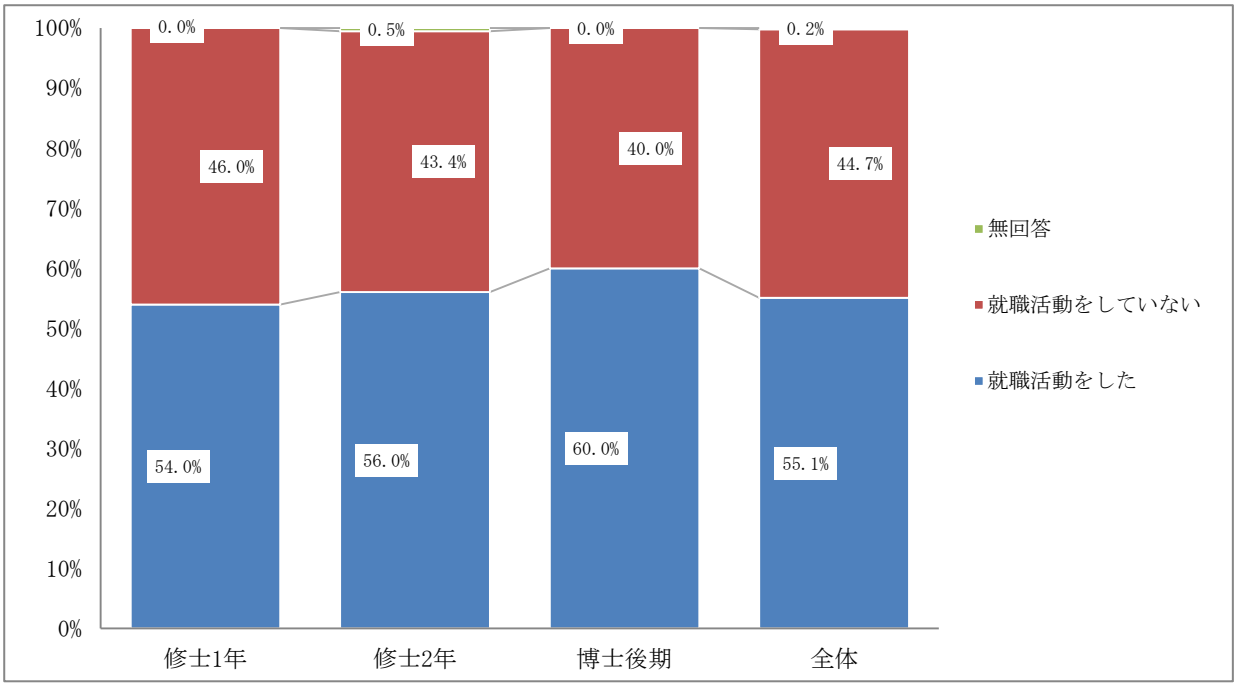

図 4.3　学部時代の就職活動

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 就職活動をした	116	102	9	227
2. 就職活動をしていない	99	79	6	184
無回答	0	1	0	1

Ⅳ-④　就職活動の有利性

学部の時に比べ大学院生の就職は有利になるか、の問に対し、全体で「当然、有利になることを期待して大学院に進学した」が 47.1%で最も多く、昨年度より 0.3 ポイント増加した。修士 2 年次は昨年と比べ、特に増加した結果であった。

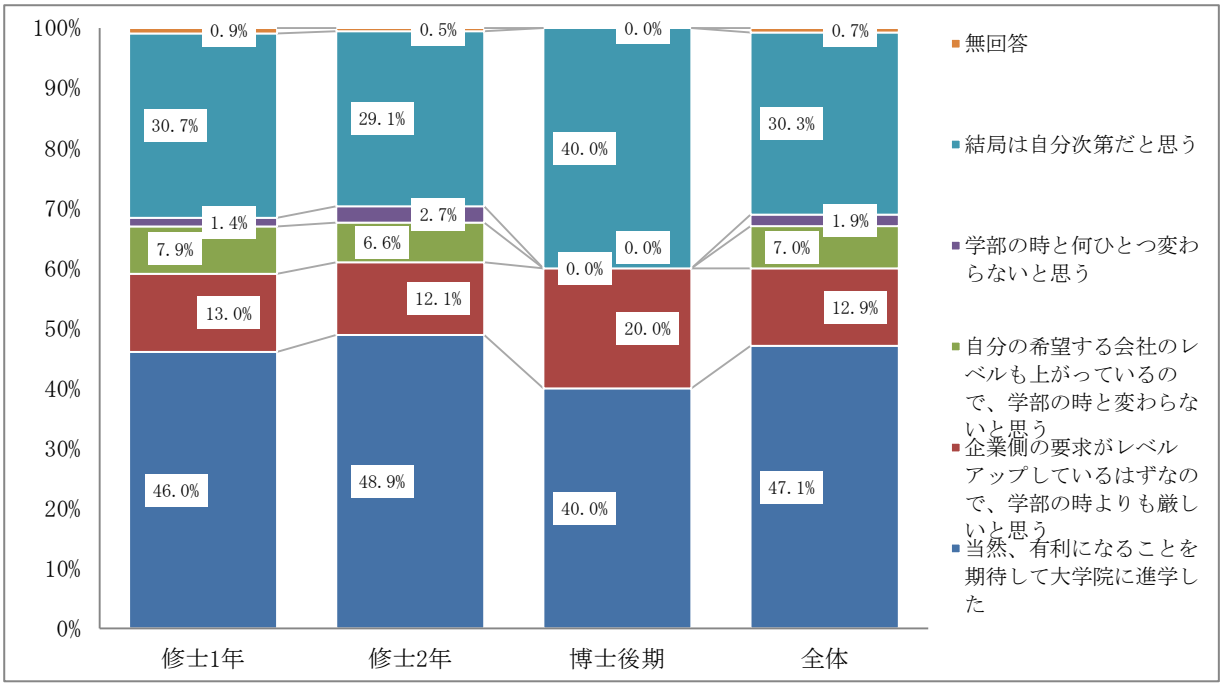

図 4.4　就職活動の有利性

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 当然、有利になることを期待して大学院に進学した	99	89	6	194
2. 企業側の要求がレベルアップしているはずなので、学部の時よりも厳しいと思う	28	22	3	53
3. 自分の希望する会社のレベルも上がっているので、学部の時と変わらないと思う	17	12	0	29
4. 学部の時と何ひとつ変わらないと思う	3	5	0	8
5. 結局は自分次第だと思う	66	53	6	125
無回答	2	1	0	3

Ⅳ-⑤　職業観教育（キャリア教育）科目の取組み

職業観教育（キャリア教育）については、全体で「学部生の時に受講した。自己の進路を考える上で役に立った」との回答が 38.6%で最も多く、昨年度と比較して 1.4 ポイント増加した。昨年に比べ、修士 2 年次はキャリア教育を受講した学生の満足度の上昇がうかがえる。

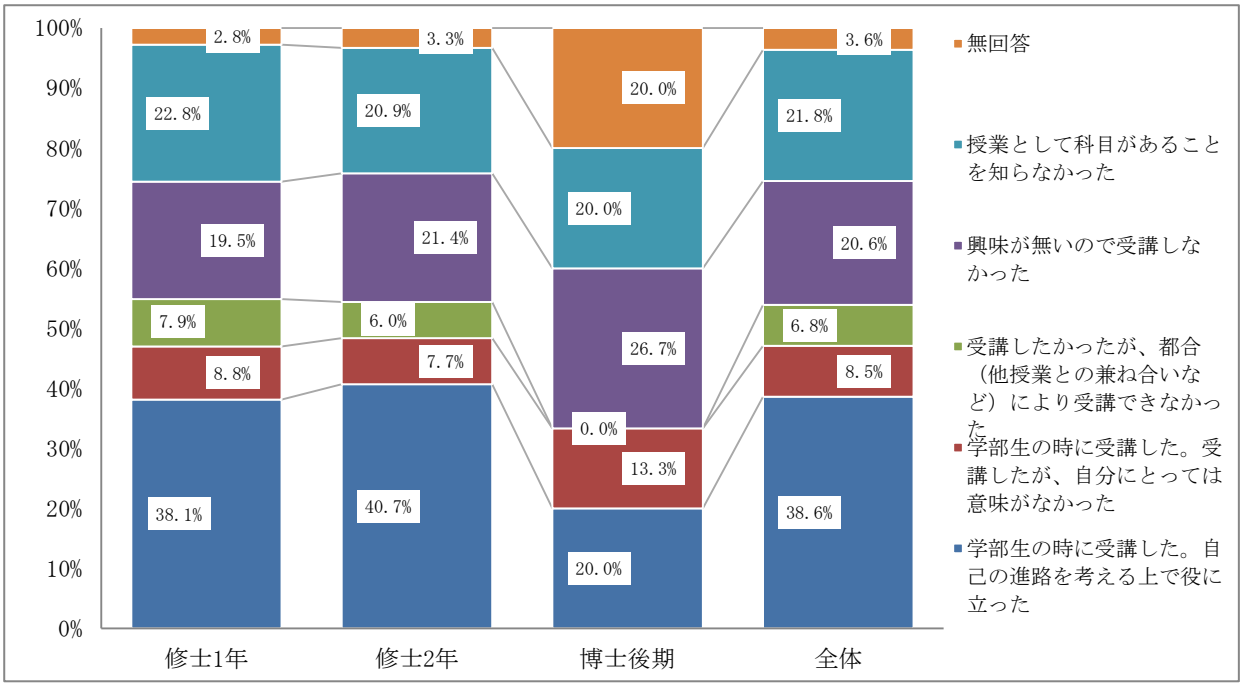

図 4.5　職業観教育（キャリア教育）科目の取組み

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 学部生の時に受講した。自己の進路を考える上で役に立った	82	74	3	159
2. 学部生の時に受講した。受講したが、自分にとっては意味がなかった	19	14	2	35
3. 受講したかったが、都合（他授業との兼ね合いなど）により受講できなかった	17	11	0	28
4. 興味が無いので受講しなかった	42	39	4	85
5. 授業として科目があることを知らなかった	49	38	3	90
無回答	6	6	3	15

Ⅳ-⑥　職業観教育（キャリア教育）科目の必要性

職業観教育（キャリア教育）科目の必要性に対する回答は、「必要なことなので、進路支援行事の中で、時間を割いてほしい」と「重要なことなので、科目として開講するなど、積極的に行ってほしい」を合わせると 62.5%であり、半数以上の学生が必要性を感じている結果となった。

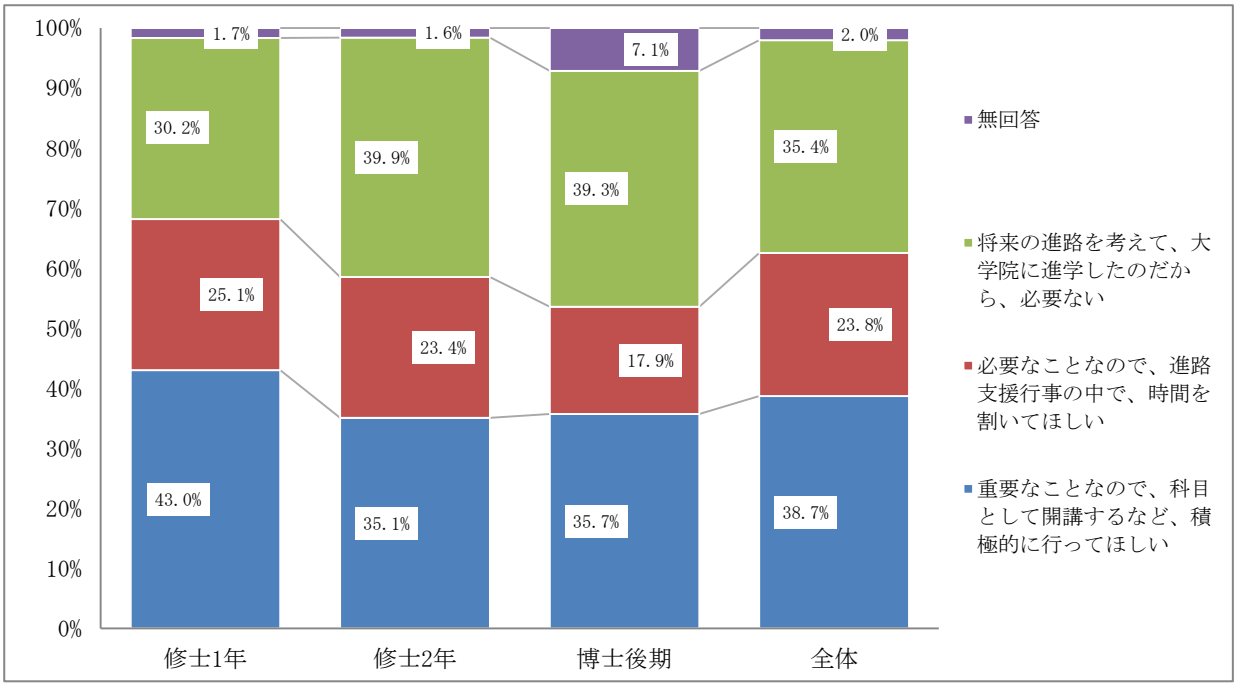

図 4.6　職業観教育（キャリア教育）科目の必要性

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 重要なことなので、科目として開講するなど、積極的に行ってほしい	93	68	1	162
2. 必要なことなので、進路支援行事の中で、時間を割いてほしい	49	42	7	98
3. 将来の進路を考えて、大学院に進学したのだから、必要ない	71	71	7	149
無回答	2	1	0	3

Ⅳ-⑦　自分自身によるキャリアアップの実施状況（複数回答可）

自分自身で行っているキャリアアップのための自己研鑽を問う設問に対し、全体では「自分が目指す業界で必要となる資格の取得」が最も多く、昨年度と同様で資格取得を重視する傾向はほとんど変わらなかった。また、「必要な分野であれば、専門分野以外のことにも、積極的に取り組むこと」が昨年度より上昇した結果となった。

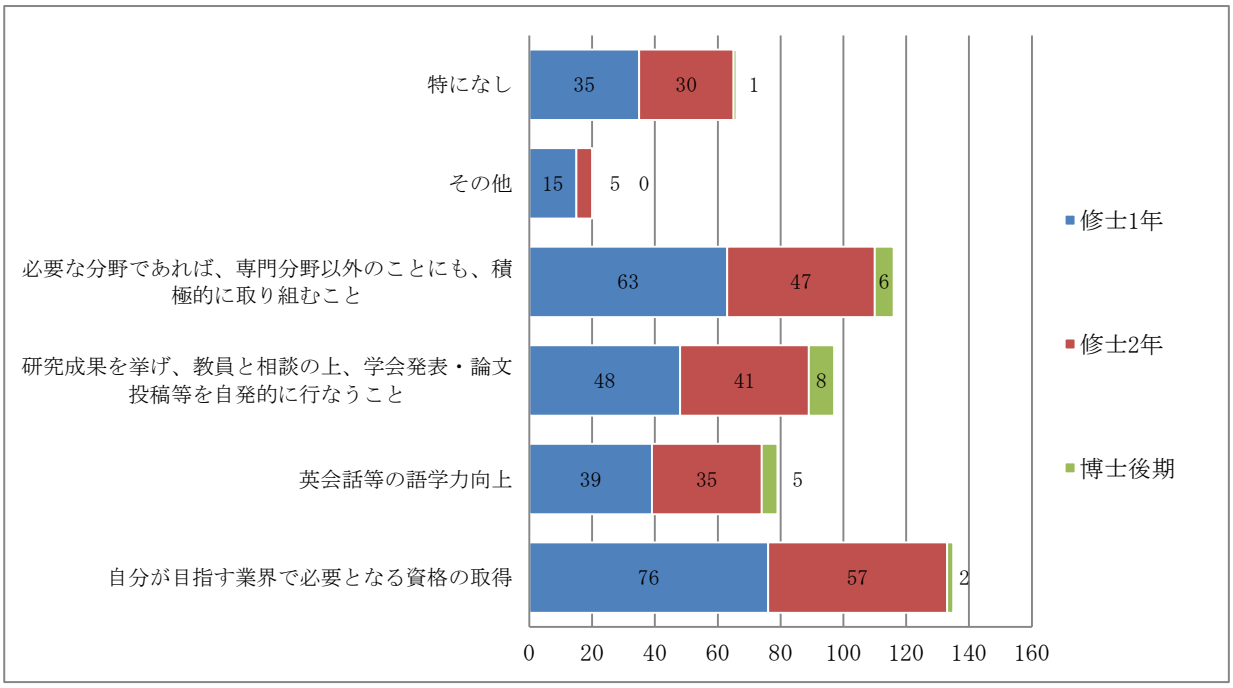

図 4.7　自分自身によるキャリアアップの実施状況

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 自分が目指す業界で必要となる資格の取得	76	57	2	135
2. 英会話等の語学力向上	39	35	5	79
3. 研究成果を挙げ、教員と相談の上、学会発表・論文投稿等を自発的に行なうこと	48	41	8	97
4. 必要な分野であれば、専門分野以外のことにも、積極的に取り組むこと	63	47	6	116
5. その他	15	5	0	20
6. 特になし	35	30	1	66

Ⅳ-⑧　キャリア支援（進路支援）充実の希望（複数回答可）

キャリア支援（進路支援）の内容で充実して欲しいことは、「進路ガイダンス」、「就職に関する資料」が多数を占めた。「資格取得（TOEIC・基本情報処理技術者など）を目的とした講座」がこれに続き、昨年度より高い結果であった。「インターンシップ制度」、「業界・職種説明会」がこれに続いた。

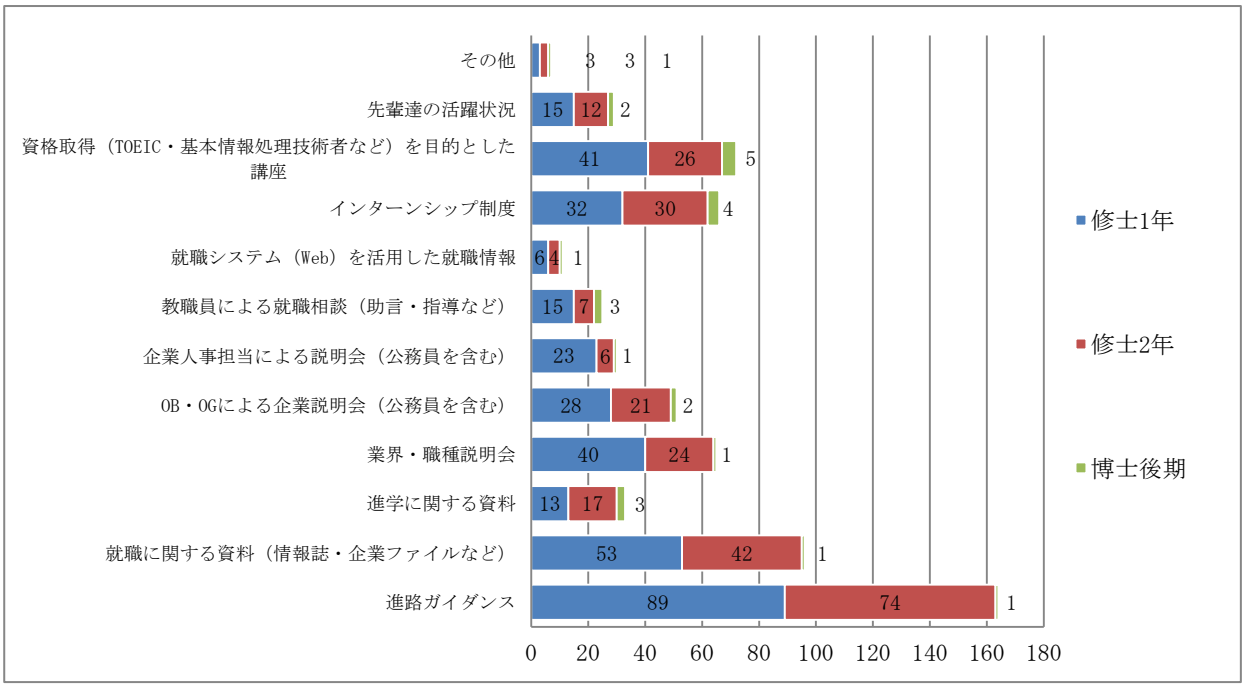

図 4.8　キャリア支援（進路支援）充実の希望

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 進路ガイダンス	89	74	1	164
2. 就職に関する資料（情報誌・企業ファイルなど）	53	42	1	96
3. 進学に関する資料	13	17	3	33
4. 業界・職種説明会	40	24	1	65
5. OB・OG による企業説明会（公務員を含む）	28	21	2	51
6. 企業人事担当による説明会（公務員を含む）	23	6	1	30
7. 教職員による就職相談（助言・指導など）	15	7	3	25
8. 就職システム（Web）を活用した就職情報	6	4	1	11
9. インターンシップ制度	32	30	4	66
10. 資格取得（TOEIC・基本情報処理技術者など）を目的とした講座	41	26	5	72
11. 先輩達の活躍状況	15	12	2	29
12. その他	3	3	1	7

＜Ⅴ＞アルバイトについて

Ⅴ-① アルバイトをしていますか。

1. はい　　2. いいえ

設問Ⅴ-①で『1. はい』と回答した方は、次のイ～ハの設問にも回答してください。

イ. アルバイトをする最も大きな理由を選んでください。

1. 学費を払うため
2. 生活費（家賃や食費など）を得るため
3. クラブ・サークル活動費を得るため
4. 欲しいものを購入したり、旅行、レジャー資金を得るため
5. 社会勉強のため
6. 貯金をするため
7. その他

ロ. アルバイトを一週間のうち何日していますか。

1. 週１日
2. 週２日
3. 週３日
4. 週４日
5. 週５日
6. 週６日
7. 毎日

ハ. アルバイトを通じて得られたものは何ですか。

1. 社会的経験を積むことができた
2. 仕事をとおして大切な友人、知人ができた
3. 会社組織が理解できたので、就職活動に役立つ
4. お金を得ることの大切さを知った
5. お金以外に何も得られなかった
6. 人間関係の難しさを知った
7. その他

V-①　アルバイトの有無

修士課程の学生がアルバイトに従事している割合は、昨年度は約３～４割であったが、今年度は約４～５割と増加している。博士後期課程の学生についても、アルバイトを行っている学生の割合は、昨年度は約２割であったが、今年度は約３割と増加している。総じて、アルバイトに従事する学生数は増えており、勤務時間が長い学生については、研究時間の確保が難しくなっている状況が考えられる。

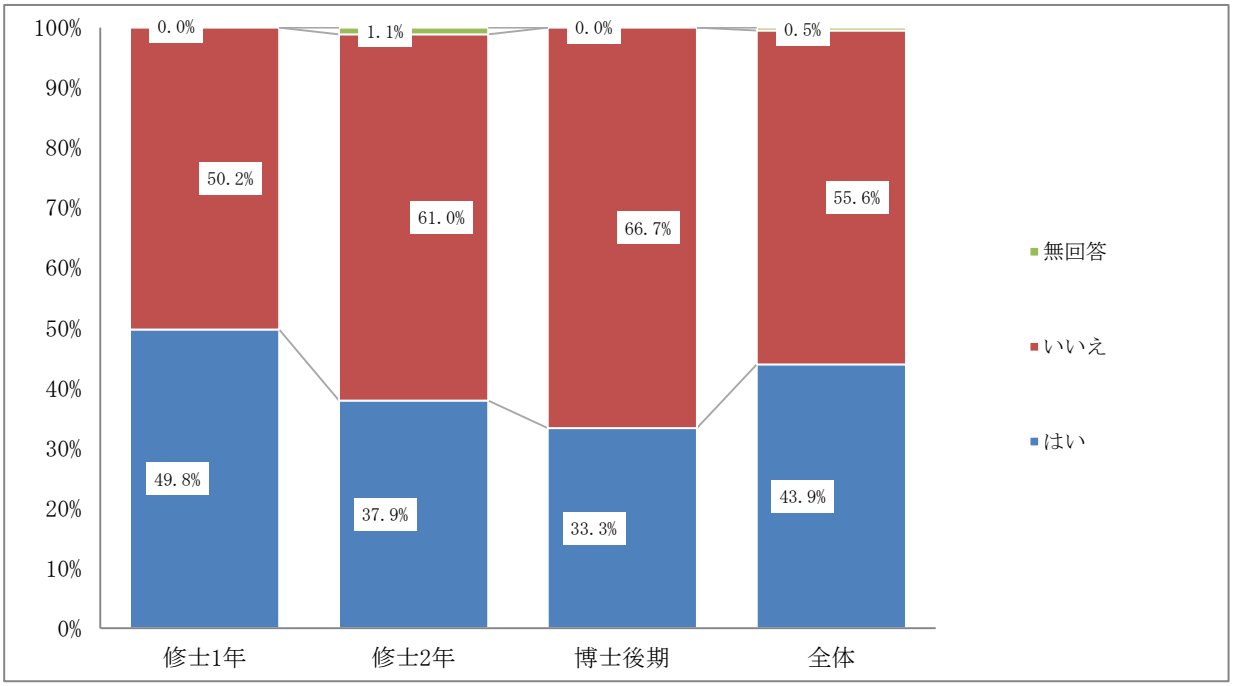

図 5.1　アルバイトの有無

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. はい	107	69	5	181
2. いいえ	108	111	10	229
無回答	0	2	0	2

Ⅴ-①-イ　アルバイトをする最も大きな理由

（Ⅴ - ①で「１．はい」と回答した方のみ）

修士課程の学生については６割程度、博士後期課程に関しても８割程度が学費・生活費のためのアルバイトとなっている。学費・生活費を得るために長時間のアルバイトをせざるを得ない状況の学生に対しては、研究活動への影響・身体的負担が避けられるような支援体制の充実・生活面を含めた指導などが望まれる。

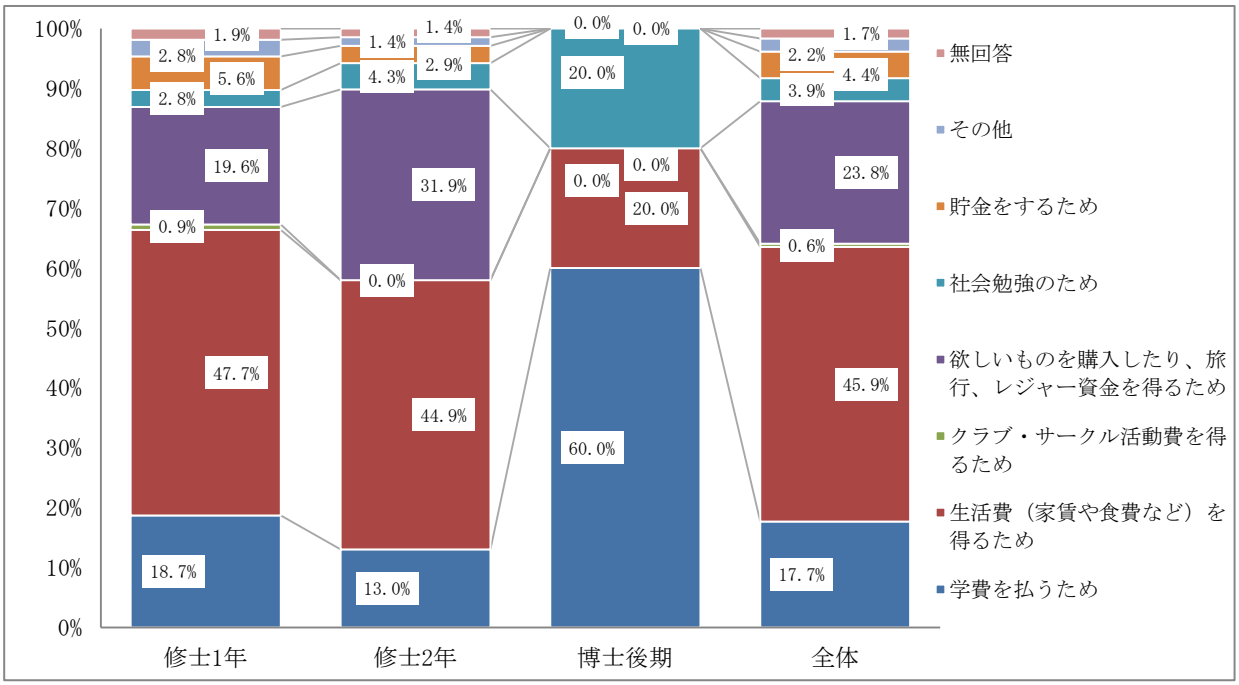

図 5.1.1　アルバイトをする最も大きな理由

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 学費を払うため	20	9	3	32
2. 生活費（家賃や食費など）を得るため	51	31	1	83
3. クラブ・サークル活動費を得るため	1	0	0	1
4. 欲しいものを購入したり、旅行、レジャー資金を得るため	21	22	0	43
5. 社会勉強のため	3	3	1	7
6. 貯金をするため	6	2	0	8
7. その他	3	1	0	4
無回答	2	1	0	3

Ⅴ-①-ロ　アルバイトの１週間における日数

（Ⅴ-①で「１．はい」と回答した方のみ）

修士課程の多くの学生が週２～３日勤務でアルバイトに従事している。昨年度は「週４日」の回答は５％弱であったが、今年度は１割程度まで増加している。総じて、昨年度に比べてアルバイトの勤務時間が増加している。少なくない割合の学生が学費・生活費を得るためにアルバイトの日数を増やさざるを得ず、研究・学習時間の確保が難しくなっている状況が考えられる。身体的な負担についても心配される状況であり、支援体制の充実・生活面を含めた指導などが望まれる。

博士後期課程では、ほとんどの学生が週１日程度のアルバイトであり、研究活動とのバランスはおおむね取れている状況だと考えられる。

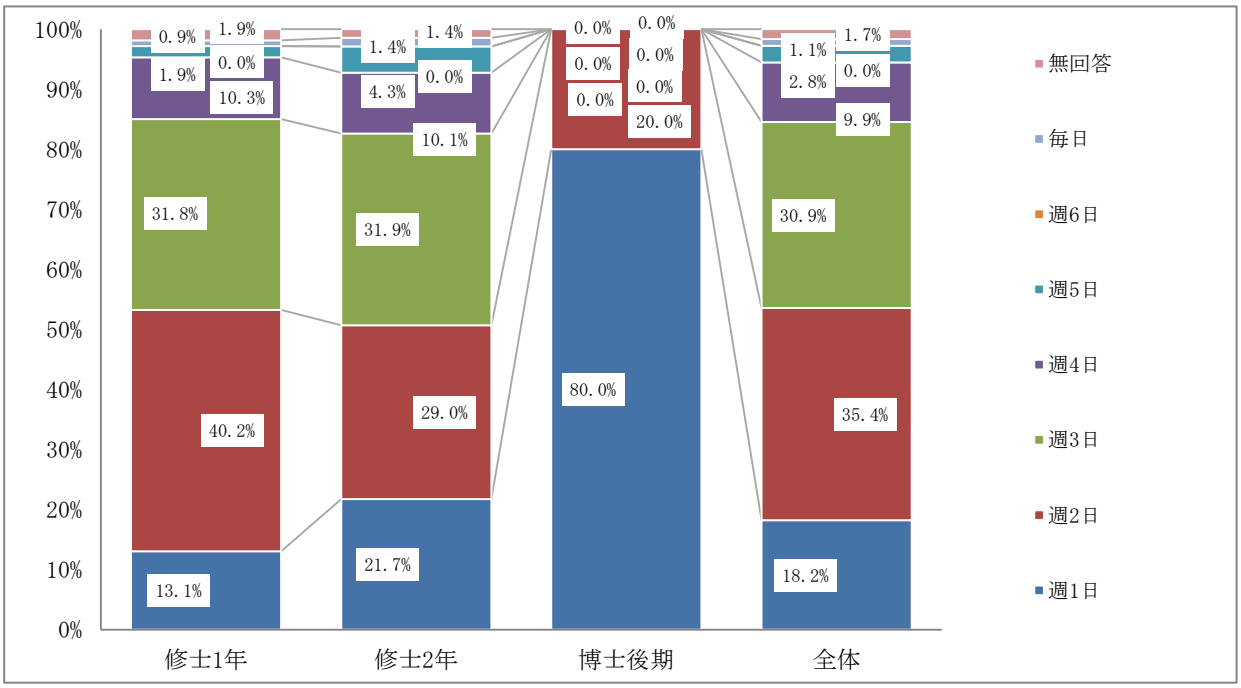

図 5.1.2　アルバイトの１週間における日数

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 週１日	14	15	4	33
2. 週２日	43	20	1	64
3. 週３日	34	22	0	56
4. 週４日	11	7	0	18
5. 週５日	2	3	0	5
6. 週６日	0	0	0	0
7. 毎日	1	1	0	2
無回答	2	1	0	3

V-①-ハ　アルバイトを通じて得られたもの

（V - ①で「１．はい」と回答した方のみ）

アルバイトを行っている学生の半数程度が、アルバイトを通じて社会経験を積むことができたと回答している。前項から、ほとんどの学生は生活費・学費を得るために必要に迫られてアルバイトに従事している状況がうかがえるが、社会との関わりを持つという点ではおおむね意義が得られている様子である。

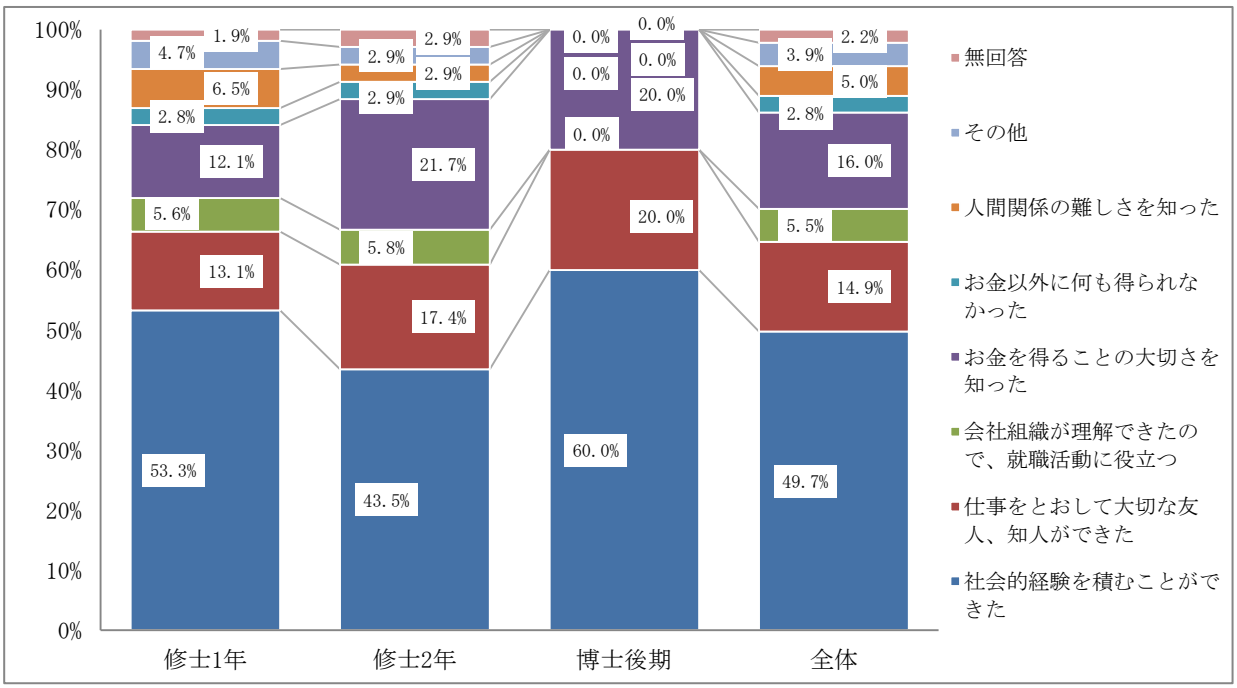

図 5.1.3　アルバイトを通じて得られたもの

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 社会的経験を積むことができた	57	30	3	90
2. 仕事をとおして大切な友人、知人ができた	14	12	1	27
3. 会社組織が理解できたので、就職活動に役立つ	6	4	0	10
4. お金を得ることの大切さを知った	13	15	1	29
5. お金以外に何も得られなかった	3	2	0	5
6. 人間関係の難しさを知った	7	2	0	9
7. その他	5	2	0	7
無回答	2	2	0	4

＜Ⅵ＞図書館について

Ⅵ-① 図書館の利用頻度はどのくらいですか。

1. ほぼ毎日
2. 1ヶ月に数回程度
3. 1学期に数回程度
4. ほとんど利用しない

Ⅵ-② 図書館を利用する目的は、何ですか（複数回答可）。

複数回答可

1. 一般図書（教養・娯楽図書等）の利用
2. 専門図書（学習図書・辞典・便覧等）の利用
3. 新聞・雑誌の閲覧
4. 視聴覚資料（CD, DVD, Blu-ray 等）の利用
5. 電子ジャーナルの利用
6. オンライン検索（オンライン DB 等）
7. 文献複写の利用
8. 貸出用パソコンの利用
9. 自学自習のため
10. グループ学習のため
11. 休憩のため
12. その他（具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅵ-③ 図書館資料のうち、どんな種類の資料の充実を希望しますか（複数回答可）。

複数回答可

1. 一般図書（教養・娯楽図書等）
2. 専門図書（学習図書・辞典・便覧等）
3. 新聞・雑誌
4. 視聴覚資料（CD, DVD, Blu-ray 等）
5. 電子書籍 ・電子ジャーナル
6. オンラインデータベース
7. その他 （具体的に：回答用紙の下段に記入ください）
8. 特に希望は無い

Ⅵ-④ 図書の貸出日数及び冊数についてどう思いますか（複数回答可）。【大学院生：30 冊・1ケ月】

複数回答可

1. 利用して特に不満は無い
2. 貸出日数を長くして欲しい
3. 貸出冊数を増やして欲しい
4. 関心が無い

Ⅵ-⑤ シラバスに掲載されている参考書を配架していますが、どの程度利用していますか。

1. よく利用している
2. 時々利用している
3. ほとんど利用しない
4. 知らなかった

Ⅵ-⑥ 次の図書館サービスを利用したことがありますか。また感想は如何ですか。

A. レファレンスサービス（所在調査、情報検索、利用方法など）

1. 利用して特に不満は無い
2. 利用して不満である
3. 知っているが利用したことがない
4. 知らなかった

B. 習志野 3 大学（日大生産工学部・東邦大学・千葉工大）及び神田外語大学の図書館の利用

1. 利用して特に不満は無い
2. 利用して不満である
3. 知っているが利用したことがない
4. 知らなかった

C. 希望図書の購入申し込み制度

1. 制度を知っていて、申し込んだことがある
2. 制度は知っているが、申し込んだことはない
3. 制度を知らなかったが、今後申し込みたい
4. 制度を知らず関心がない

Ⅵ-⑦ 次の電子媒体を利用したことがありますか。また感想は如何ですか。

A. 電子ジャーナル(Science Direct, Springer Link 等)

1. 利用して特に不満は無い
2. 利用して不満である
3. 知っているが利用したことがない
4. 知らなかった

B. オンラインデータベース(CiNii, JDreamⅢ等)

1. 利用して特に不満は無い
2. 利用して不満である
3. 知っているが利用したことがない
4. 知らなかった

C. 電子ブック(EBSCO eBook Collection, ProQuest Ebook Central, 丸善 eBookLibrary)

1. 利用して特に不満は無い
2. 利用して不満である
3. 知っているが利用したことがない
4. 知らなかった

Ⅵ-⑧ 最近1年間に書籍(雑誌は除く)など，何冊読みましたか。

1. 0 冊
2. 1～5 冊
3. 6～10 冊
4. 11～20 冊
5. 21 冊以上

Ⅵ-⑨ 図書館のどのような点がどのように改善されれば、より利用したいと思いますか。

(具体的に:回答用紙の下段に記入ください)

VI-①　図書館の利用頻度

大学院生の場合、研究に必要な図書の多くは既に研究室に用意されていることが多いが、それでも全体の 70%弱の大学院生が図書館を利用しており、図書館の重要性を物語っている。特に修士課程では、「ほぼ毎日」あるいは「1 か月に数回程度」と回答した利用頻度の高い大学院生が全体の約 50%となっており、修士研究あるいは大学院授業への取り組みに際し、図書館が重要な役割を果たしていることを示している。博士後期課程では約 47%まで低下しているが、これは大学院授業が少なくなる点などを鑑みると仕方のない面もある。

一方、図書館を「ほとんど利用しない」と回答した大学院生は全体の約 29%に留まっており、多くの大学院生にとって、図書館が学習の場あるいは活動の場となっていることがわかる。

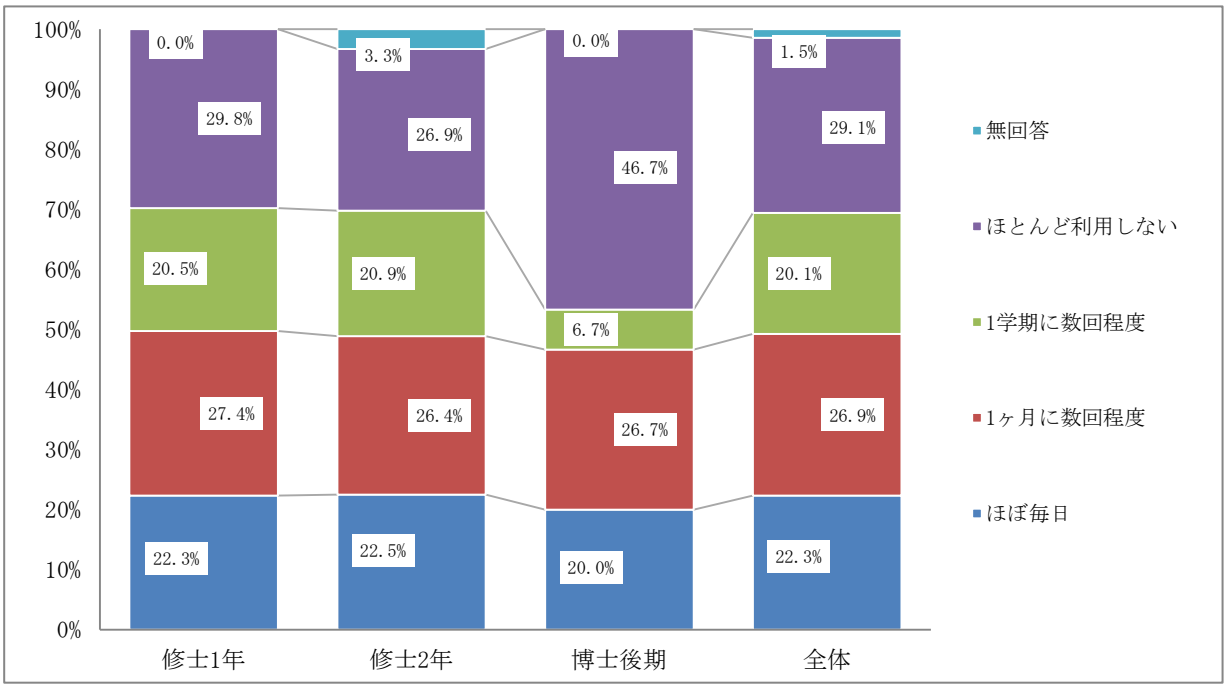

図 6.1　図書館の利用頻度

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. ほぼ毎日	48	41	3	92
2. 1 ヶ月に数回程度	59	48	4	111
3. 1 学期に数回程度	44	38	1	83
4. ほとんど利用しない	64	49	7	120
無回答	0	6	0	6

VI-②　図書館の利用目的　（複数回答可）

図書館の利用目的として、学部生と異なり、大学院生では「専門図書（学習図書・辞典・便覧等）の利用」が最も多くなっており、全体の 41%程度と半分近くを占めている。「一般図書（教養・娯楽図書等）の利用」、「自学自習のため」も比較的多い。大学院生では修士研究や博士研究、あるいは大学院授業に必要な専門図書の利用がより重視されているのがわかる。なお、「オンライン検索（オンライン DB 等）」や「電子ジャーナルの利用」、「文献複写の利用」の利用者がそれぞれ 9 名、15 名、30 名と少ないが、これらのサービスは図書館に来館しなくてもオンラインで享受できるためと考えられ、今後も充実させていく必要があることに変わりはない。

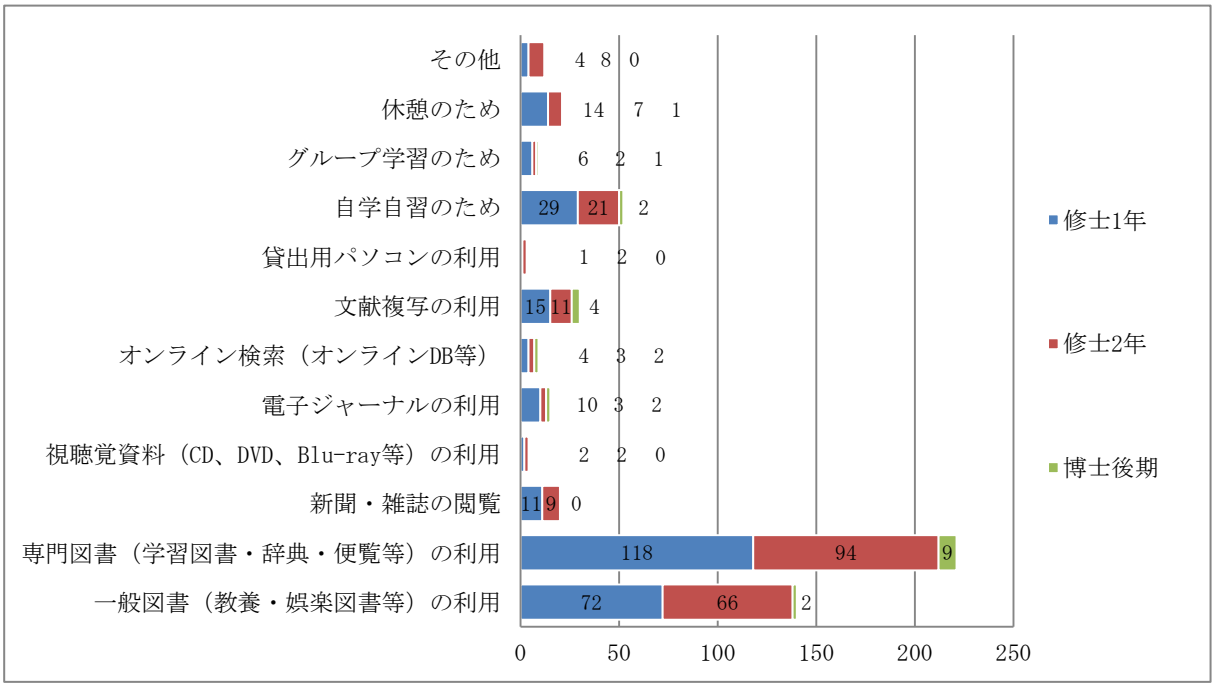

図 6.2　図書館の利用目的

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 一般図書（教養・娯楽図書等）の利用	72	66	2	140
2. 専門図書（学習図書・辞典・便覧等）の利用	118	94	9	221
3. 新聞・雑誌の閲覧	11	9	0	20
4. 視聴覚資料（CD、DVD、Blu-ray 等）の利用	2	2	0	4
5. 電子ジャーナルの利用	10	3	2	15
6. オンライン検索（オンライン DB 等）	4	3	2	9
7. 文献複写の利用	15	11	4	30
8. 貸出用パソコンの利用	1	2	0	3
9. 自学自習のため	29	21	2	52
10. グループ学習のため	6	2	1	9
11. 休憩のため	14	7	1	22
12. その他	4	8	0	12

VI-③　充実を希望する資料　（複数回答可）

充実を希望する文献資料の主な内容は、「専門図書」225 件、「一般図書」141 件、「オンラインデータベース」29 件、「電子書籍・電子ジャーナル」及び「新聞・雑誌」がいずれも 19 件である。電子情報資料よりも活字・紙媒体資料の希望が圧倒的に多い。

今後の蔵書構成については、各教員と連携して、各専攻の専門性にあわせた専門図書および電子情報資料の充実を図るべく、学生の希望も考慮した計画的な購入を行う必要があると考えられる。

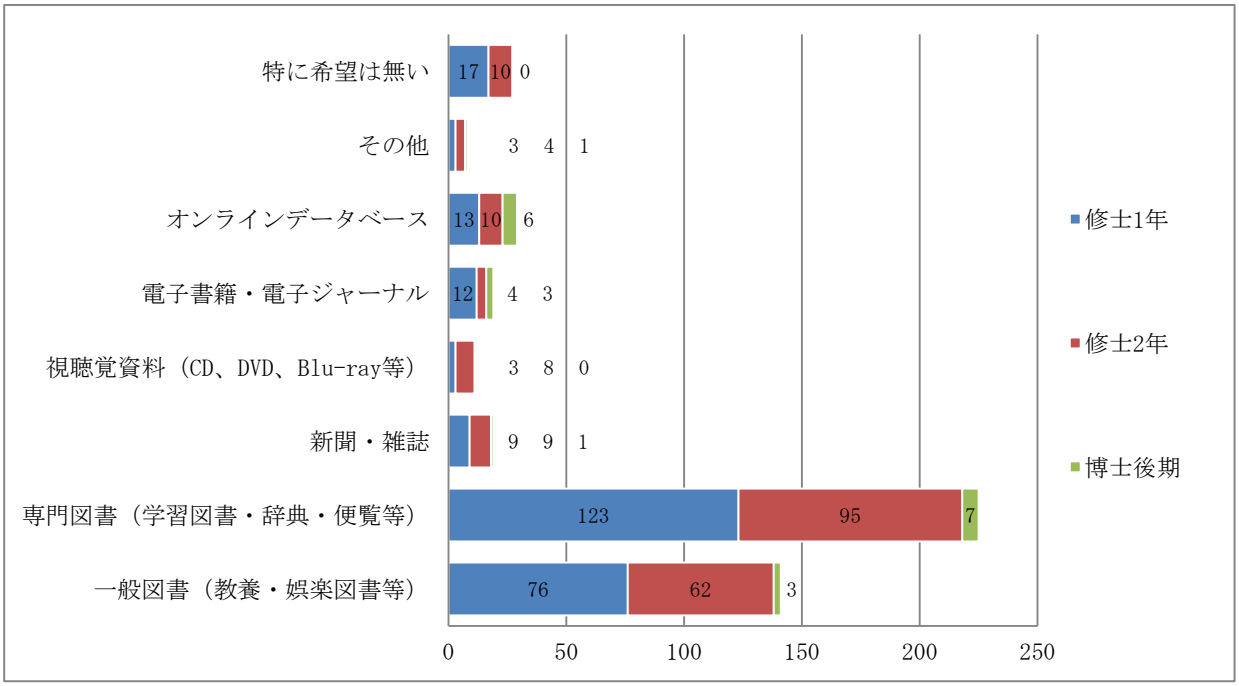

図 6.3　充実を希望する資料

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 一般図書（教養・娯楽図書等）	76	62	3	141
2. 専門図書（学習図書・辞典・便覧等）	123	95	7	225
3. 新聞・雑誌	9	9	1	19
4. 視聴覚資料（CD、DVD、Blu-ray 等）	3	8	0	11
5. 電子書籍・電子ジャーナル	12	4	3	19
6. オンラインデータベース	13	10	6	29
7. その他	3	4	1	8
8. 特に希望は無い	17	10	0	27

VI-④　図書の貸出日数及び冊数　（複数回答可）

最も多い回答は「利用して特に不満は無い」であり、全体の約 64%を占める。

次に多いのは、「貸出日数を長くして欲しい」であり、貸出冊数よりも日数を長くすることが望まれる傾向は、学部と同じである。

また、「関心が無い」の回答も、学部に比べれば少なくなるものの、一定程度（59 名）存在しており、図書館をより多くの学生に関心を持って利用してもらう努力が引き続き必要である。

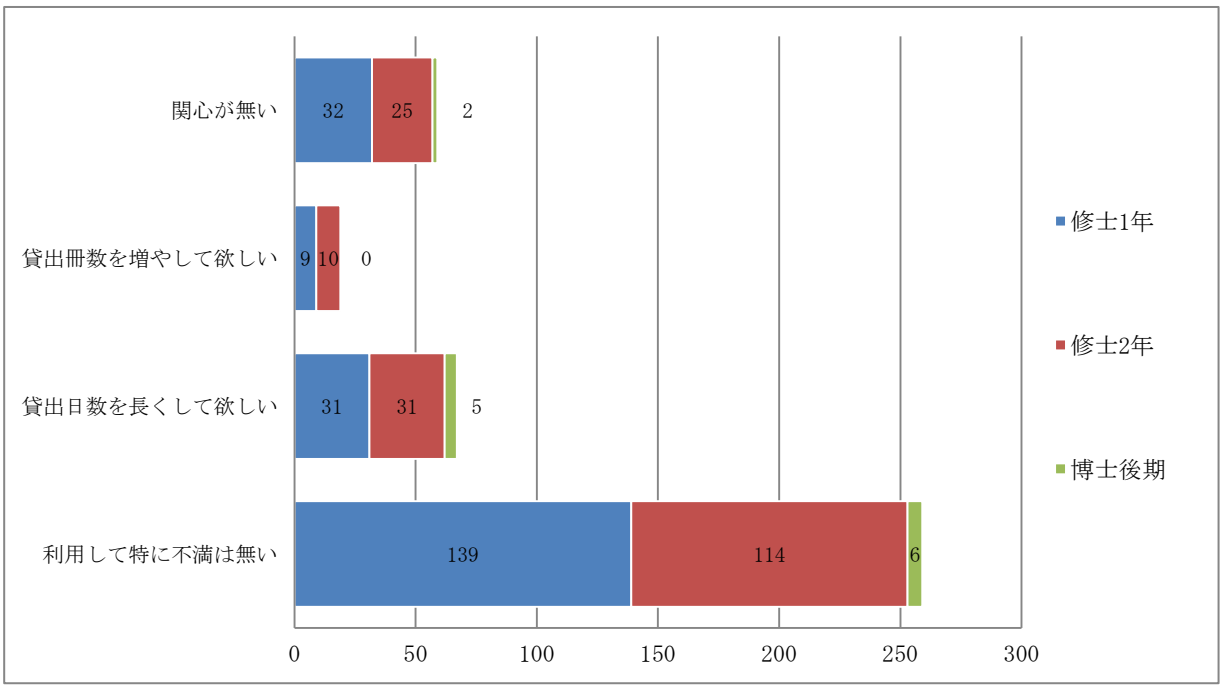

図 6.4　図書の貸出日数及び冊数

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	139	114	6	259
2. 貸出日数を長くして欲しい	31	31	5	67
3. 貸出冊数を増やして欲しい	9	10	0	19
4. 関心が無い	32	25	2	59

VI-⑤　シラバスに掲載されている参考書の利用頻度

図書館ではシラバスに掲載されている参考書を蔵書として購入している。そのような図書の利用頻度は、全体で約 55%の大学院生が「よく利用している」あるいは「時々利用している」と回答している。昨年度の約 53%から改善されている。特論開講科目が集中している修士課程 1 年次だけ見ても、一昨年度約 49%、昨年度約 60%、今年度約 58%と高い状態が維持されている。

今後の対策としては、引き続き修士課程 1 年次を中心にシラバスに掲載されている参考書が蔵書としてあることや利用方法を周知していく必要があると考えられる。

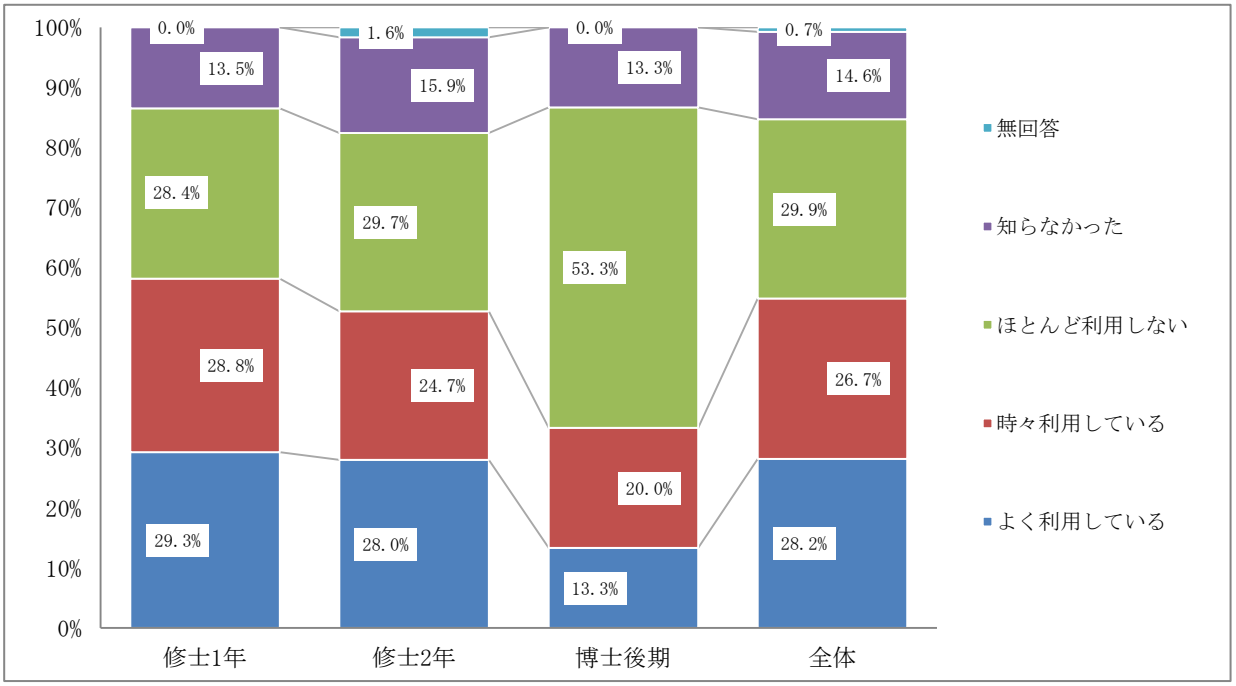

図 6.5　シラバスに掲載されいている参考書の利用頻度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. よく利用している	63	51	2	116
2. 時々利用している	62	45	3	110
3. ほとんど利用しない	61	54	8	123
4. 知らなかった	29	29	2	60
無回答	0	3	0	3

VI-⑥-A　レファレンスサービスの利用経験

本学図書館では、図書館員が利用者に蔵書資料の探し方や図書館の活用方法をアドバイスするサービス（リファレンスサービス）を提供している。約 59%の大学院生がこのサービスを利用しており、学部生の利用率（約 29%）と比較すると顕著に増加している。多くの大学院生はこのサービスを活用することで必要な資料を入手し、自らの学習・研究・調査に際して図書館を有効に活用できていることがうかがえる。一方、約 18%の大学院生はこのサービスを知りながら利用する機会がなかった。この傾向については、近年では Google などの検索エンジンを利用してウェブ上で公開されている資料・情報を探す学生が増えたこともあり、図書館を訪れてレファレンスサービスを利用する機会は減りつつあると考えられる。しかし研究者･技術者の見習いである大学院生の時期には、インターネットで手軽に入手できる断片的な情報ではなく、原著文献・論文を手にして読み込むことで、自らの研究・調査についてより深く考える習慣を身に付けて欲しい。

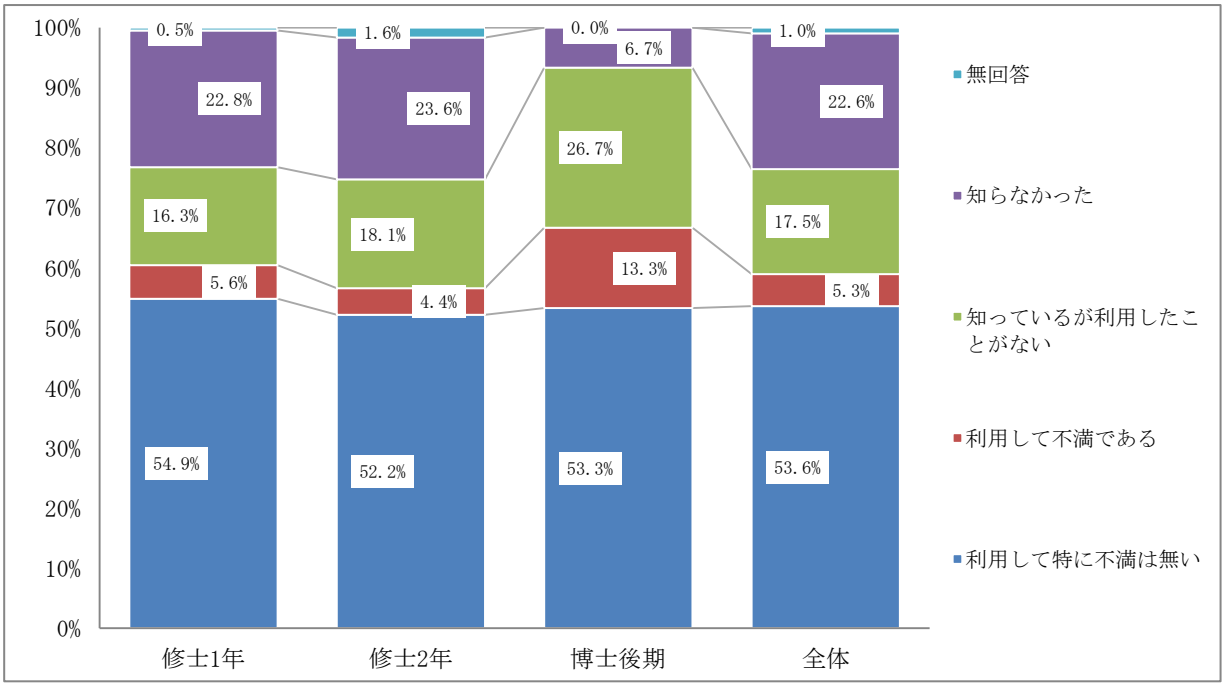

図 6.6.1　レファレンスサービスの利用経験

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	118	95	8	221
2. 利用して不満である	12	8	2	22
3. 知っているが利用したことがない	35	33	4	72
4. 知らなかった	49	43	1	93
無回答	1	3	0	4

VI-⑥-B　日本大学生産工学部・東邦大学及び神田外語大学の図書館利用

習志野三大学図書館連絡会の協定により、本学の学生は日本大学生産工学部と東邦大学の図書館を利用でき、また、包括連携協定を締結したことに伴い、神田外語大学の図書館も利用できる。この制度を知らない学生の割合は 21%で、昨年と比べて 2 ポイント低下した。この制度の利用経験のある学生は全体の 35%で、昨年 (33%) からわずかに増加したものの、まだ十分に高いとは言えない。どのような資料を探していたのかといった、制度の利用理由を解明することが、本学図書館の改善に役立つかもしれない。利用して不満を感じた学生がいることについても同様である。

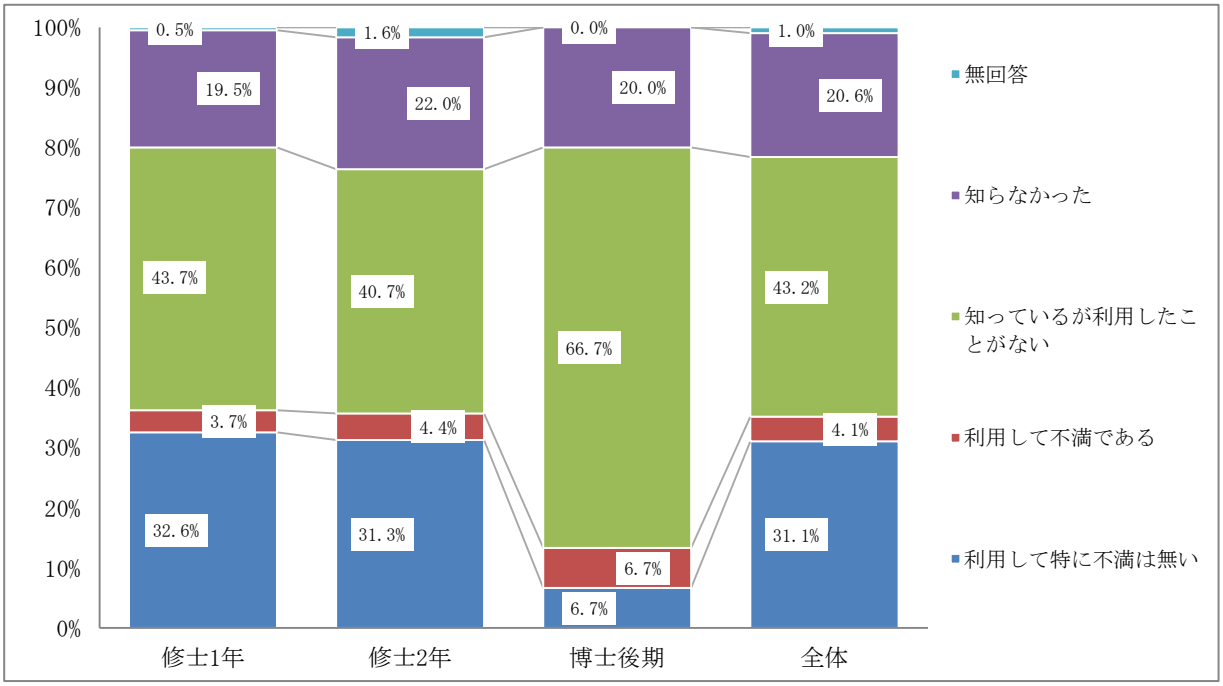

図 6.6.2　日本大学生産工学部・東邦大学及び神田外語大学の図書館利用

(回答者数)

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	70	57	1	128
2. 利用して不満である	8	8	1	17
3. 知っているが利用したことがない	94	74	10	178
4. 知らなかった	42	40	3	85
無回答	1	3	0	4

VI-⑥-C　希望図書の購入申し込み制度

図書館に置いてもらいたい図書の購入を希望（申請）する制度について、「制度を知らない」と回答した大学院生は全体で約 33%であり、学部生の約 57%に比べて少なく、本制度の認知度が高いことが分かる。その一方で、「制度は知っているが、申し込んだことはない」と回答した大学院生が約 35%となっており、本制度が必ずしも有効に活用されていない状況がうかがえる。「今後申し込みたい」と回答した学生等の潜在的利用者を含めて一定の利用者がいることから、今後も制度を存続すべきであると考えられ、その利便性や有用性の改善の検討を今後も進めていく必要がある。認知度はまだ不十分であり、本制度に関する周知を強化していくことも求められる。

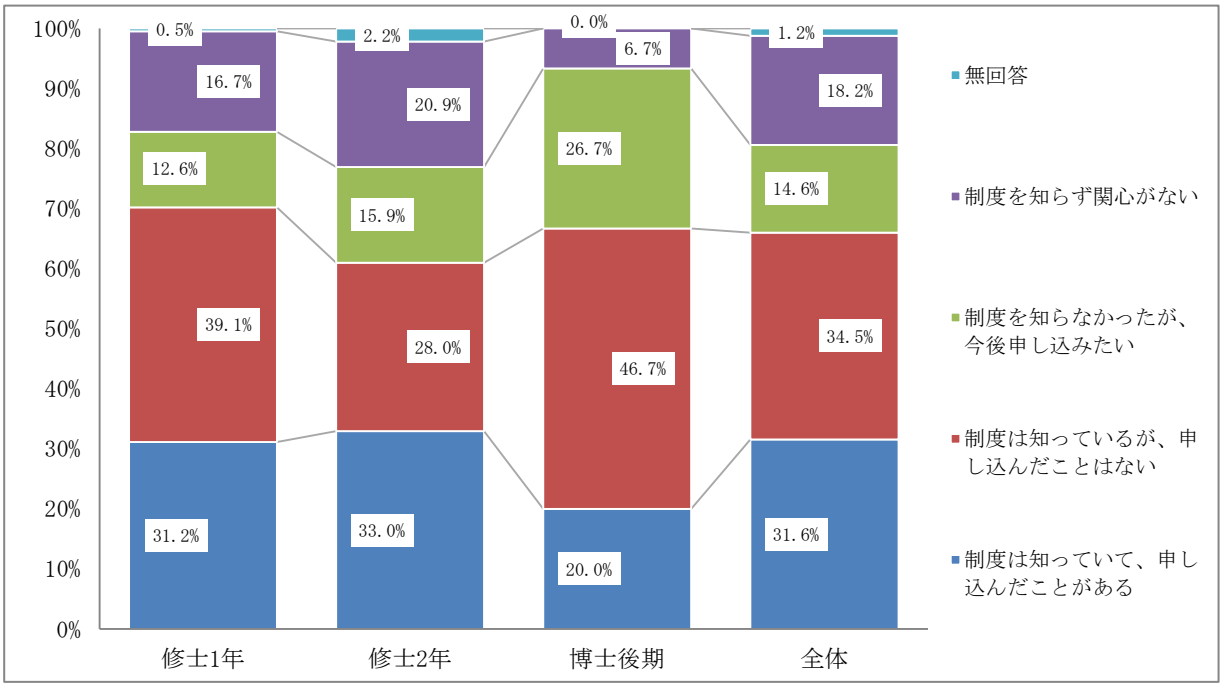

図 6.6.3　希望図書の購入申し込み制度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 制度は知っていて、申し込んだことがある	67	60	3	130
2. 制度は知っているが、申し込んだことはない	84	51	7	142
3. 制度を知らなかったが、今後申し込みたい	27	29	4	60
4. 制度を知らず関心がない	36	38	1	75
無回答	1	4	0	5

VI-⑦-A　電子ジャーナルの利用経験

電子ジャーナルの利用経験がある大学院生は全体の約 48%で昨年(54%)から減少している。利用している層の中では、修士課程 1 年次、2 年次では 90%程度が「利用して特に不満はない」と答えているものの、博士後期課程ではその比率が 71%程度となってしまっていることから、内容の検討も必要と考えられる。また、4 人に 1 人の大学院生が「知らなかった」と答えており、その利用方法について早期から指導していくことも必要と考えられる。

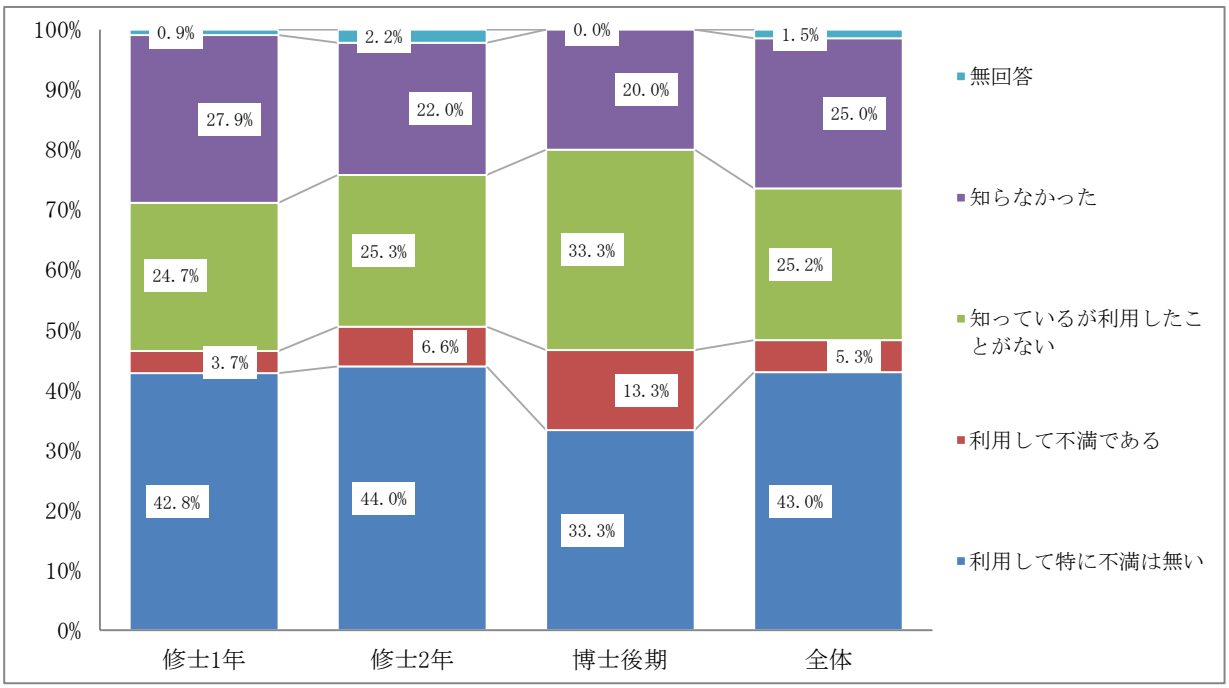

図 6.7.1　電子ジャーナルの利用経験

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	92	80	5	177
2. 利用して不満である	8	12	2	22
3. 知っているが利用したことがない	53	46	5	104
4. 知らなかった	60	40	3	103
無回答	2	4	0	6

VI-⑦-B　オンラインデータベースの利用経験

院生の認知度は学部学生より遥かに高く、また、全体の約 59%が「利用して特に不満は無い」と回答しており、学部学生の不満が無い層（約 17%）を大きく上回る。また、「利用して不満である」という回答が昨年から若干増加（10.2%・昨年 9.4%）している。しかし、「知らなかった」「知っているが利用したことがない」という回答が合計で約 30%あることから、今後も利用指導および PR 等を積極的に行うことが必要であろう。

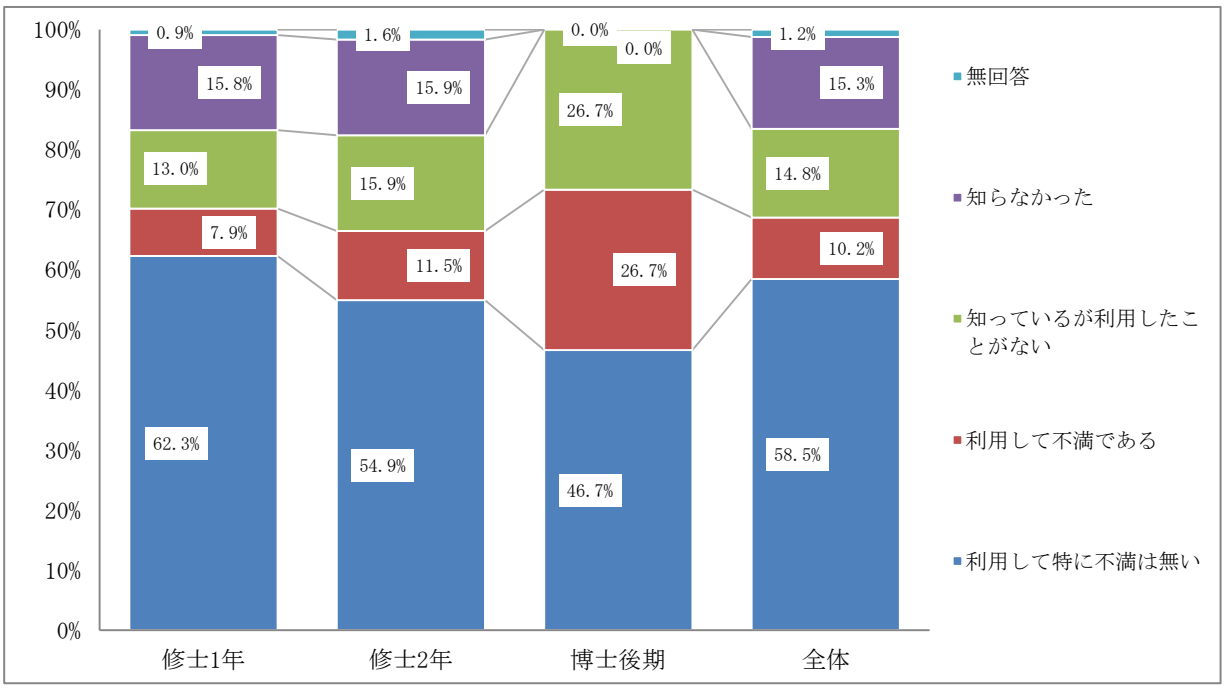

図 6.7.2　オンラインデータベースの利用経験

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	134	100	7	241
2. 利用して不満である	17	21	4	42
3. 知っているが利用したことがない	28	29	4	61
4. 知らなかった	34	29	0	63
無回答	2	3	0	5

VI-⑦-C　電子ブックの利用経験

これは本年度からの新しい設問である。図書館が提供している電子ブック（EBSCO eBook Collection，ProQuest Ebook Central，丸善 eBookLibrary）サービスについてであるが、「知らなかった」という学生が 31%とまだまだ多いことがわかる。また、「知っているが利用したことがない」（28%）を加えると、60%近くの大学院生が利用していない。その一方で、利用して不満がある大学院生の比率は学部生に比べるとかなり低下していることがわかる。

今後は、図書館ガイダンスなどを通して、本サービスの周知を積極的に行う必要があるとともに、まだやや不満が多い修士 2 年次を中心に、不満を減少させるための方策を検討する必要がある。

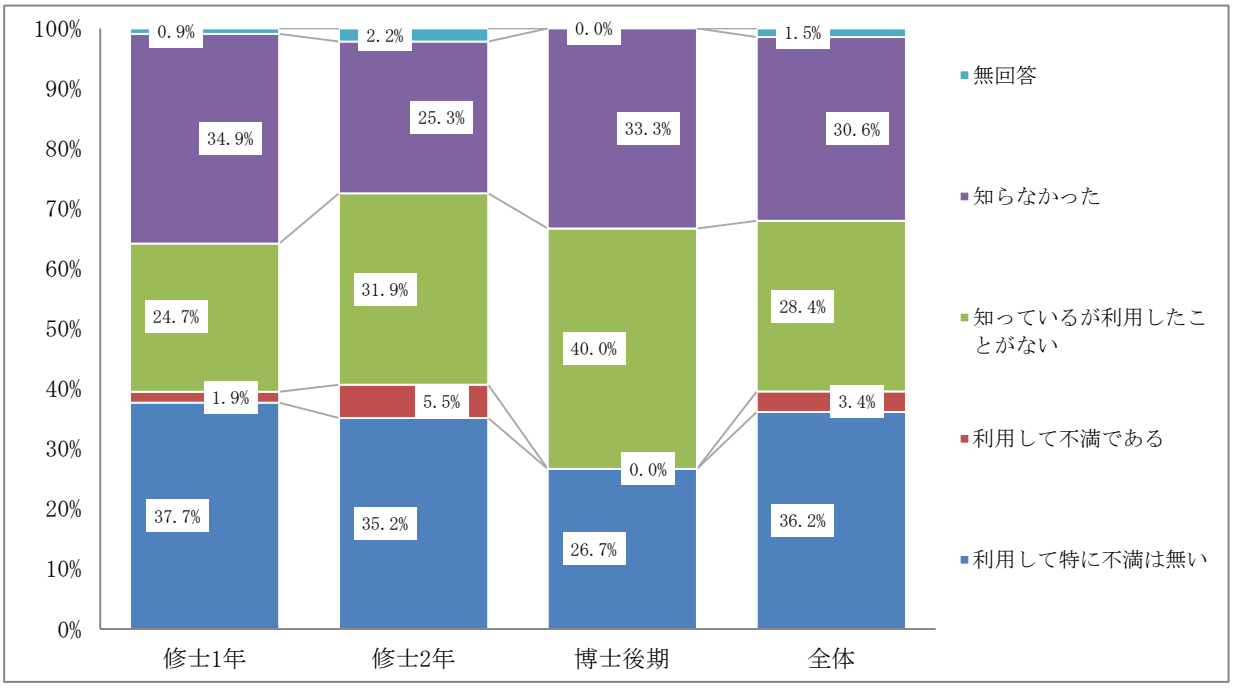

図 6.7.3　電子ブックの利用経験

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 利用して特に不満は無い	81	64	4	149
2. 利用して不満である	4	10	0	14
3. 知っているが利用したことがない	53	58	6	117
4. 知らなかった	75	46	5	126
無回答	2	4	0	6

VI-⑧　1年間に読んだ書籍の冊数

「1年間に読んだ本の冊数」について、 27%の大学院生が「0冊」と答えている。これは学部生の22%よりも高い。一方で、11冊以上という大学院生も22%と学部生(18%)よりも多い。本を読む学生とそうでない学生の二極化があることは、学部学生以上に顕著であると言える。

今後は、図書館を通して読書の重要性と必要性について、大学院生に周知していく必要がある。

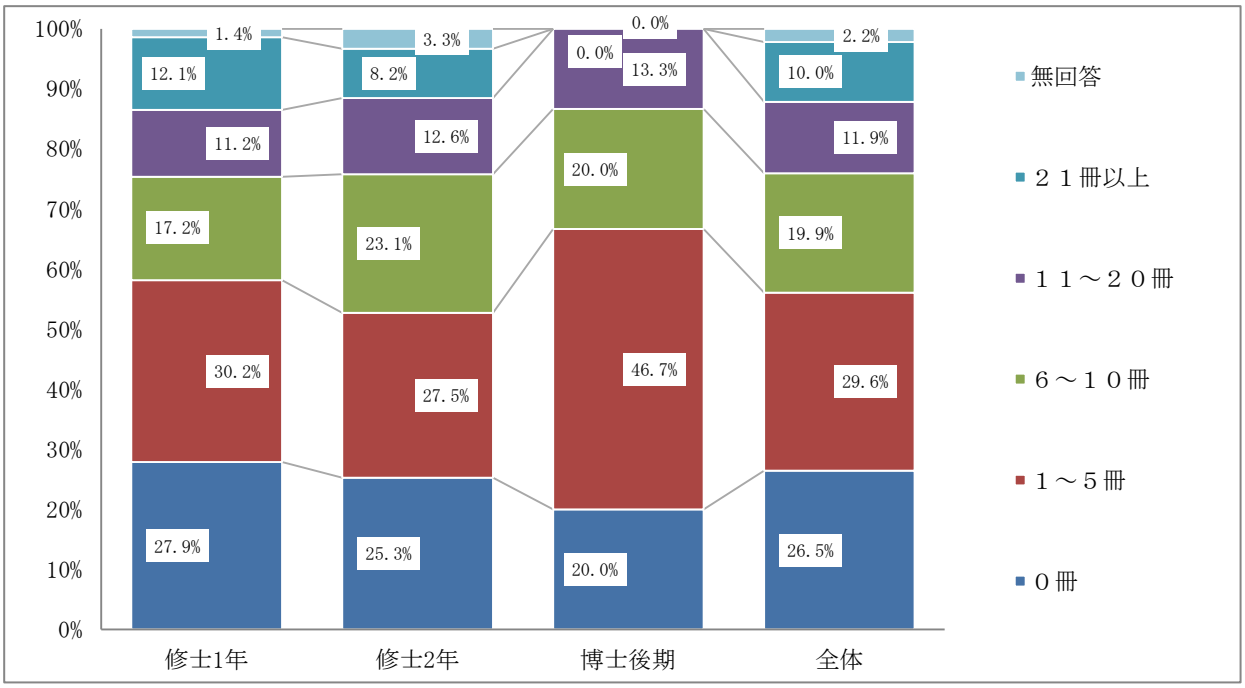

図 6.8　1年間に読んだ書籍の冊数

(回答者数)

	修士1年	修士2年	博士後期	全体
1.　0冊	60	46	3	109
2.　1～5冊	65	50	7	122
3.　6～10冊	37	42	3	82
4.　11～20冊	24	23	2	49
5.　21冊以上	26	15	0	41
無回答	3	6	0	9

＜Ⅶ＞学生食堂・購買部について

Ⅶ-① 学生食堂をどの程度利用していますか。

1. ほぼ毎日
2. 1 週間に 2～3 回程度
3. 1 週間に 1 回程度
4. 1ヶ月に数回程度
5. ほとんど利用しない

Ⅶ-② 学生食堂の満足度は、どれに該当しますか。

1. とても満足している
2. やや満足している
3. 普通
4. やや不満である
5. 大いに不満である

Ⅶ-③ Ⅶ-②における回答の理由は何ですか。

（具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅶ-④ 購買部をどの程度利用していますか。

1. ほぼ毎日
2. 1 週間に 2～3 回程度
3. 1 週間に 1 回程度
4. 1ヶ月に数回程度
5. ほとんど利用しない

Ⅶ-⑤ 購買部の満足度は、どれに該当しますか。

1. とても満足している
2. やや満足している
3. 普通
4. やや不満である
5. 大いに不満である

Ⅶ-⑥ Ⅶ-⑤における回答の理由は何ですか。

（具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅶ-⑦ 学生食堂・購買部への要望がありましたら記載してください。

（具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅶ-①　学生食堂の利用頻度

学生食堂を恒常的に利用していると思われる「ほぼ毎日」及び「1 週間に 2～3 回程度」と回答した学生の割合は 62.3%であり、昨年度とほぼ同じ結果となった。

大学院生の食堂利用率は学部生のものを大きく下回るが、これは学部生と異なり、全ての大学院生が研究室に自分の机があり、学生食堂以外にも食事のスペースが確保されていることや、津田沼周辺に多数の飲食店が軒を連ねていることなどが要因であると考えられる。

学部生と同様に、利用率向上のための継続的な営業努力が必要と考える。

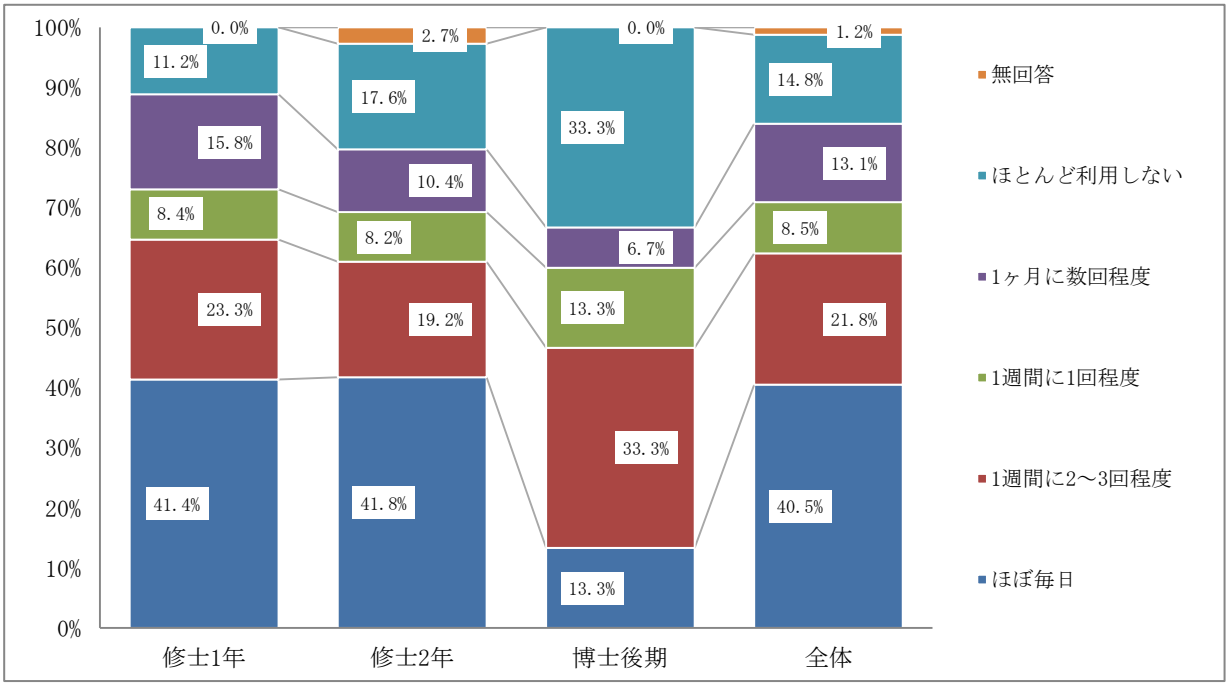

図 7.1　学生食堂の利用頻度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. ほぼ毎日	89	76	2	167
2. 1 週間に 2～3 回程度	50	35	5	90
3. 1 週間に 1 回程度	18	15	2	35
4. 1 ヶ月に数回程度	34	19	1	54
5. ほとんど利用しない	24	32	5	61
無回答	0	5	0	5

Ⅶ-②　学生食堂の満足度

学部生と同様、 今年度から集計方法を変更したため、満足度の過年度比較はできないが、全大学院生の 53.9%が「とても満足している」あるいは「やや満足している」と回答しており、「普通」の回答を合わせると 77.2%を占め、学部生とほぼ同様の結果となった。ただし、大学院生は学部から継続して本学に在籍している学生が大多数を占めており、メニューの変化や味の向上を求める意見が多く見られた。また、夜遅くまで研究室に滞在する大学院生は多いと見られ、夕定食に対する要望も多数寄せられている。このことに関しては、引き続き対応を検討していきたい。

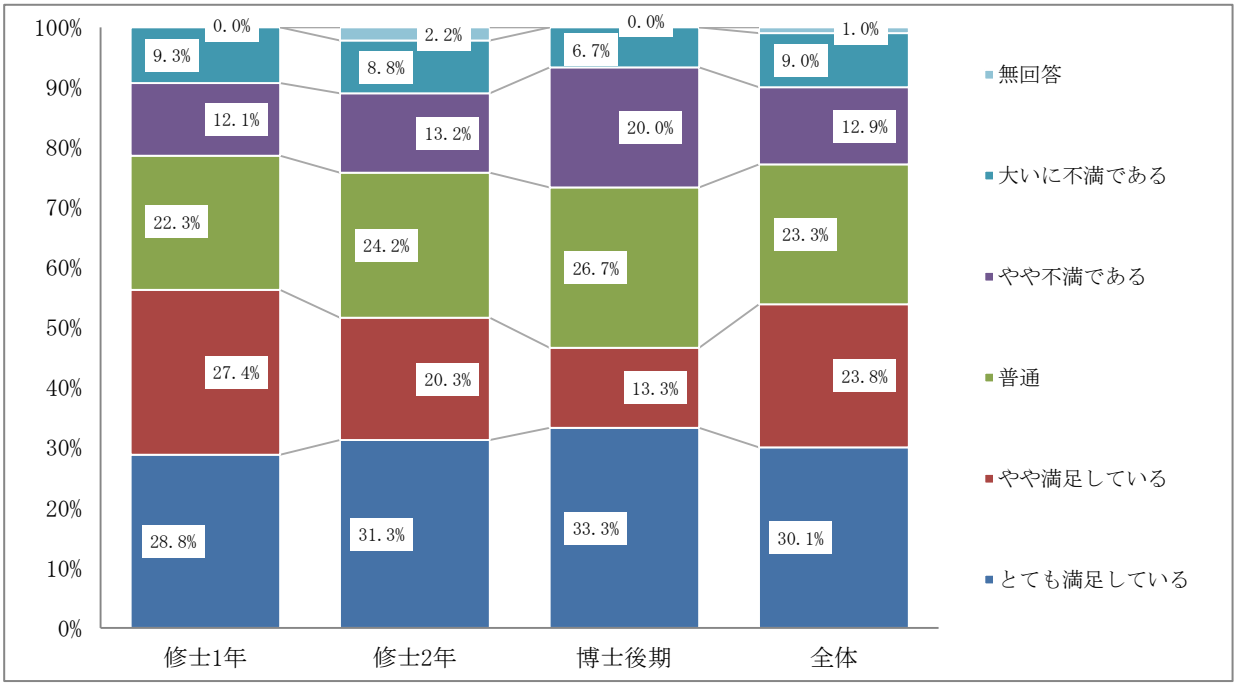

図 7.2　学生食堂の満足度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. とても満足している	62	57	5	124
2. やや満足している	59	37	2	98
3. 普通	48	44	4	96
4. やや不満である	26	24	3	53
5. 大いに不満である	20	16	1	37
無回答	0	4	0	4

Ⅶ-④　購買部の利用頻度

購買部の利用状況も学生食堂と同様、学部生に比べ大学院生の利用頻度は低く、「1 ヶ月に数回程度」または「ほとんど利用しない」と回答した大学院生が多く見受けられることである。大学院生の所属は概ね津田沼校舎に限定されていることから、津田沼周辺には店舗が豊富にあるということ、更にオンラインショップの利用が増加していることが、購買部の利用率を押し下げる大きな要因と考えられる。しかし、競争的環境の中で販売促進を図っていくことは重要な要素であり、今後も継続した経営努力が必要であると考えている。

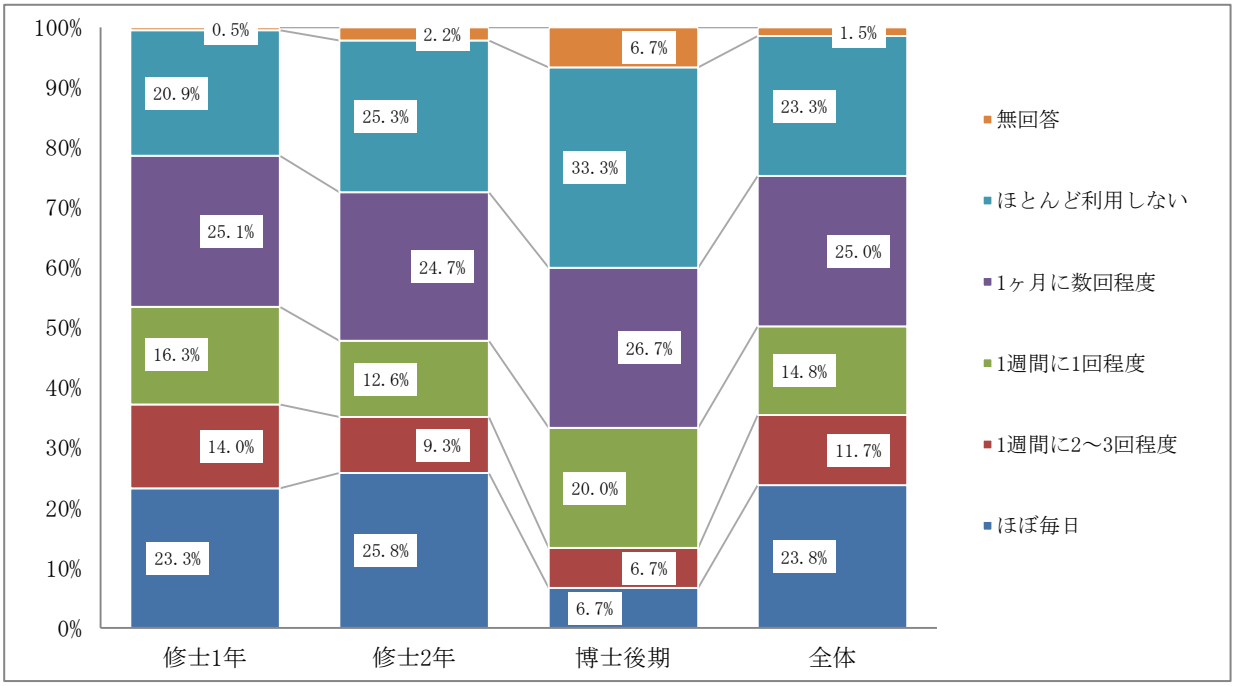

図 7.4　購買部の利用頻度

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. ほぼ毎日	50	47	1	98
2. 1 週間に 2～3 回程度	30	17	1	48
3. 1 週間に 1 回程度	35	23	3	61
4. 1 ヶ月に数回程度	54	45	4	103
5. ほとんど利用しない	45	46	5	96
無回答	1	4	1	6

Ⅶ-⑤　購買部の満足度

こちらも食堂と同様に集計方法を変更したために過年度比較はできないが、全大学院生の 52.2%が「とても満足している」あるいは「やや満足している」と回答しており、「普通」の回答を合わせると 83.5%を占めた。

特に大学院生が不満を感じているのが営業時間と価格である。夜遅くまで研究室にいることが多い大学院生にとって、遅くまで営業してほしいとの要望は多い。また、周辺のスーパーやディスカウントストアと商品の価格を比較するとどうしても割高となり、購買部を利用しない大きな要因である。これらに関しては、引き続き対応を検討していきたい。

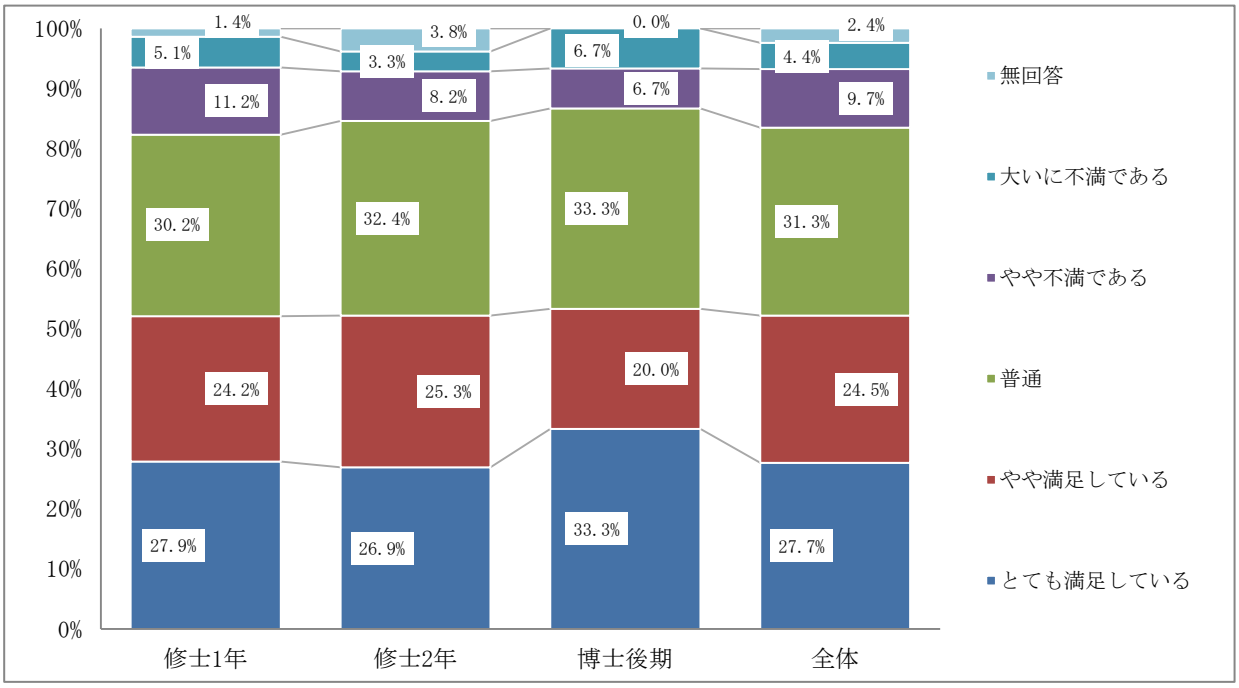

図 7.5　購買部の満足度

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. とても満足している	60	49	5	114
2. やや満足している	52	46	3	101
3. 普通	65	59	5	129
4. やや不満である	24	15	1	40
5. 大いに不満である	11	6	1	18
無回答	3	7	0	10

＜Ⅷ＞施設・設備について

Ⅷ-① 次の施設・設備をどう思いますか。

A. 新習志野校舎・津田沼校舎の駐輪場

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満がある
5. 不満である
6. 利用したことがない

B. 新習志野校舎・津田沼校舎の談話室

1. 満足している
2. ある程度満足している
3. どちらとも言えない
4. やや不満がある
5. 不満である
6. 利用したことがない

Ⅷ-② 改善を希望する施設・設備は、どこですか。（具体的に記述してください）

（具体的に：回答用紙の下段に記入ください）

Ⅷ-①-A　新習志野校舎・津田沼校舎の駐輪場

津田沼校舎の駐輪場について、「満足している」「ある程度満足している」と回答した学生の割合は、修士課程 1 年次で 42.8%、同 2 年次で 43.9%、博士後期課程で 53.4%であった。大学全体では、43.7%となり、昨年度のアンケート結果の数値よりも低い結果となった。修士 2 年次の回答を、昨年度の修士 1 年次と比較すると、「満足」「不満である」が減少して「どちらとも言えない」が増加している。「利用したことがない」と回答した学生の割合は、大学院全体で 40.5%となり、昨年度の結果より大きくなった。

今年度のアンケート結果から、津田沼校舎の駐輪場の利便性は変化がないことが読み取れる。しかし、全体的の利用率がやや減少していることから、駐輪場に対するニーズを調べ、利用率および満足度共に向上するよう務めることが望まれる。

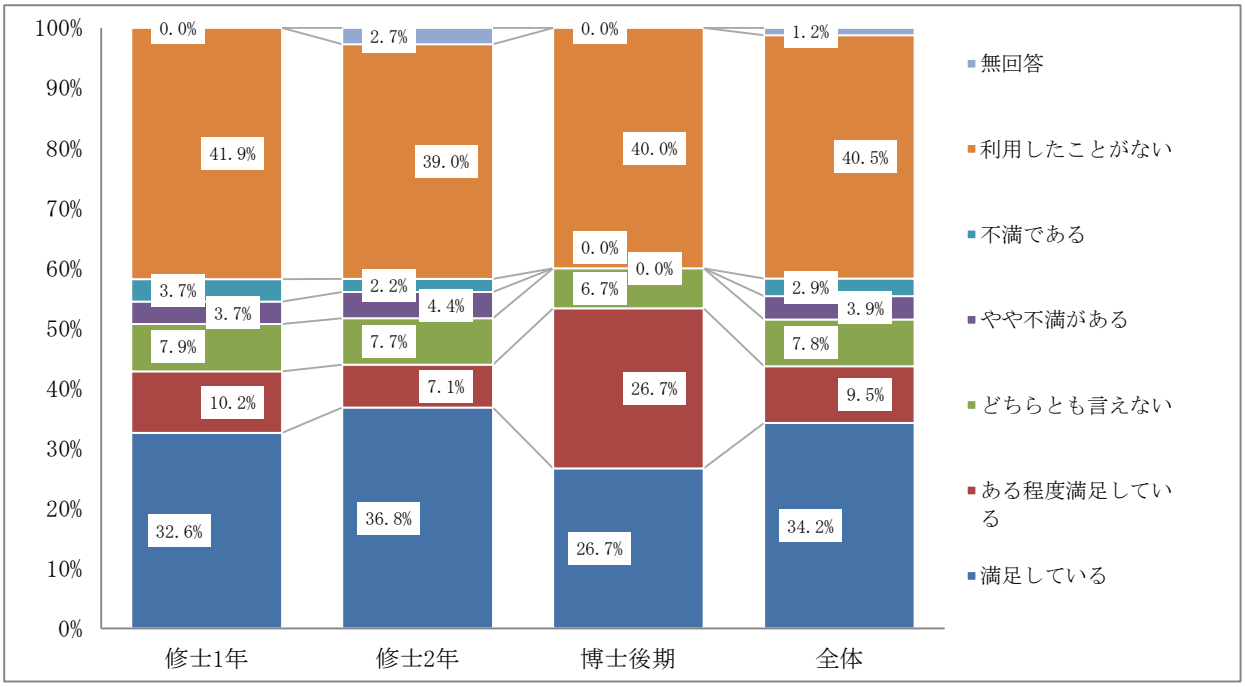

図 8.1.1　新習志野校舎・津田沼校舎の駐輪場

(回答者数)

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 満足している	70	67	4	141
2. ある程度満足している	22	13	4	39
3. どちらとも言えない	17	14	1	32
4. やや不満がある	8	8	0	16
5. 不満である	8	4	0	12
6. 利用したことがない	90	71	6	167
無回答	0	5	0	5

Ⅷ-①-Ｂ　新習志野校舎・津田沼校舎の談話室

津田沼校舎の談話室について、「満足している」「ある程度満足している」と回答した学生の割合は、修士課程 1 年次で 51.6%、同 2 年次で 50.5%、博士後期課程で 40.0%であった。大学院全体では 50.8%となり、この数値を昨年度のアンケート結果と比較するとやや低下している。「不満である」「やや不満である」と回答した学生の割合は、大学院全体で 5.1%となり、昨年度の結果よりも低下している。「利用したことがない」と回答した学生の割合は、大学院全体で 27.7%となり、昨年度の結果とほぼ同じ数値であった。

今回のアンケート結果から、大学院生の津田沼校舎談話室の満足度は低下していると言える。全体の利用率は同等であることから、今後も大学院生の談話室に対するニーズを詳しく調べ、研究活動の合間にリラックスできる環境づくりに務めることが望まれる。

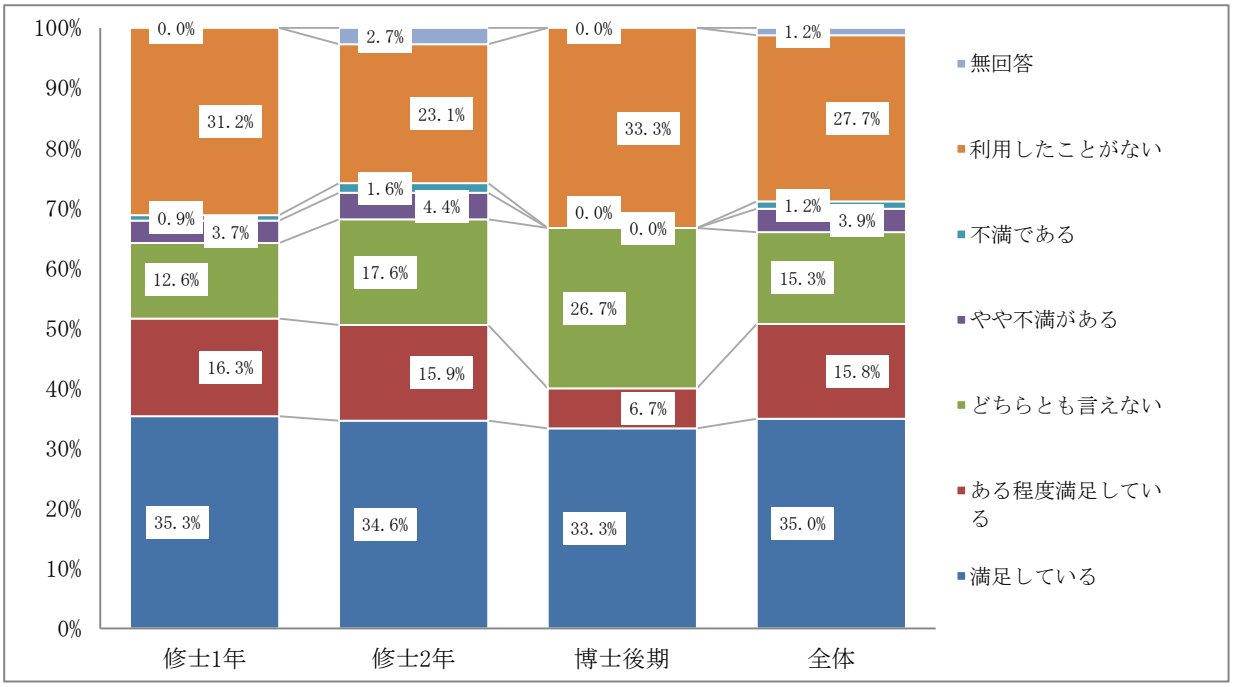

図 8.1.2　新習志野校舎・津田沼校舎の談話室

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 満足している	76	63	5	144
2. ある程度満足している	35	29	1	65
3. どちらとも言えない	27	32	4	63
4. やや不満がある	8	8	0	16
5. 不満である	2	3	0	5
6. 利用したことがない	67	42	5	114
無回答	0	5	0	5

Ⅷ－②　改善を希望する施設・設備（自由記述欄）

喫煙関係
喫煙所の再設置
喫煙所撤廃に伴い、学外での喫煙マナーが悪化した

駐輪場
駐輪場に屋根（雨よけ）を設置して欲しい

トイレ関係
建物の各階に男女トイレを設置して欲しい
8号館女子トイレを洋式にして欲しい

１号館・2号館
1号館のエレベーター増設
研究室が狭い
研究室に換気設備導入
アスレチックジムの運動器具の充実及び利用時間延長

3号館
いつも混雑している

4号館（談話室・工作センター・部室エリア）
談話室の換気
談話室の座席を増やして欲しい
津田沼工作センターの設備の充実及び利用時間延長

その他
夏期節電と冬期イルミネーション、矛盾している
ＮＭＲを早く修理して下さい
マヨネーズを置いて下さい

＜Ⅸ＞大学への要望について

Ⅸ-① 大学に要望したいことや期待することは、何ですか。

A. 教育関係

1. カリキュラムの改革
2. 講義室の充実
3. 実験室や実習室の充実
4. 教育スタッフの充実
5. 授業方法の工夫、改善
6. 単位認定や試験を緩やかに
7. 単位認定や試験を厳しく
8. 新習志野図書館の充実
9. 津田沼図書館の充実
10. 特になし

B. 福利厚生・施設関係

1. 本学学生共済会の充実
2. 本学奨学金制度の充実
3. キャンパスの統合
4. 茜浜運動施設の充実
5. 茜浜運動施設の部室棟の充実
6. 津田沼校舎の部室棟の充実
7. 特になし

Ⅸ-①-A　教育関係への要望

修士課程学生の教育関係への要望として最も多く挙げた項目は、昨年度最も希望が多かった「カリキュラムの改革」を抑え「実験室や実習室の充実」であった。本項目は年を追うごとに要望が増加しつつあり（13.9%→15.7%→17.2%→25.5%）、より高度な研究を実施するための環境を望んでいることがうかがえる。また「図書館の充実」については、津田沼図書館に対する不満が昨年の 5.8%から 7.0%へと年々減少傾向にあったものが一転増加に転じている。これも上記と同様により高度な研究環境の充実を望んでいるものと思われる。

一方で一昨年度急減した「授業方法の工夫、改善」については、昨年度に引き続いて減少しており、授業改善効果が現れているものと推測される。また、「特になし」と回答したものも全体の四分の一近くを占めており、特段の問題もなく充実した研究生活が送れている学生も多くいることを示している。

博士後期課程においては、カリキュラムの改革や単位認定や試験を厳しくと望む声も引き続きあり、これはＴＡ等の講義を通じて改善の必要性を感じているものと思われ、本学への帰属意識の大きさを示していると思われる。

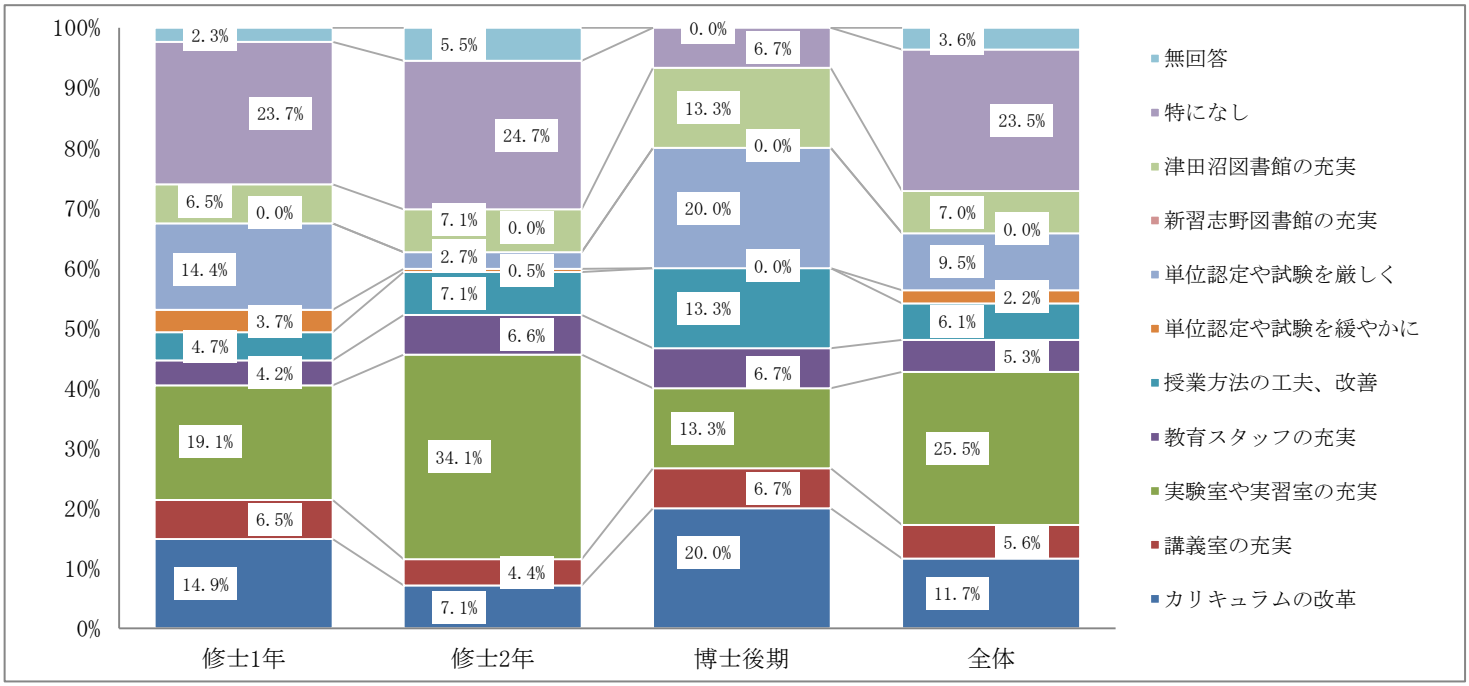

図 9.1.1　教育関係への要望

（回答者数）

	修士１年	修士２年	博士後期	全体
1. カリキュラムの改革	32	13	3	48
2. 講義室の充実	14	8	1	23
3. 実験室や実習室の充実	41	62	2	105
4. 教育スタッフの充実	9	12	1	22
5. 授業方法の工夫、改善	10	13	2	25
6. 単位認定や試験を緩やかに	8	1	0	9
7. 単位認定や試験を厳しく	31	5	3	39
8. 新習志野図書館の充実	0	0	0	0
9. 津田沼図書館の充実	14	13	2	29
10. 特になし	51	45	1	97
無回答	5	10	0	15

Ⅸ-①-B　福利厚生・施設への要望

大学院学生の本学への福利厚生・施設への要望としては、41.7%もの学生が特になしと回答しており、昨年度より 7 ポイント増加している。「本学奨学金制度の充実」を強く要望する学生の割合が昨年度の 40.5%と比較して、本年度は 19.7%と激減していることと合わせて考えると、景気の回復が影響しているのではないかと思われる。しかしながら「本学学生共済会の充実」を希望する学生は昨年度の 12.2%とほぼ同率の 12.9%でありほとんど変化はなかった。引き続き、多くの大学院生が学生生活を続けていくための経済的な支援を求めているといえる。

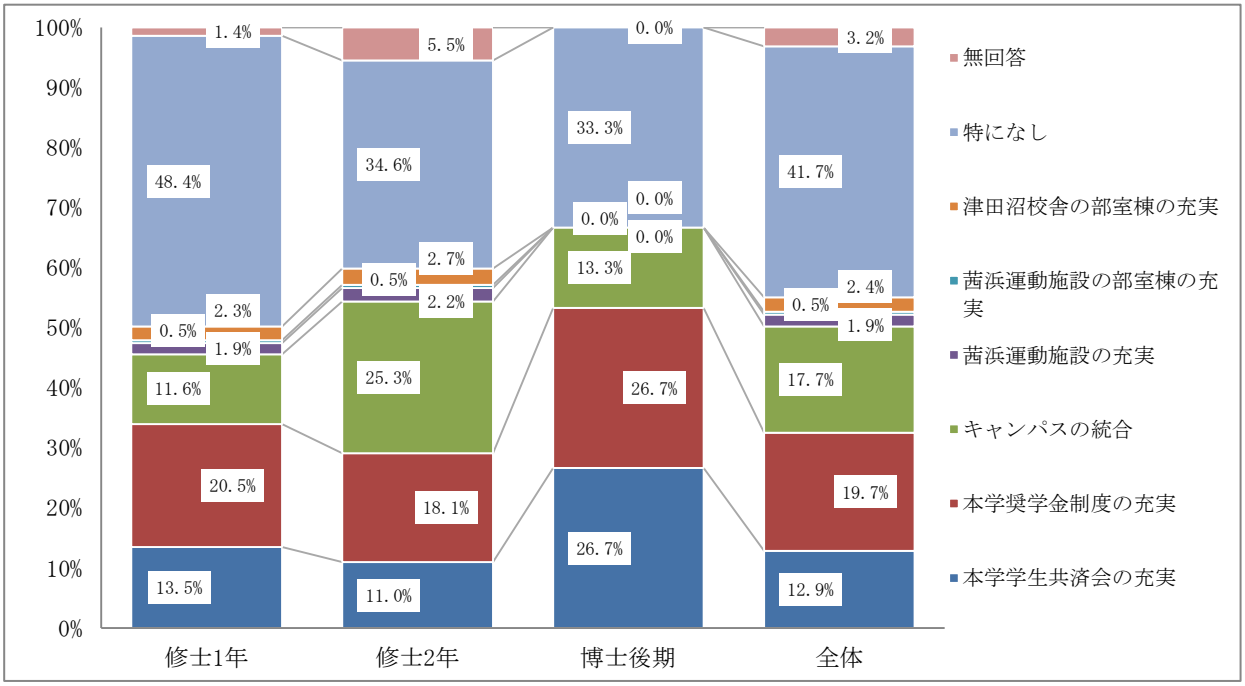

図 9.1.2　福利厚生・施設への要望

（回答者数）

	修士 1 年	修士 2 年	博士後期	全体
1. 本学学生共済会の充実	29	20	4	53
2. 本学奨学金制度の充実	44	33	4	81
3. キャンパスの統合	25	46	2	73
4. 茜浜運動施設の充実	4	4	0	8
5. 茜浜運動施設の部室棟の充実	1	1	0	2
6. 津田沼校舎の部室棟の充実	5	5	0	10
7. 特になし	104	63	5	172
無回答	3	10	0	13

大学院学生生活アンケート調査 2017

発行日　平成 30 年 3 月 31 日

大学院学生生活アンケート結果取りまとめ担当者

◇全般・・・・・・・・・・・・・・・・・・	鈴木　　進	教授	（学生委員会委員長）
	小川　靖夫	局次長	（学生センター）
	森下　進一	部長	（学生センター）
	金井　久美子	課長	（津田沼学生課）
◇プロフィールについて・・・・・・・・・・	南方　英明	教授	（学生委員会委員）
◇入学、授業等について・・・・・・・・・・	内海　秀幸	教授	（大学院教務委員会委員長）
◇学生生活について・・・・・・・・・・・・	秋田　　剛	准教授	（学生委員会委員）
◇進路について・・・・・・・・・・・・・・	坂本　幸弘	教授	（就職委員会委員長）
◇アルバイトについて・・・・・・・・・・・	山本　典史	准教授	（学生委員会委員）
◇図書館について・・・・・・・・・・・・・	屋代　智之	教授	（図書館･情報メディア委員会委員長）
◇学生食堂・購買部について・・・・・・・・	土手内　徹	次長	(CIT サービス)
◇施設・設備について・・・・・・・・・・・	須田　宇宙	准教授	（学生委員会委員）
◇大学への要望について・・・・・・・・・・	脇本　隆之	教授	（学生委員会副委員長）